冥界の巫女

りふぇいる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
冥界の巫女

【Ｎコード】
Ｎ７６００Ｓ

【作者名】
りふぇいる

【あらすじ】
江戸時代初期。そこに……冥界の巫女が誕生するきっかけがあった。
とある社に住む巫女達は、残酷な『運命』を前にしても、ひるまずに立ち向かっていく。
そして、いずれ彼女達は……後世に、強い影響をもたらす。

序幕

淡い月光が照らす山林。
「はぁ、はあっ」
産んだばかりの赤子を抱えて、草木だらけの獣道を走る裸の少女がいた。
「おぎゃ～っ！」
木の枝が頬に引っかかり、その子が泣き出してしまった。
「誰だ！」
男の声がして、身がすくませる少女。
近くの茂みに身を潜め、声のしたほうをのぞき見る。
三度笠（さんどがさ）を手で押し上げ、飛脚の青年が辺りを探っているのが目視できた。
その手には、抜き身の刀が一振り。
「しばらく、ここにいるのだぞ」
「ひぎゃ～っ」
泣きじゃくる赤子をそこに置き、少女は青年の前に立った。
「なっ、は、裸の娘だと？」
血だらけの少女を見て、青年は愕然（がくぜん）としている。
「さようなら」
「なっ、消えた？」
青年がまごついている隙に背後へ回り、少女はその首に手刀を突きつける。
「い、いつの間に――ぐあぁあああああああああああああああ……っ！」
静脈を爪でかき切り、鮮血を辺りに散らした。
「……済まない」
息の根が止まった青年を押し倒し、少女はそう吐き捨てた。
「ふふっ」

真っ赤な血、もっと欲しいなぁ。
「おぎゃ～っ！　あぁま～っ」
血を浴びて恍惚としていた少女は、赤子の泣き声がして我に返る。
「よしよし。すぐに、温かい家屋に送り届けてやるぞ」
草むらのほうに戻り、少女は赤子を右腕で抱き上げる。
「この刀、ちょうだいするぞ」
それから青年が携えていた刀を、少女は鞘ごといただいた。

山から下りてそう遠くない場所に、社があった。
「ここなら、よさげだ」
とても長い石段を、鞘に収めた刀を杖代わりにして上り。
「はぁ、はぁ、くっ」
息も絶え絶えに、少女は何とか境内に辿り着く。
「誰かいるのですか？」
「なっ」
背後から声をかけられ、少女は振り返り様に抜刀しようとするも、足がもつれて転んでしまう。
その弾みで赤子を落としそうになるが、刀を捨てて両腕で抱き留めた。
「ふぎゃ～っ」
「ど、どうなさったのですか？　あなたは、そのような状態で」
壮年の男性が、少女に手を差し伸べる。
その身なりと言動、雰囲気を感じ取り、少女は男性に赤子を託していた。
「済まぬ。この子を、預かってはくれまいか？」
「なんですと？　あなたに、一体何があったのですか。まずはそれを説明なさい」
おもむろに起き上がった少女は、その男性をにらむ。
男性はその少女の左目を見て、息を飲んだ。

「理由は聞くな。頼むから、この子を……」
男性の頭上に輝く、霞(かす)んだ月を見て。
「朧(おぼろ)……昭示(しょうじ)を、私の代わりに育ててくれまいか」
少女は、その名前を思いついた。
「あなたのような幼い娘が、何を言うのです。何かあったのなら、正直に話しなさい」
「悪いが、そんな時すら……惜しいのだ」
よろよろと刀のほうへ歩き、少女は屈んでそれを拾い上げる。
「なっ、待ちなさい！」
男性の手が触れる前に。
少女は社にある大きな樹木を、一息に跳び越えていた。

鞘に収まった刀を杖代わりとし、少女は山にある洞穴に戻っていた。
「なんだ、帰って来たのか」
「……」
月明かりが差し込む洞穴。
その中にいる声の主を見つけて、少女は静かに刀を抜いた。
「オレが恋しくて、帰って来たんだろう？」
この山に住む、人の姿をした鬼。
「お前がクソガキを始末したおかげで、オレもお前を好き放題にできるんだしなぁ。クッケケケケケッ！」
「鬼が」
「あんっ？　なんだとぅ？」
「この鬼畜が、と言ったんだ」
「オレが、極楽に仇(あだ)なす地獄の鬼だというのか！」
「そうだ」
少女が鬼と言った事を認めたら。
本当の鬼らしく、男は顔を真っ赤にしている。

「贄(にえ)として差し出された年端もいかぬ人間の娘をはらませ、その娘から産まれた私をも毒牙にかけた罪を、この私が誅(ちゅう)してくれよう」
「なんだとぅ？　貴様、今まで可愛がってやったのに。そのツラはなんだあああっ！？」
「産まれた子が男だからといって、踏み潰そうとした貴様を捨て置くなどできぬ」
少女は静かに、刀を左手に構えた。
「斬り捨てる」
「腐れ女がぁあああっ！」
男は素早い動きで、少女の背後を取る。
その右腕をつかんで、勢いのままに押し倒そうとするも。
「ふんっ」
「なにいっ！？」
冷静な少女は、自身の右腕と男の右手首を斬り落とした。
「う、うぐいゃあああああああああっ！？」
「隙あり！」
少女は振り返り様に、平静さを欠いた男の左胸に刀を突き立てる。
「ヌガウアァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！」
「慢心(まんしん)だな。それが、命取りになったとあの世で思い知るがいい」
「グ、ガ……ッ」
男が、力尽きて倒れる。
「私も、か」
刀から手を離し、膝を崩す少女。遠のく意識を保とうと、深く呼吸する。
しかし、それも長くは続かない。少女はうつぶせに倒れてしまう。
「昭示……か」
せめて、せめて大きくなるまで傍(そば)にいたかった。
それも、無理なようだ。
少しの間だけでも、母として生かしてくれて。

「あり、がとう」

これは、徳川が江戸幕府を開く少し前、一五九九年の頃。
『鬼の哭(な)く山に、正宗あり』
人々の間で、こう噂になったそうだ――。

第一話

「はぁ～。ったく、やんなるぜ」
竹ぼうきを片手に、境内を掃除している若い男女がいた。
「昭示さん。のんびりとしてないで、掃除を続けてくださいな」
「神木の落ち葉が多すぎだろ」
「文句を言わないで、手を動かしてくれませんか」
「わ、わりい。芳藍（ほうらん）」
十四歳となった昭示を注意した女の子は、天空芳藍（あまぞらほうらん）という。
剣技の腕も確かで、家事全般もでき、器量もいい。町でも評判の十一歳の少女だ。
「竹ぼうきで素振りをするのはよろしいですけど、境内の掃除が最優先ですよ」
「しつこく言うなよ。しわが増えるぞ」
「何かおっしゃいましたか？」
ふたりは白装束と藍色の袴（はかま）を着こなしている。
昭示は竹ぼうきを下ろし、芳藍をじっと見つめていた。
「こらっ。きちんと掃除しましょうね」
「へ～へ」
「返事は一度で充分です」
「はい」
「よろしいっ」
芳藍はこの社の宮司（ぐうじ）のひとり娘。
昭示の頭が上がらないのは、そういった理由がある。
「ここはのどかだよなぁ」
「ええ、そうですね」
藍布（らんふ）で束ねられた長い黒髪が、風になびいている。
風さえも嫉妬（しっと）したかのような芳藍の姿に、昭示は見とれてしまう。
「昭示さん」

注意されて、竹ぼうきでせっせと落ち葉を集める昭示。
「まったくっ。よそ見やずるけたりしたらいけませんよ」
「ごめん。でも、もうそろそろいいだろ？」
「もう少し頑張りましょう」
年齢が近いというのもあってか。芳藍はよく昭示の傍にいて、きびきびと雑務をこなす。
――くぅううっ。
なので、腹の虫が騒ぐ音もよく聞かれてしまう。
「うふふふっ」
右手に頬を預けて、嬉しそうに笑う芳藍。
「さっさと終わらせて、朝餉（あさげ）食いたいんだけどなぁ」
「でしたら、しばしの辛抱を。わたくしは台所のほうに参りますので」
芳藍がそう口にした時、落ち葉が風に散ってしまった。
「あら？　嫌そうですねぇ」
うふふと笑い、芳藍は落ち葉を追いかける。
「芳藍の分もやっとくから、俺だけ飯を大盛りな」
「はぁっ」
「な、なんだよっ？」
じぃっと、上目使いに昭示を見つめる芳藍。
「いえその。いつもよく食べますねぇって、感心していたんです」
「わ、わりぃのかよ？」
「そうではないですよ。ただ」
目を伏せてから、芳藍は空をあおいだ。
「んっ？　ただ、なんだ」
「いえ、やっぱり気のせいです」
昭示に目線を戻して、芳藍はにこにこと微笑む。
「はっ？」
「大盛りですね。承（うけたまわ）りました」
身を翻（ひるがえ）して、芳藍は竹ぼうきを片手に、鼻唄交じりで台所へと向

かう。
「あ、ありがとな」
照れながらも昭示が感謝の意を伝えると、芳藍はにこにこと笑って振り向く。
その笑顔に、昭示の心臓がはねた。
「さ、さて、掃除掃除っと」
新たに秋風が吹く前に、昭示は落ち葉集めを再開した。

季節が秋から冬に移り変わる時、奇妙な事件が起きた。
「おい、近くに雪女が出たらしいぞ」
社司(しゃし)のひとりが、朝餉の後にそんな話題を振る。
「本当か、それ」
「ああ、らしい証言もある」
こほんっと、咳払いをする宮司。
「詳しく聞かせなさい」
「あっ、はい」
宮司が促(うなが)したので、後片付けをしていた昭示と芳藍も聞くはめになった。
ふたりは自分の席に戻り、正座する。
「雪峰(ゆきみね)にて白布(はくふ)をまとった雪女が、雪崩(なだれ)で埋もれた人間の女を救い出した。という話が、町にて吹かれていたのです」
「あの、正宗の墓標ですか？」
言いながら宮司は、ちらりと昭示を見やった。
「そ、そうです」
正宗の墓標。そこは、鬼を討った者が振るったという刀が突き刺さっていた洞穴だ。
ちなみにその正宗は宮司の愛刀として、この社が管理している。
それを鑑定したのは、他ならぬ宮司である。
「そこより下のほうだと聞いてます」

「麓(ふもと)、ですね？」
宮司は四十歳。正宗を振るって、熊や野盗(やとう)を斬り捨てたという武勇伝がある。
社だけでなく、町のほうでも勇名を馳せている猛者だ。
「その付近だと思われます。救助しようと駆けつけた人が、その雪女を目撃したらしいのです。声をかけようとしたら、忽然(こつぜん)と姿を消したという証言もあるようで」
「ふぅむ。何か事件が起きる前に、明らかにする必要がありますね」
「それは危ないと思うぜ」
「ふむっ？　昭示、どうしてそのような意見を？」
その一言で、広間にいる全員が昭示に目線を向ける。
「単純に考えてみなよ。昔はさ、あの山に大雪が降るなんてそうそうなかったんだろう？　それが長年も続いているのが雪女の仕業なら、安易に相対するのは危険じゃないか？」
雪峰と呼ばれる山は春夏秋冬(しゅんかしゅうとう)、麓まで雪で真っ白だ。
そうなる前は緑豊かで、動物も数多く生息していた。
つい最近になって雪を被るようになり、ちまたでは雪峰と名称を改められたほどだ。
「天空さんも、そんな簡単に決めるのはよくないぜ」
「昭示、あなたは気にならないのですか？」
「ならないと言えば嘘になる。でももし、雪女がいるとして。勝手な行動をしてさ、怒らせてしまったらどうするんだ？」
「人を助けた優しさがあるのならば、穏やかに話し合えるでしょう」
「確証は？」
「ありません」
宮司の自信たっぷりの一言に、昭示はがっくりとうなだれる。
「このまま放置すれば、不安になる方々も増えてしまいます。それに、不用意に雪山に踏み込む者が事故に遭ってしまえば、それこそ問題です。早いうちに雪峰を調査する必要があると、昭示は理解できますか？」

「だったら、勝手にやってくれ。巻き込まれるのはごめんだ」
昭示以外の五人の社司は、やる気満々のようだ。
「こほん。そうですね。では、誰が雪女の下に参りましょうか」
宮司の一言をきっかけに、社司全員が手を挙げる。
そんな様子を見兼ねて、唯一の巫女である芳藍が。
「あの、その雪女を……討伐なさるのですか？」
不安そうに、そんなことを聞いた。
「敵対するならば、容赦せず討ち取るまで」
「そうだよな。人間を山から遠ざけようと、雪崩を引き起こしたって可能性もある」
「悪い噂が立たないよう、雪害（せつがい）にのまれた人間を助けたっていう自作自演かもしれないしな」
「……」
社司の言葉を耳にして、芳藍はちらりと昭示を見やった。
「んっ？」
それに気がついた昭示。芳藍はすぐに目をそらした。
「こほんっ。あなた達は血気盛んですね。雪女が敵対しない限り、そのような暴挙は許しませんよ」
宮司が社司の皆を叱りつけている横で、芳藍は胸を撫で下ろしていた。
「今日（こんにち）は準備だけをして、明日（みょうにち）に確かめるとしましょう。いいですね？」
はい、と社司の皆が返事をする。
「昭示と芳藍には、留守番をしてもらいます」
「承知した」
「はい」
宮司は必要事項を伝えて、膳を手にして席を立った。
「父上、食膳はわたくしたちが片付けますから」
「ふむっ？　そうか、いつも済まないな。芳藍」

「なんで、俺が洗い物に付き合わなくちゃならないんだ？　片付けるだけかと思ってた」
「昭示さんが朝餉をほとんど平らげるからですっ」
「いいじゃないか。炊いた玄米飯も一粒も無駄にならないし、喜ばしいことだろ？」
「そうだとしても、当番なんですから。義務は果たしてもらわないと」
当番といっても、実際には芳藍から家事について指導されるだけ。以前、芳藍が熱を出して倒れた時、この社に住まう男全員は何もできないという失態を犯した。
芳藍は、またそうならないように配慮しているのだ。
「そういやさ」
「はい？」
「芳藍は、雪峰に行きたいと思わないのか？」
「わたくしは、この社を守る義務がありますから」
「そっか。俺も留守番だしなぁ」
「……」
お椀を手桶の水で洗いながら、ふたりは他愛のない話をしていた。
ただ、芳藍は上の空のようで。
「芳藍」
「え、あっ！」
昭示が声をかけたら、芳藍はお椀を落としそうになる。
すかさずそれを拾おうとした昭示。お椀だけでなく、芳藍の手を握ってしまった。
「そ、そのっ」
お椀を取り戻し、芳藍はそっぽ向いて洗い物を再開する。
「んっとさ。芳藍。何か、悩みでもあるのか？」
「ありませんよ」
いつもの芳藍。

「ただ、その」
「んっ？」
「嫌な、予感がするんです」
だと感じた昭示だったが、芳藍が不安を打ち明けたことに安堵(あんど)する。
「予感、か。まあ、それが的中しないことを祈るだけだな」
「昭示さんは、雪峰に登りたいと思いますか？」
「俺は、嫌だな。どうもあの山は好きになれない。とはいえ、世話になってるんだよなあ」
この社は、雪峰の雪解け水や天然氷室の恩恵を得ていた。
それらがあるおかげで、水に困らず、食物も長持ちで、芳藍のおいしい料理がいただける。
「そうですか」
芳藍はほっと胸を撫で下ろす。
「父上から申しつけられた通り、わたくしと昭示さんは明日に留守番ですね」
「それがどうかしたのか」
「その、ふたりきりですから。長々と稽古(けいこ)ができますよ？」
「えっ」
それを聞いて、思わず固まる昭示。
「あら？　嫌そうですね」
「違うって。芳藍は、俺なんか相手にしてもつまらないだろっ」
武芸に関しては昭示より、芳藍のほうが上である。
「そうでもないですよ。昭示さんは、なかなか筋がよろしいですし」
「へ～へ」
「こらっ。返事はきちんと一度です」
頬をふくらませて昭示に詰め寄る芳藍。
白いもちみたいな両頬を見て、昭示はすかさず。
「ぷひゃっ！？」
指先で両頬をつついて、中の空気を吐き出させてやった。

「な、何をなさるんですっ」
情けない声を出したのが照れ臭くて、芳藍はそっぽ向いて洗い物を急いでいる。
「悪い悪い。これさっさと終わらせて、皆の準備を手伝ってやらないとな」
「そ、そうですね」
芳藍の横顔を見て、その不安を感じ取る昭示。
明日に何も起こらないでくれよと、昭示は神木に祈った。

しかし、その祈りは届かなかった。
「えっ」
「社司の五人が……き、斬り殺されたって？」
昭示と芳藍は皆が出払った後、ふたりで稽古や雑務をして過ごしていた。
夕刻、ふたりが境内を掃除していたところ。町人達が社を訪れ、ふたりは彼らの口から事態を知る。
「父上は、父上はっ！」
「落ち着け、芳藍」
「わたくしが、きちんと止めていれば……止めていればっ」
「落ち着けって言ってんだよ！」
取り乱す芳藍の両肩に手を置いて、昭示はその潤んだ瞳をじっと見つめる。
「昭示、さん……？」
混乱していた芳藍は、落ち着きを取り戻したようだ。
「んで、皆はどこで殺されてたんだ」
「白い雪に、赤い血が染み込んでて。何かと思って近づいたら、麓で斬殺された五人の亡骸（なきがら）を見つけたんです。町に知らせようとしたら、また悲鳴が聞こえてきて。命からがら逃げてきたところです」
「そうか。宮司は――藤真（とうま）さんは、確認してないんだな」

「え、ええ」
ここに来た人達は皆、宮司を頼ってここにいる。
が、その宮司すら雪峰におもむいたと知り、彼らは絶望していた。
「でも、あの様子では……」
宮司も、無事ではないと？
とてもじゃないが、昭示にはそうは思えなかった。
「芳藍、ここにいろ」
「えっ？」
「雪峰に行く。何があったのか、この目で確かめてくるよ」
「だ、だめですよ」
芳藍から手を離し、昭示は社内で寒地に出かける支度をしようとしたが。
震える手で二の腕をつかむ芳藍の様子を見て、躊躇（ちゅうちょ）する。
「お願いです。どうか」
行かないでくれと、ひとりにしないでくれと、潤んだ瞳が訴えている。
「仲間を殺されて、じっとしていろなんて無理だ。藤真さんの安否が不明なのに、ここで待つのも嫌だね。育ての親を見捨てるなんざ、俺にはできない」
「でも、もし返り討ちに遭ったら……」
「芳藍の俺に対する評価が何となく解った。そんなに俺は頼りないのか」
「そ、それは……えっと」
ぎゅっと強く袖を握って、芳藍は涙目で昭示を見つめている。
「と、とにかく、俺は行くぞ」
「い、嫌です！　わたくしは、わたくしは昭示さんに傍にいて――」
「ダメだ。このまま放置したら、藤真さんまで助からないかもしれない」
「……っ！」
もう何を言っても聞かないと判断したのか、芳藍は。

「何の、真似だ？」
竹ぼうきを下段に構えて、昭示の前に立ちはだかる。
「どうしても、行くというなら」
自分を倒してから――そう、言いたいのかよ。
「まだ、真剣があったよな？」
「えっ」
「倉、だな」
身構える芳藍を無視して、昭示は倉のほうに出向く。
「まっ、待って！」
しつこく止めようとする芳藍を見て、昭示は溜息をひとつ。
「芳藍、お前は実の父を見捨てるのか？」
「そ、そういうつもりは」
「だったら、ここにいろ。芳藍の代わりに、俺が真偽を確かめてくる」
「い、嫌……です」
「わがままを言うなよ。八面玲瓏（はちめんれいろう）とうたわれてる、芳藍らしくないぞ」
「……っ」
「ここで時間を食ってたら、生存しているかどうかも危ういんだ。芳藍、解ってくれ」
「嫌ですっ！　わたくしは、昭示さんまで失ったら……もう」
泣いて昭示に抱きついた芳藍は、普段の凛然（りんぜん）とした姿とは違い。
年相応の、か弱い女の子だった。
「わたくしは、昭示さんが……昭示さんが」
皆まで言わせず、昭示は。
「んむっ」
芳藍の唇を奪った。
「あっ・・・」
ぼんやりとする芳藍を放って、昭示は。
倉にて真新しい刀を見つけ、それを帯に差して雪峰へと走った。

藍の袴に白衣の軽装だけだと凍えるなぁ。
他の装備はというと、足袋（たび）と草履（ぞうり）だけなので、寒さが身に染みる。
「よっと」
樹木に手をつきながら、昭示は雪の積もる道を慎重に進む。
「あれは……？」
ふと、道中に血の臭いがして足を止める。
「なんだ、ありゃ」
目を凝らすと、下のほうに赤が混じる雪景色があった。
昭示は木の幹に置いていた手を離し、ゆっくりと雪の斜面を滑り降りる。
「社司の、皆か……？」
その惨状に、息を飲む。
白い雪が、鮮やかな紅に染まっている。
滑降の際に草履と足の間に雪が入ったので、それをかき出してから、歩いて現場に近づいた。
「鋭利な刃物で、斬られたのか」
全員、一太刀で斬り伏せられているのが解る。
「背中を、正面からじゃないのか」
社司は全て、うつぶせに倒れている。
傷は背中に一文字のみ。
「なんで、そうでない人もやられているんだ？」
服装からして町人が三人、首をはねられて死んでいる。
「宮司は、やっぱりいないな」
社司の近くの血痕は渇いて黒みがあるが、町人のは新しく真っ赤だ。
「んっ？」
誰かの足跡の横に、細くて見えにくかったが、雪に赤い線が走っている。

何か鋭いものを引きずったような痕跡は、上のほうに続いていた。
「何が、あったんだよ」
言いながら、昭示の足は上へと向かっていた。

「ここ、か」
麓から少し登ったところに洞穴を見つけて。
そこをのぞき込み、昭示は目を疑った。
「昭示か？」
宮司が、その中で。
「……」
裸の少女と、対峙していたからだ。
――子どもの雪女だったのか。
「手を貸してくれ。こいつが、この雪女が全ての元凶なんだ！」
艶（つや）のある青紫色の長髪を振り乱して、雪女は清らかな空のような瞳で、昭示を凝視（ぎょうし）している。
「だから、お前も刀を抜くんだ！」
雪女は白い布を凍らせたのか。それを刀のような形状にして、宮司と斬り結んでいる。
「……っ」
何度も刀を打ちつけられて、布の形が崩れ始めた。
雪女は攻撃を打ち払い、往（い）なしているが、それも長続きしそうにない。
「そうかよ。そういうことか」
昭示は静かに鞘から刀を抜き、宮司の下へと歩む。
「そうだ。昭示、皆の仇（かたき）を討ち取るんだ！」
宮司の横を、通り過ぎる――ことはせず。
「ぐぁあああああああああああああああああああああああああああああああっ！？」

昭示は、その背中に一太刀浴びせた。
「……？」
雪女は、何が起きたのか解っていないようだ。
「あんた、誰だ？」
言いながら、昭示は宮司から距離を取る。
「昭示、な、何を……するんだ」
――まだ、立っていられるか。
どうやら、傷が浅かったらしい。
姿が藤真さんだから、ためらっちまったのか。
「悪いが、俺の知っている宮司はそんな言葉遣いじゃない。社司と町人を殺したのは、あんただな？　そうなんだろう！」
雪女の武器を一見して、昭示は確信した。
あそこに倒れていた八人は、鋭い刃物で斬り殺されて、赤い血を流している。
凍らせた布が白いままである以上、雪女は犯人ではない。
となれば、疑わしいのは――ひとりになる。
「くくくっ。育ての親を、裏切るのか？」
「そうだとしても、過ちを犯せば恩義に準ずる必要はない。少なからず、今のあんたは俺の知っている天空さんじゃないしな」
「そうか。やはりそうか」
「何が言いたい？」
不気味に笑う宮司――ひとりの暴漢は、昭示と雪女を交互ににらんだ。
「クッケケケッ！　ようやく、ようやく現世に干渉できる肉体を手に入れたのによおっ。これじゃあ、すぐにでもあの世に逝けってなっちまうじゃねぇか！」
「天空さんの肉体を手に入れただと？　貴様、何者なんだ」
「クッキャキャッ！　このまま、このまま死なんて受け入れるものか！　オレは、オレは神なんだ！　極楽も地獄も現世も、全てがオ

レのものなんだ！」
身構えて前に踏み込み、昭示が斬りかかろうとしたら。
「斬れるのか？　昭示、実の父親の魂を宿したこの肉体を斬れるのかあっ！」
「〜〜っ！？」
その言葉に動揺し、昭示は動きを止めてしまった。
「そこだあっ！」
「なにっ？」
暴漢は正宗を下から振り上げ、昭示の握る刀を弾き飛ばした。
「じゃあな！　手始めに、あの女から穢(けが)してやるよぉ！」
昭示は刀を拾い上げ、飛び去る暴漢の後を追おうとしたが。
「くっ」
思わず、刀を落としてしまった。
「……うっ」
「だ、だいじょうぶか？」
「……構わず、お先に」
雪女のほうも、両手が麻痺しているようだ。
これは、寒さではない。
あの暴漢の、馬鹿力だ。
「悪い、先に行くぞ」
こくりと、静かにうなづく雪女。
昭示は芳藍の下へと、急いだ。

沈む夕日。
芳藍は竹ぼうきを片手に、逆光で輝く雪峰を眺めていた。
「昭示さん……」
父親から、聞かされていた。
昭示は、鬼姫(きき)より授けられた子なのだと。
幼少の頃にそれを聞かされた芳藍は、昭示を恐れていた。

それでも一緒の時間を過ごして、触れ合ったり、話したりして。
いつの間にか、芳藍は昭示を意識してた。
「あたたかい」
思わず、唇に指が触れる。
「芳藍さん……！」
「え？」
ぼうっとしていたところに名を呼ばれて、芳藍は後ろを振り返る。
この社に集まっていた町人が、血だらけで倒れていた。
「見つけたぞ、芳藍」
聞き覚えのある声がして、芳藍は顔を上げる。
「父上？　無事――」
だったのですね、と言う前に。
異様な気配を感じ取り、芳藍は無意識に後ずさった。
「どうしたんだ？　芳藍、どうして逃げる」
竹ぼうきを下段に構える芳藍。ざざっと草履を地面にこすらせ、暴漢から充分な距離を取った。
「人を斬り殺しておいて、あなたは逃げるなと言いますか？」
「こいつは、芳藍を襲おうとしていたのだ」
「嘘ですね。その人からは、殺気を感じなかった」
「それは、こいつが弱いからだろう」
「なら、その服の返り血。赤いのもあれば黒いのもある。少し前にもあなたが、他の誰かを斬り捨てたという証拠ではないですか？この痛いほど伝わる殺気も、尋常（じんじょう）ではありません。あなたは、誰なんですか！」
「ちっ。こちらが下手（したて）に出れば、あれやこれやと言いやがって。可愛げのない女子（おなご）だなぁあああああっ！」
「きゃっ」
正宗を振り下ろされ、芳藍はすかさず竹ぼうきで打ち払う。
「おとなしくしてろよ。今からお前を、お前の柔肌を……血の色に染めてやるんだよお！」

「あなたは、父上ではない？　何者なのですか」
「クケケッ！　昭示と同じような台詞を吐きやがって」
「昭示さんが？　あなた、昭示さんに何をしたのです！」
「殺してやったのさ！　あいつはもう、現世にはいないんだよぉ！」
その言葉で、芳藍は気が動転してしまった。
「いやぁあっ！」
下から振り上げられた正宗に、竹ぼうきが切断される。
「そらあぁあああああっ！」
「つうぅ！」
ひるんだところに刃を振り下ろされ、芳藍は左肩を斬られてしまう。
「ケケケケッ！　いいよなぁ、白い肌が赤く染まるのは。興奮するぜえ」
「なっ、うぅ」
短い竹では、とても太刀打ちできない。
右手で溢れる血を押さえ、芳藍は後退しながら辺りに何かないか探す。
「その服を剥(は)いで、女として生きれないように穢してやろうかぁ？」
「やって、ごらんなさい」
「強気だなぁ？　愛する男を失ってるのに、まだ生きる希望を見出しやがるか」
「あなたの言葉など、信じるに値しません！」
振り下ろされる刃。
握り締める竹で刀身を横から叩き、芳藍は下がりながら斬撃をそらす。
「しぶといなぁ？　女は純潔を差し出して、男に犯されてればいいだけなのによぉ！」
「女性を、見下さないでほしいものですね」
そんなやりとりを繰り返しているうちに、芳藍の意識が朦朧(もうろう)としてきた。

出血が、あまりにも酷い。
それに、攻撃を打ち払うたびに握力がなくなってきている。
「あっ」
後ろを見ずに攻撃を往なしていたからか。
芳藍は石ころにつまずいて、転げてしまう。
「クッケケケ！　芳藍、死ねぇえええええええええ！」
もう、防げない。
迫り来る刃に恐怖し、芳藍は目を閉じた。

「な、なんだとぉ？」
ぽたぽた、と。
芳藍の顔に、血が滴(したた)り落ちる。
「ごめん、芳藍」
聞き覚えのある声がして、芳藍はゆっくりと目を開く。
「昭示さん？」
芳藍に突き立てられそうになった、正宗を。
昭示は、右手でつかんで食い止めていた。
「ちっ。だが、このまま押し込んぢまえばいいんだぁぁあっ！」
それ以上、進ませまいと。
昭示は、握力だけで正宗をへし折ってみせた。
「ば、バカなぁっ！」
武器を失って、動揺したところを逃さず。
昭示は左手に握る刀を、暴漢の左胸に突き刺した。
「ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッッ！」
暴漢は狂乱し、自らの胸をかきむしっている。
「昭示、お前は実の父を殺すのかあっ！？」
「天空さんの肉体を乗っ取ったヤツなんて、父親として認められないな」
耳を疑う芳藍。

それに構わず、昭示は芳藍を庇って前に立つ。
「何を言ってる？　お前は、オレと同じなんだよ。同じ、鬼なんだよおっ！」
左肩を押さえながら、芳藍はおもむろに起き上がる。
昭示は杖代わりにと、芳藍に鞘を渡した。
「感じるだろお？　斬って血を見るたびに、鬼として覚醒せんとする自分が？」
「昭示さん」
「芳藍、あの男の戯言（ざれごと）に耳を貸すな」
ふと、芳藍は折れた正宗からもれる何かを視認した。
その青白いものは、正宗に込められた怨念。
父親がもののけに憑（つ）かれたのだと知り、芳藍は悔しさに涙する。
「クッケッケケケ！　オレはこれが折れちまったからもう限界みたいだが、お前の鬼の血はなぁ。何かを、赤く染めないと落ち着かなくなるはずだぁあああっ！」
渡された鞘をぎゅっと抱き締めて、芳藍は目をそらす。
暴漢は後ろに倒れて――ついに、事切れた。

「父上……」
芳藍は屈んで、その顔をうかがう。
その表情は安らかとは言えず、苦悶に満ちていた。
鞘を脇に置いて。
せめて、瞳だけは閉じさせようと手をかざしたら――。
「なっ」
殺気を感じて、芳藍は反射的に鞘を握り締める。
身を翻しながら、振り下ろされる刀を弾き飛ばした。
その一撃で刀身は折れて、柄（つか）も地面に転がり落ちる。
「昭示、さん？」
芳藍の額から、大量の汗が流れ落ちる。

「に、げろ。芳藍……！」
「な、何を……？」
父親の次は昭示に刃を向けられ、打ちひしがれる芳藍。
も、強く歯を食い縛り、芳藍は昭示と現実に向き合う。
「昭示さん、どうしてしまったのですか？」
鞘を杖代わりにして立ち上がり、芳藍は頭を抱えて苦しむ昭示に呼びかける。
「うあぁあああああっ！」
彼女からおもむろに離れ、昭示は欠け落ちた刀身を拾い上げて。
「芳藍、許せ……！」
その刃先を喉元に突きつけようとする。
「それはいけません！」
「〜〜っ！？」
体当たりで昭示にぶつかり、その勢いに任せて神木に張りつけにする。
欠けた刃や鞘は、その拍子（ひょうし）に落ちてしまった。
「自刃なんて、許せません」
「芳藍、芳藍……！」
「諦めないで。昭示さんは、何よりも強い方だと信じています！」
言葉だけでは、物足りなくて。
芳藍は、昭示に接吻をした。
「ん、んんっ」
その想いを拒むように押し返され、逆に芳藍が張りつけにされた。
「昭示さ――がふぁあああっっ！？」
腹を殴打され、芳藍は吐血した。
「あっ、がほっ！　げぼおっ！」
胃の中の物が、逆流する。
「な、や、やめ――ふっぐぁあああああっ！」
腹部を殴られ続けて、意識を失いそうになる芳藍。
薄れる意識を保つべく、唇を切るほど歯を噛み合わせ。

芳藍は、暴れ狂う昭示の目を見つめ続けた。
「キャキャキャッ！」
だめだ。もう何も、届かない。
弱気になって、このまま眠ってしまいそうになった時。
「クッキャアア！？」
不意に、昭示の四肢が凍りついた。

「……鬼の血を引く子よ」
この、凛（りん）とした声の主は？
「ゆ、ゆき……お」
芳藍はそれを見つけ、声を出そうとするも。
「くっ」
吐血して、うつぶせに倒れてしまう。
芳藍は息も絶え絶えながら顔を上げ、昭示と雪女が向き合っているのを目視した。
「……ふふっ」
白い布をまとう雪女は、芳藍を流し目に見る。
殺生はしないと、目が語っているような気がした。
「……温もりを、忘れないで」
粉雪が辺りに舞い散り、冷ややかだけど気味の悪い感じはない。
まるで、暑い夏に河川で戯（たわむ）れるような――そんな、心地のよい涼しさだった。
「……愛する人を、思い出しなさい」
昭示をじっと見つめて、雪女は静かに問いかけている。
雰囲気からして、それは子をたしなめる親――ではない。
芳藍は、雪女が昭示の母親ではと思い、社での皆のやりとりを不安ながら聞いていた。
もしかしたら、昭示を迎えに来るのかもしれない。そんな不安もあった。

「な、お、俺は……」
「……あなたは、人なの。鬼ではない」
雪女の言葉は、耳だけじゃなく。
心にも、深く響いてくる。
「……安らかに」
何だか、眠い……？
うつろな意識の中、芳藍はそれを目の当たりにした。
父親や町人の亡骸が、白い塵となって散ってゆくのを。
「……おやすみなさい」
その眠気に逆らえず、芳藍は瞳を閉じてしまった。

第二話

「う、くっ」
「おや、起きたのかい」
目覚めてすぐに知らない声がして、芳藍は飛び起きようとした。
「ぐ、ああ……くふっ！」
が、腹に差し込む痛みで、身動きできなくなる。
「無理しちゃいけないよ。とにかく寝てな」
「はぁ……ふぅ……うぅっ。な、なにが」
「だから、寝てろって言ってんの。聞こえないのかい？」
「あ、なたは……？」
ちらりと芳藍が横を見やると、そこにはあぐらをかいている女の人がいた。
短い髪は茶色で、その瞳も黒みがかったこげ茶。
着ている服は厚手のもので、三度笠の下に巾着や大きな袋物が置いてあるのを見ると、旅人のよう。
「あたいかい？　あたいは、刻翔時充（ときとびときみつ）ってんだ。気軽に下の名前で呼んでちょうだい」
第一印象は明るくはきはきとした、人当たりのよさそうな女性だ。
「んで、何があってこうなってるのか？の答えだけど。あんたらふたり、外で倒れてたんだ。あたいが屋内に運んで、処置してから布団に寝かしてやったのよ」
「そ、そうでしたか」
「無理なさんなって。あたいも昨夜から今朝まで、付きっきりで眠いんだけども」
芳藍の隣の布団には。
「昭示さん……」
が、横になっていた。
「無事だよ。寝てるだけさ」

「あ、あの」
「いいから、おとなしく寝ときなよ。すぐに動こうたって、傷が開くだけだもの。これ以上悪化させたくなければ、しっかり休みなさい」
「ありがとう、ございます」
「礼はいいよ。勝手に上がり込んだんだ。泥棒と言われるほうが筋が通っている気がするんだけどねぇ」
「そ、そのような――うっ」
「だ～か～ら、おとなしくしてなって。いちいち受け答えするあたいもあたいだけどさぁ」
芳藍は口を結び、時充と名乗った女性の顔をじっと見つめる。
「「……」」
しばらくして。
「悪い。あたいが悪かった。支障がない程度に話しなさい」
「あ、はい」
時充は視線をそらし、ばつが悪そうに頬をかいていた。
「えっと、衣服がわたくしの部屋にあるので。取りに行ってもらえませんか？」
布団に入っていて、芳藍は気がつくのが遅れた。
包帯を一部巻かれてはいるものの、自分は裸同然なのだと。
「どこにあるんだい？」
「そのふすまを開けて、左へ進むといくつか部屋があります。目印として紫陽花（あじさい）の刺繍（ししゅう）がある反物が下がっているので、そこの戸を開ければ」
「ごていねいに説明どうも。どっこらせっと」
小声で復唱しながら起立し、時充は広間を出ていった。
しばらくして、軽快な足音が帰って来る。
「おかえりなさいませ」
「ただいま。んで、これだろ？」
「あ、はい」

上に着る白服(しろふく)に、藍の袴、白の足袋。
この社では、男女共通でそれを身につけている。
「珍しいね。普通、朱色の袴だと思ってたのにさ」
言いながら時充は正座をし、持ってきた衣服を折りたたんでいる。
「それは、わたくしの母からの名残でして」
「ふぅん？　どうして藍色なんだい」
「それは、わたくしの名前が……申し遅れました。天空芳藍と言います」
「かしこまんなくてもいいよ。それはあたいのほうなんだから」
「いいえ。こちらは助けられた身です」
「随分と義理がお堅いねぇ」
「昔から言われます」
「それはいいとして、どうして藍染(あいぞめ)なんだい？」
「虫除けと、魔除けを意味しているそうです。母がわたくしに、藍と名を入れるほど好きだったものですから」
「な～るへそっ」
時充は言われて納得しているようだった。
「変な虫が寄りつかないようにって意図があるんだねぇ」
芳藍が思うのとは、少し異なる解釈をしていた。
「確かに藍のにおいは、虫が嫌うものだからね。あんたみたいに可愛い女子(おなご)がいたら、母親が心配しちゃうのもうなづけるわねぇ」
「は、はあ」
「んで、そっちの男の名前は？」
「えっ？」
「んや。さっき、しょうじ……とか言ってたからさ」
「はい。朧昭示、です」
「そう。単刀直入に聞くけど、あんたらふたりに何があったんだい？」
「……」
事の顛末(てんまつ)を、話していいのだろうか。

信じて、もらえるだろうか。
少なからず、この人になら話してもいいのではないかと。
芳藍は憂慮せずに、事の全てを伝えた。

「あの」
「んっ？　ああ、ごめんごめん」
戸惑ってはいるものの、時充は合点した様子。
「にわかには信じがたい話だけど、あたいは信じるよ」
「何故に、そのような」
「なんでって、あんたが虚偽を作るような悪い娘には見えないからさ」
そう言って、時充はあるものを提示した。
「あ、それは――っうっ！」
「無理しちゃだめだよ。左肩、あたいがきちんと縫合しといたんだ。下手すると傷口が開いちまう」
「あなたは、医学を？」
右手で患部を確かめると、包帯の下に糸のような感触があった。ていねいに縫われているみたいで、触れるとちくりと痛みが走る。
「医者といえば医者でもあるね。でもそれは本業じゃない。あたいは、こういうのに惹かれるのさ」
時充が手に持っているのは、芳藍の部屋に飾りつけてある反物のひとつだ。
「この花の刺繍、あんた相当な技術だね。戸以外にも色々と飾ってあったからさ、拝借したんだけども」
「そ、それを持ち出して……何を」
「んや、これいくらだい？」
唐突にそんな話になり、芳藍はきょとんとなる。
「か、買うつもりなのですか」
「当たり前じゃないか。こんな上質な織物、たんすに積み重ねとく

もんじゃないよぅ。そこらの呉服屋よりいいもん扱ってるじゃないか」
「そ、それは。たまに、金銭が不足した場合に売るぐらいのものですし。良質な物とは」
「なんだって？　いくらで売ったのさ」
「えっと、その時は小判を五両ほどですね。多いと断ったのですが……」
「冗談はよしなよ。これなら、あたいは大判小判を詰め込んだ木箱をひとつやふたつ差し出してもいいくらいだよ」
「お、大げさな」
「質問だけど、地糸（じいと）とかどうやって手に入れてるのさ」
「町に出て、購入しています」
「なるへそ。顔料（がんりょう）とかは？」
「買ったりもしますけど、糸と一緒に譲り受けたりもしますね」
「んっ？　あんたが織ったのはさ、近くの町でも流通してるのかい？」
「少しですけど、はい」
「手間暇（てまひま）かけて針を通してさ、小判数両なんて報酬として少ないやしないかい？　まっ、どれくらいで売り買いされてるのか、こっちは相場を知らないけどさ」
「たまに米俵などもいただいたりしますけど」
「ふ～ん。よかった、安心したよ」
「は、はぁっ？」
「少なからず、あんたの織物は良質だ。贅沢な暮らしができるほどの金銭はやりとりしてもいいんじゃないかい？」
「わたくしは、今の暮らしで満ち足りています」
「は～。あんた、無欲だねぇ」
「さいですか」
「じゃあさ、あんたが蓄（たくわ）えている反物。あたいが売りさばくのはだめかい？」

「どうして、金銭の話ばかり」
「んなこと言ったって、あんたとそこの男は寝たきりなんだ。飯の世話もしなくちゃならないしさ。それに、あんたらに施したのは応急処置。まだ本格的な治療とは言えないの」
「だから、お金が必要になると？」
「まっ、これがなくてもあたいは刀鍛冶でもあるしね。今所持している刀を売って凌ごうと思ったんだけど。これだけのものを見たら、ふたりに栄養のある食べ物を与えられるんじゃないかと嬉しくなっちまってね」
「存じているとは思いますが、それはわたくしの所有物です」
「知ってるよ。だから、こうして持ち主に許可を求めてるのっ。泥棒だったらわざわざ見せたりしないはずだよっ？」
芳藍は時充の説得に、どうしたものかと考える。
時充にはその表情が、いぶかしく見えたようで。
「はぁ～っ。しょうがないね。そんなに大事なら、あたいは引き下がるよ」
「どうぞ」
芳藍からの意外な申し出に、ほんの少し固まってしまう時充。
「む、無理しなくてもいいよ。今ある刀を売れば、どうにかやりくりできるし」
「いえ。時充さんに迷惑をかけてますし、それに。わたくしも昭示さんも、このままでは多方面に迷惑をかけてしまいますから」
「そっか。じゃあ、ふたりが元気になるように稼いでこないとね」
ちらりと、芳藍は昭示のほうを見る。
「安心しなよ。その男は外傷がほとんどない」
「本当ですか？」
「嘘は言わないよ。ただ、あんたのほうが程度がよろしくない」
その言葉に振り向く芳藍。
ずきっと、左肩に激痛が走る。
それだけでなく、呼吸を忘れるほどお腹がうずいた。

「はぁ、はぁ……くうっ。このような、痛みなど」
「腹部が痛むのかい？」
「は、はいっ」
そう答える芳藍を見て、時充は表情を曇らせる。
「んっと、芳藍」
「な、なんでしょう？」
「あんた――んや。あたいはこれでも二十四なんだけど、芳藍の年齢は？」
「十一歳、です」
「そっちは？」
「昭示さんは、十四歳です」
「そう」
「あの。どうなされたのですか？」
「薬を使う際、年齢によって濃度を変えないといけないんだ。濃すぎると悪影響もあるからね」
「は、はぁ」
ゆっくりと腰を上げて、時充は反物を片手に。
「芳藍の大事な反物。とりあえずは高値で取引してみるよ」
微笑みながら、この場を後にした。

「ようっ」
「あ、おかえりなさい」
時充は外出して間もなく、紙袋を抱えて戻ってきた。
「芳藍の反物、やっぱり相場より安かったわね」
「えっ？　もしかして」
「呉服屋に聞いてみたんだけどさ。今度から仕事を頼みたいって話があったのよ」
「……」
「あっ、嫌そうだね」

くししと、歯を見せて愉快そうに笑う時充。
腰を下ろして、紙袋にあるものを畳の上に並べている。
「ええ。わたくしは、ただの趣味で裁縫（さいほう）と織物をしてますから」
「そう」
その返答を耳にし、時充はにっこりと微笑む。
「とりあえず、薬や食材は買ってきたよ。これでしばらく治療に専念できる」
「いくらぐらい、でしたか？」
「やっぱ、気になるんじゃないかい」
目を細めて時充は、芳藍の顔をじっと見つめている。
「いえ、やはり自分の作品ですし。本来あるべき評価はどうなのかと。横になっている間、ずっとそれを考えてて」
「そうだね。あんたの反物は、大判小判を何十両積んでも惜しくないそうだ。おまけに小遣いとしてを銭を何文かやってもいいぐらいだと、さ」
「そ、そんなにっ？」
「少なからず、さっきの呉服屋の依頼に関してはあんた次第だよぅ。受けるかどうかはあたいからは返答できないって言っといたから、後で自分から返事を出しなさい」
「では、お断りすると言付けてもらえませんか」
芳藍がそう返答すると、時充はがっくりとうなだれる。
「本当に無欲なんだねぇ」
「そういう時充さんは、どうして刀を？　旅費のためですか」
「その話は後だね。芳藍、傷口を消毒するから身を起こすわよ」
気落ちしている様子から一変、時充は芳藍の布団に手を突っ込む。
「あ、あの」
「なんだい？」
「上体を起こすと言うには、手の置かれている場所が不自然なんですけど？」
「おっと、ど～りでおっきくてや～らかいと思ったわぁ」

芳藍は時充をにらみつける。
「ところで、何をなさるつもりですか」
時充に身を起こされて、芳藍は不安げにそう訊ねた。
「焼くのさ」
真顔でそう告げる時充。
「や、焼くっ？」
芳藍ははっと昭示のほうを見る。
「心配しなくても、すぐに終わるよ。ただ」
「た、ただ？」
「激痛が走るから、覚悟しといたほうがいいよ」
左肩も、腹部も、今でもかなりの痛みがあるというのに。
それを聞いただけで、芳藍は怖くなってしまった。
「どうして、左肩の包帯を外すのですか。もしかして、直に」
「傷が深かったから、手早く処置しないと熱が出たり、化膿したりして、とにかく面倒なんだから。これ以上は悪化させないためにも、我慢してちょうだい」
「治るの、ですか？」
「安心して、傷跡は残さないから。元通りにしてあげるよ」
おもむろに楊枝を口に咥えて、時充は巾着や大きな荷袋から様々な器具を取り出した。
「水はこの竹筒に入れてあるから、水が欲しくなったら言いな。少なからずこれは、かなりの痛みを伴う。遠慮はしちゃダメだよ」
「へ、平気です」
「本当に？」
「な、何度も言わせないでください。このような、状態で……」
「そうだね。若い娘が、いつまでも上の肌をさらしているのはよくないね」
じゅっと、芳藍の左肩に熱いものが触れる。
本当に、肌を焼くんだ。
歯を食い縛り、芳藍は。

その処置が終わるまで、死に等しいかもしれない苦痛に耐えなければならなかった。

「芳藍、だいじょうぶかい？」
「は、はい……っ」
息も絶え絶えな芳藍は、時充に白服を着させられて、布団に寝かされる。
「あんた、強いね」
手ぬぐいで額の冷や汗をふいてから、時充は芳藍に言う。
「そ、そうでしょうか」
「左肩を焼いている間、泣きそうな顔してるくせに、声をひとつも出さないんだもの」
それを手桶にある水に浸して絞ってから、芳藍の額に置いた。
「しばらくは酷使しないで。完治に障（さわ）るわ」
「は、はい」
「切られた跡や、焼いた跡は残してないけど。もしかしたら支障があるかもしれない。その時はきちんと言うように。その時も跡を残さず治療してあげるわ」
「解りました」
「一応これで終わり。数日後に抜糸（ばっし）するだけね～」
この、時充という人。
本当に、刀鍛冶なのだろうか。
医療に長けていて、適宜（てきぎ）に処置してくれたけど。
何か、引っかかるものが――。
「うっ、ごほっ」
「昭示さん？」
思考を中断して、芳藍は隣を見やる。
「お、俺は……」
ふと、芳藍の視界の隅に何かが横ぎった。

「ぐはぁあっ！？」
「おらおら」
時充が布団の上から昭示を蹴っていた。
「ようやくお目覚めかい？　全く、いつまで寝てんだ。あんたは」
両手を腰に置いて、時充は昭示を見下ろしている。
「な、何だお前はっ？」
昭示は布団から飛び出て、時充と向かい合う。
〜〜きゃっ。
「あれま。堂々とやってくれたわねぇ」
「うおっ。どうして俺は裸なんだ」
赤面して目線をそらした芳藍を見つけ、時充はぷっと吹き出す。
昭示は状況を把握したらしく、とっさに布団を被っていた。
「ほら、さっさと服を着なよ」
「お、おう」
「いいから早くしな。芳藍の顔が赤いまんまだよ」
昭示が白服と藍の袴を着るまで、芳藍は時充に笑われっぱなしだった。
「芳藍、俺は……」
昭示が服を着終えた途端、空気が急に重くなる。
「いいんです。わたくしは、この通り元気ですから」
首だけそちらを向いて、芳藍は笑顔でそう主張するも。
「なぁ〜にが、元気よ」
時充に一蹴されてしまう。
「芳藍がどうこう言わなかったら、あたいは今頃あんたを顔の原形を留めないぐらいに殴ってるわよ」
「そ、そうか」
そう言われて、責任を感じている様子の昭示。
「とりあえず、昭示とか言ったわね」
「な、なんだよ」
「具合、悪くない？」

「いきなり、態度を変えないでくれ」
「医者の立場で言ってるのよ。さっきまでのあたいは、ひとりの人間としてあんたを蹴ったまで。ただそれだけのことよ」
「俺は、平気だが。芳藍のほうは重傷なのか？」
（一日休んだだけで体力が回復してる？　それと手に巻いた包帯の出血が薄いような）
「お、おいっ？」
「んっ。ああ、ごめんごめん。昨夜から一睡もしてなくてね。あんたが元気そうなら、あたいは隣の広間で横になりたいんだけど。この娘をしばらく頼めるかい？」
「俺は、別に構わないが」
「それと、かゆを芳藍に食べさせておくれ。もし芳藍に何かあったら、あたいを叩き起こすように。理解できたかしら」
「承知した。布団とかはいいのか？」
「いいよ別に。薬とかは番号を振って、何を食後に飲めばいいとか紙に記してあるから。よろしくお願いね」
「そうか。その、ありがとう」
「礼なら、芳藍に言いな」
時充は昭示の横を通り過ぎ、ふすまを開け放って。
「じゃあ、おやすみなさい」
ぴしゃっと、ふすまを閉めて。
「ふがぁあああああああああっ」
大きないびきを立てて、眠りについていた。

何となく、気まずかった。
芳藍と昭示は、おかゆや薬で義務的に言葉を交わすも。
それ以外に、何かを話すきっかけが得られない。
「あの」
「んっ？」

「ありがとうございます」
昨夜の一件を振り返り、芳藍は。
昭示が自分に、負い目を感じているような気がした。
「芳藍、俺は」
「いいんです。わたくしは、昭示さんが傍にいてくれるだけで」
「……」
意を決して、芳藍は自分の想いを伝える。
「好きです。あなたが」
「なんで、俺なんだ」
「えっ？」
「俺は、鬼だぞ？　芳藍、君の父親を――」
「いいんです。もののけに憑かれた父を解放してくれたのですから」
「だとしても、俺は芳藍から家族を奪ったんだ！」
「そうかも、しれません。でも、昭示さんはもののけからわたくしを守ってくれた」
「守る？　傷つけたの違いじゃないのか」
「もう、自分を責めるのは止めてください。昭示さん！」
芳藍に怒鳴られて、昭示は口を結ぶ。
先刻の芳藍の告白に、昭示は気づいていない様子。
「もう、わたくしには昭示さんしかいないんです。もう、家族と呼べるのはあなたしかいないんです」
「だけど、俺は」
「人であろうが、鬼であろうが。わたくしと昭示さんは、この社で何年も時を過ごしてきました。今までわたくしが昭示さんと触れ合ってきたのは、人とか鬼とか関係ありませんよ。別にそれが何だと言うのです？　昭示さんこそ、今の今まで鬼と自覚して生きてきましたか？」
「……」
「これまでと同じように生きていればいいじゃないですか。これからも、ずっとここにいればいいじゃないですか」

「どうして、俺が必要なんだ。もしかしたら、俺は芳藍を殺すかもしれないんだぞ」
「それでも構いません」
「構わない？」
「わたくしは、昭示さんと心中する覚悟はできていますから」
「し、心中……だと。そんな簡単に口にしていい言葉じゃないぞ」
「昭示さん。今まで一緒に過ごした時間を、たったひとつの生命（いのち）を、あなたが刃ひとつで蔑（ないがし）ろにするのであれば」
「な、なんだ……よ」
「今ここで、来世への誓いを立てましょう」
迷いも曇りもない、芳藍の瞳を見て。
昭示は、言葉を失っていた。
「もう、わたくしをひとりにしないで。お願いだから」
芳藍の瞳から、涙が溢れ出す。
「怖いんです。もう、もう誰かを失うのは……」
昭示の袖をつかむ芳藍。
「芳藍。なんで、そこまで」
「す、好きだからですよ」
芳藍の想いを知って、昭示は顔を赤くして戸惑っていた。
「しかし、もし」
「安心してください。今後、昭示さんが鬼と化しても」
もし、願いがひとつ叶うならば。
その時が、二度と訪れないようにと。
「わたくしには、あなたを討つ覚悟はありますから」
芳藍は、切にそう祈った――。

ちゅんちゅんと、小鳥がさえずっている。
それで目を覚まし、芳藍はあくびをしながら、う～んと伸びをする。

「あいたたっ」
痛みがあるまで、重傷だというのを忘れていた芳藍。
「おはよう、芳藍」
「えっ。あ、おはようございます。昭示さん」
昭示は炊き立てのおにぎりを盆に乗せて、この広間に持ってきてくれた。
「無理はするな。左肩、かなり痛むんだろう？」
「そ、そうですね。あの、手伝ってもらえませんか」
昭示に助けてもらい、芳藍は上体を起こした。
「ありがとうございます」
「いや、礼はいい。とにかく握り飯を食べて元気をつけよう」
「あれ、時充さんは？」
「ああ、彼女なら外で何か作業してるぞ」
「はぁ」
作業と聞いて、芳藍は刀を連想した。
「芳藍、倉とか他の部屋も探したんだが。この社にはもう刀とか武器はないのか？」
昭示がその話を振ったので、芳藍は確信を持つ。
「えっ？　ひとつも、見当たりませんか？」
「ああ、ひとつもないんだ。このところ物騒だしな。護身のためにひとつやふたつあったほうがいいと思ってね」
「時充さんから、買うというのは？」
「んっ？　いやぁ、確かにあの人は刀鍛冶みたいだけど。あんな刀が、本当に使えるのか疑わしいんだよな」
「はい？」
「ああ、その。実物を見たほうが早いかもな」
刀と聞いて、芳藍はあることを懸念（けねん）する。
「昭示さん」
「んっ？」
「社司や、宮司――いえ、父上の亡くなったあの事件。町の方々に

どう説明すればいいのでしょうか」
「それなら時充さんが、藤真さんは行方不明のままだって町に噂を流したらしい」
「えっ？」
「社司の皆はすでに死体が発見されているし、ごまかせない。藤真さんは、時充さんが俺らを運ぶ際に見当たらなかったと言ってたし。はぐらかせるのであれば、その名誉を傷つけたくはない。時充さんが言うには、風来坊の言動は信憑性に欠ける。後で俺たちがそうだって言って回らないと、真実は隠せないってさ」
時充が先手を打っていたと知り、芳藍は首を傾げる。
反物を片手に外に出た時だと確信した芳藍は、昭示が持ってきたおにぎりを見た。
「これからは、俺と芳藍だけでこの社を守らないといけないんだな」
「はい。昭示さん」
「な、なんだよ」
「空腹なので、おにぎりをひとつ」
それで思い出したらしく、昭示は盆を芳藍の近くに置いた。
「いただきます」
片手で一礼をして、おにぎりを手に取る。
「俺が手を貸さなくても平気か？」
「ええ。昭示さんは、いつものように雑務をこなしてください」
「この社はもう、芳藍の管理下なんだよな」
「自然とそうなりますね。わたくしが家主というのも、少し妙ですけども」
にこやかに、芳藍は昭示を外へと促す。
「じゃあ、俺は外にいるから。何かあったら大声で呼ぶんだぞ」
「はい」
ふすまを開閉して、昭示は玄関のほうへと駆けていった。
「はむっ」
冷めないうちにと、芳藍はおにぎりを一口頬張る。

酸味の利いた梅が、とてもおいしい。
もぐもぐと咀嚼しながら、時充について振り返る芳藍。
「んぐっ」
医学に精通し、刀鍛冶が本職だと言い、商売に関してもある程度の識見がある。
こちらの話を聞いただけで、まず何をすればいいのか先を読み、色々と手を打っていた。
芳藍個人としては助かってはいるものの、明らかに度を超している。
「あっ、鮭ですね」
恩人を疑うのは、よろしくありませんね。
「ごちそうさまでした」
梅と鮭が具だったおにぎりふたつを完食し、芳藍は一礼する。
「さて」
芳藍はゆっくりと布団から出て、衣服を着替え始めた。

「あんた、何の用だい？」
廊下に出て、芳藍は庭で細工している時充と。
「どうして俺には、そう目くじらを立てるんだ？」
昭示が、険悪な感じで言葉を交わしているのを見つけた。
「はっ。そんなの、自分の胸に聞いてみな」
「解らないから、聞いているんだろう」
「ふんっ。それだけ鈍感だと、あんたを想う人は大変だよねぇ」
それは、自分のことだろうか。
木の柱の陰に隠れ、芳藍はふたりの会話を盗み聞きする。
「後学のために言っとくけど、あんた。芳藍に好きだって一言でも返したかい？」
「……聞いてたのか」
……聞かれてたんだ。

「ふんっ。よろしくないねぇ」
芳藍は返事がないことよりも、昭示がここを出ていかないか不安だった。
「そういうあんたも、盗み聞きはよくないぜ」
「ふんっ。それはあっちに言ったらどうだい？」
気づかれて、いる？
距離がある上に、背中を向けたままなのに。
自身の存在が気取られたことに、芳藍は驚愕する。
「芳藍？　なんだ、もう動けるのか」
渋い顔をしながら、昭示が芳藍のほうに歩んできた。
「あまり無理はするな。まだ、万全とは言えないんだろう？」
「そうですけど。いつまでも横になっていたら、多くの方々に迷惑をかけます」
「しばらくは、この社に人は来ないと思うぞ」
「さびしいことは、思っても言わないでください」
「す、すまんっ」
昭示は履き物がないと知って、玄関から芳藍の草履を持ってきてくれた。
「あの、昭示さん」
「んっ？」
「わたくし、いつまでも待っていますから」
微笑みながら、芳藍が言う。
頬を染めて、昭示は目線をそらした。
ちゃんと意味が伝わったことに、芳藍も照れてしまう。
「さっ、参りましょうか」
草履に足の指を通し、とんとんをしてから、ふたりは時充の下へ歩み寄る。
「ちょうどよかったわ。ほら、芳藍」
楊枝を咥えて振り返った時充は、近づく芳藍に細長いものを投じた。

「えっ？」
少し前のめりになりながらも、芳藍はそれを受け取った。
「刀、ですか？　反りもなくまっすぐで、刀身が長いようですが」
「そう思うのなら、抜いてみなよ」
「反り返っていないので、抜刀がしにくいですね」
「いいから、さっさと抜く！」
「は、はいっ」
左肩を気にしながら、恐るおそる刀を抜いてみる芳藍。
鞘だけが異様に長いことに気づく。
刀身は鞘と比べると、かなり短い。
特筆すべきは、刀身自体が青い輝きを放っている事だ。
「どうして、直刀なのですか？」
「刀身は二尺三寸。柄は一尺。鞘だけは五尺と長めにしてあるのよ」
「その、答えになってませんけど？」
「鍔に銀の輪があるだろう。それと鞘には下緒だけでなく、滑り止めに布が巻いてあるのよ。その意味がすぐに解ると思ったんだけどねぇ」
細部を確認してみると、色々な工夫があるのは解った。
けど、それらが何を意味するかは全く読み取れない。
「柄が、かなり細いような気もしますね。鞘と柄にも、指が通るほどの穴があいていますし」
「元々、片手で握るように作ったからね。両手でもだいじょうぶなようにはしてあるよ。穴やら細工については、あれこれ考えるといい」
「要するに、駄作かよ」
「ふふんっ。そう思うんだったら、早いとこその身体を治すんだね」
秘密はその時まで明かさないつもりらしい。
芳藍は曇りのない刀身を見つめながら、時充にこう質問した。
「何故に、刀身が青いのですか？」
「鍍金でもしてあるのか？」

「ふたりして同時に聞かないように。一応言うけど、その青いのは外から塗布したものではないわ」
ふたりは、ほぼ同時に首を傾げた。
「芳藍が満足に動けるようになったら、それの用法について教えてあげるよぅ」
「そう、ですか」
ふと、くぅきゅるる――という、緊張した空気を和ませる音がした。
「あっははははは。ごめん、空腹みたい」
お腹をぽんぽんと叩いて、時充は照れ笑い。
芳藍と昭示はおかしくて、頬を緩める。
「おにぎり用意するから、ここで待っててくれ」
「んや。昭示、済まないねぇ」
「助けられた身だ。それぐらいの礼はしないと、後で罰が当たる」
そう告げて、昭示は台所のほうへ走った。
「これは、まだわたくしの物ではありません」
芳藍はその刀を時充に返却する。
「んや。どうしたんだい。所持してていいんだよぅ？」
それを受け取り、時充は不機嫌な顔をする。
「刀を持っていると、どうしても素振りをしたくなるので。今のわたくしに必要なのは武器ではなく、静養のはずです」
「あっはは。そうに違いないや」
それには、時充も納得したようだ。

第三話

時充がこの社に住み着いてから、数日が経った。
「いたっ」
「じっとしてるんだよ」
芳藍は自分の部屋で、時充に糸を抜いてもらっている。
「信じられないねぇ。あれだけの重傷だったのに、ほとんど治ってら」
「まだ、若いからでしょうか」
「それは、あたいに喧嘩(けんか)売ってるのかい？」
「別に、そういうつもりは」
ふふふっと、ふたりは同時に微笑む。
「ほら、糸は抜けたよ」
「ありがとうございます」
「消毒して包帯を巻くから、そのままでいな」
「はい」
薬が傷に染みて、芳藍は顔をしかめる。
「時充さんには、世話になってばかりですね」
包帯を巻き終え、処置が終わったと安堵する芳藍。
が、その左肩をぽんぽんと叩かれる。
「あいたたたっ」
「それを言うなら、あたいのほうだよ。逗留(とうりゅう)させてもらってるからねぇ」
「時充さんっ。強く叩かないでくれませんかぁ？」
「ありゃ、そんなに痛かったかい」
悪びれた様子もなく、時充は歯を見せて笑っている。
「まだ本調子じゃないんだ。芳藍、激しい運動は控えたほうがいいよ」
「は、はい。承知しました」

いつもの服装に着替えてから、芳藍と時充と一緒に町に繰り出した。

社を昭示に任せて、ふたりは町内にある青物市場へおもむいた。
数日と休んでいたので、身体がなまっているし、少しは歩いたほうがいい――というのは建前で。
実を言うと、社の裏にある氷室に備蓄していた生鮮食料がなくなってしまった。
その買い出しのついで、だ。
「しかし、あの昭示って男は役立つねぇ。ほとんどの家事をこなせるんだから」
「あはははは……」
「んっ？　どうして苦笑いなんだい」
「いいえ。なんでもありません」
「まさか芳藍、あんたは裁縫以外の家事ができないっておちかい？」
それはないと、芳藍は首と手を振って否定する。
「ふ～ん。芳藍が指導したのねぇ」
詳細を話すと、時充はうんうんとうなづいていた。
「んやっ。活気があるねぇ」
「この辺りは山菜がよく採れるので。最近では松茸が名産として流通していますね」
「へぇ」
市場に着くなり、時充が目を輝かせている。
隣にいる芳藍は、それを見て微笑んでいた。
「芳藍、何を買うんだい？」
「とりあえず、いもや大根などの根菜を一通り。なすも欲しいところですね」
「うしっ。値切り交渉して、安く多く買い込むわよ」
袖をまくり、鼻息を荒くしている時充。

「時充さん。そこまで張り切らなくても」
芳藍は冷や汗をかきながら、時充をなだめようとする。
「芳藍、とりあえずここの商人（あきんど）と勝負するわよっ」
「あの、買い物でどうして勝ち負けが――ああっ。待ってくださぁい！」
興奮して暴走する時充を止めるべく、芳藍はその後を追った。

紙袋を右腕に抱えながら歩く芳藍は、隣にいる時充をにらむ。
「芳藍、ちょっち買いすぎたね」
「全くです。わたくしは片腕を酷使できないんですから、思慮深く行動してください」
「んや。ごめん」
ふたりはひとつずつ紙袋を持っており、その中にはたくさんの野菜が詰め込まれている。
「おや、担ぎ屋だね。芳藍、新鮮な魚はどうする？」
前から走ってくる天秤棒を持つ男性を見るなり、時充はちらりと芳藍を見た。
「持てませんっ」
「なら、配達してもらおうかしら」
「はいっ？」
時充は男性を引き止めて、鮭を二尾予約していた。
「へい。夕刻まで、そこに届ければいいんでやんすね？」
「んやっ。芳藍、まだ欲しい魚ある？」
「えっと、それだけで結構です。えっと、お金は」
「配達した時でいいっすよ。あんがとございやしたぁ」
走り去る男性の背中を見つめて、時充は。
「ふっ。あいつ、出身は西のほうね。できる」
ぶつぶつと、何かをつぶやいていた。
「さて、さっさと社に帰ろうか。もうすぐお昼だしね」

「はい」

その頃、社の境内では。

「ふあぁあああああああっ」

竹ぼうきを片手に、昭示が大きなあくびをしていた。

「おっと、いけねえ」

昭示は首を振って、掃除を再開する。

しっかし、落ち葉が多いなあ。そんなことを思いながら、昭示は境内を見回す。

「まだあるのかよ」

正直、人手が欲しい。

芳藍はけがが完治していないし、時充はこういうのやらなそうだし。

しばらくはひとりで家事をこなさないといけないのか。そう考えて、昭示は気が重くなる。

「はぁ」

溜息は出るが、別に嫌ではなかったりする。

芳藍に指導されて、昭示はできないことができるようになった。

おかゆやおにぎりを、芳藍や時充は喜んで食べてくれた。

炊事だけでなく、洗濯や掃除も以前よりは上手にはなっている。

「芳藍に感謝しないとなぁ」

今の今まで昭示は、何でもできる芳藍に助けられて生きてきた。

それを思うと、あの日のことを悔やんでしまう。

「何をやってんだ、俺は」

首を横に振り、暗い考えを払う。

「んっ？」

ぐいぐいと、袴を引っ張られる。

それに気づいて後ろを振り返った昭示は、ぼろぼろな服を着た小さな女の子を見つけた。

「ん〜。どうしたんだ？」
「だんごだけじゃ足んないよお。はらへった」
い、いきなり飯の催促かよ。
それに驚いた昭示は、屈んで女の子の目を見る。
「人の家に上がり込んで、名乗らずに図々しいなぁ」
「雪天日照」
「んっ？　それは、君の名前か」
「はらへった」
ぐぅぅぅぅぅっと、その子の腹の虫が鳴いている。
「君は、どこから来たんだ？」
「はらへった」
「親は、どうしたんだ？」
「はらへった」
だめだ、それ以外に返答がない。
朝に余った玄米飯でおにぎりを作ってから、話を聞いたほうがよさそうだ。

社の表の石段近くに、何やら人だかりができている。
「んやっ？」
「何かあったのでしょうか」
揉め事らしく、喚声が上がる。
「このっ、やめろよ！」
子どもの声？
「芳藍、紙袋もうひとつ持てるかい？」
「えっ？　わ」
時充は芳藍に紙袋をひとつ手渡して、人だかりをかき分けてそこに突入した。
何か閃いたらしく、芳藍はこの場を後にする。
「ちょいと失礼」

騒動の中心に踏み込んで、時充は状況を把握した。
「て、てめぇっ！」
短刀を振りかざす暴漢に立ち向かっていたのは、ひとりの少年。
赤んぼを抱えた女の子の前に立ち、身をていして庇っている。
「財布をふんだくった盗人が、子どもだからって容赦はしねぇぞ！」
「だから、それはボクらじゃない！　力ずくでなんて、おとながやることかよ！」
「だまれえっ！」
暴漢が短刀で斬りかかる。それを許せず、時充は割り込んだ。
「なに」
「え」
刃をつかんだ右手から、鮮血が滴り落ちる。
「ちょいとあんた、これはやりすぎよ」
「な、何だお前は。こいつらの親か？」
男が不気味な笑みを浮かべた。
「大人が子供相手に、刃物を使うなんてね。なってないんだよ！」
時充が一喝すると、男はひるんで短刀から手を離す。
それを地面に落として踏みつけた後、時充は人だかりが散るのを横目で確認する。
御用聞きが来たのを見やり、時充は安堵した。
「後はお願いします」
「あいよ」
御用聞きである町人を引き連れてきたのは、芳藍だった。
「芳藍ちゃん、今日も可愛いねぇ」
「それより、早く何とかしてください」
「おっと、こいつはぁすまねぇ」
紙袋ふたつを抱える若い御用聞きから、芳藍はそれをひとつ受け取った。
「すいやせん」
「いいえ。ここに来るまでに、重い荷物を運ばせてしまって」

「いいんすよ。藤真さんには助けられましたし。早いとこ帰ってくればいいのに、あの人は娘さんをほっといて何をしているんだか」
「……。そうですね」
「あ、すいやせん。口が過ぎました」
芳藍は時充のほうを見やる。
「男をひとり確保。どうやら、子供ら相手に言いがかりをつけてたらしい」
「さあさ、見せもんじゃないんだ。散った散った」
人だかりが散ってゆく。
御用聞きが事態を収拾した後、呆然(ぼうぜん)と立ち尽くしている時充を見つけた。
「時充さん？」
様子が気になり、芳藍は時充に話しかける。
「んっ？　ああ、芳藍ね」
時充は、右手に切り傷を負っていた。
目線で察したのか、屈んですぐに処置を始めている。
「消毒薬とか包帯、常に持ち歩いているんですね」
「応急処置できるようにしとくのが、医師の常よ」
妙に、声色が暗いような気がする。
「んで、あんたらもけがはないかい？」
時充が子ども達に話しかけたことで、その疑念は芳藍から消えてしまう。
「おいおい。情けないな、坊主」
勇ましく立ち向かっていた少年が、年配の御用聞きに泣きついていた。
赤子を抱えている女の子は対照的に、冷静に時充を見つめている。
「男が泣いてんじゃねぇぞ」
「ぼ、ボクは女だっ！」
その一言で、皆の誤解が解けた。
「へっ？　あんた、股の間にたまたまついてないの？」

「と、時充さあんっ！」
とんでもない発言をした時充を、芳藍は大声で怒鳴りつけた。
「おっと、つい口走ってしまったわ。失敬しっけい」
処置を終えた右手で頭をぽんぽんと叩き、ごまかそうとする時充。
芳藍がにらみを利かせていると、彼女はおびえた様子で起立した。
「ほ、芳藍っ。あ、あたいは別に……わざと言ったつもりは」
「それなら、なおっさら悪いです！　普段の会話をする時に、そんな表現が口から飛び出したらこの子らの教育によろしくありませんっ！　時充さん、あなたは常日頃から注意を払ってくれませんかあっ！？」
「うっ、ご、ごめんなさいぃ」
芳藍に叱られて萎縮する時充。
御用聞きや子ども達はそれを見て、にこやかに笑っていた。
「じゃあ、あたいはそっちの人が持ってる紙袋を社に運ぶわね」
「じゃあの意味が解りませんっ！　逃げないで、最後まで話を聞きなさい！」
「ひぃぃ～っ」
「あなたはわたくしより年上なんですよお！　この子らのお手本、模範になるように先程のような言動は慎(つつし)んでください。解りましたかあっ！？」
「は、はいぃっ！」
姿勢を正し、時充はただただうなづくしかできない。
芳藍は説諭(せつゆ)を終えて、御用聞きの近くにいた子ども達に歩み寄る。
「あの、この子たちの面倒はわたくしが見ます」
年配の御用聞きを見て、芳藍はそう告げた。
「なんだって？　そいつぁ、本気かい」
「帰る家や、身寄りがあるのなら……無理強いはしませんけど」
「だめだよ。ボクは、迷惑をかけたくない」
涙をにじませながら、女の子が芳藍を見上げてそう言った。
「だから、ボクは――あう」

年配の御用聞きが、その子の頭を撫でる。
「坊主――じゃなかったな。お前さんは度胸があるが、まだちっこい。芳藍ちゃんとこで世話になっとけ」
「いやだよ。ボクは、ひとりで生きていける」
「ふんっ。ついさっきまで、泣いてたじゃねぇか」
「う、うるさいっ！」
意地を張るその子を、芳藍は力強く抱き締めた。
「な、ななななっ」
「はい。これであなたも家族の一員です」
「え、ええっ？　だ、だめだってば」
「何がだめなの？　ちゃんと言ってくれないと解らないわ」
「だ、だって。おねえちゃんたちの、ご飯とかが減っちゃうし。え、えっと……それに」
「このままさよならするほうが迷惑なの。解るかしら？」
「う、うぅ」
どうやら、観念したらしい。
「よかったな、坊主」
「ボクは女だよっ！」
「おっと、つい」
あはははっと、皆が微笑む。
「そこのあんた」
時充が赤子を抱えた女の子に話しかけていた。
「さっきからだんまりだけど、どうしたんだい？」
「……あなたも？」
「んやっ？　あたいはまあ、そこの芳藍に世話になっているだけよ」
「……そうじゃなくて」
「んんっ？」
時充は女の子の独特な雰囲気についていけない様子。
「わたくしの社は近くの石段を上がったところにあるんです。あなたも、赤子を抱えたままでは色々と不安でしょう？」

芳藍は女の子に近づき、しゃがんでその子の目を見て話す。
「……はい」
その子は抱える赤子をちらりと見て、じっと芳藍を見つめていた。
「孤児(みなしご)の面倒を芳藍ちゃんが見てくれるなら、身元を調べるオイラ達の仕事も減ってありがたい。そんなこんなですまねぇが、その子らの名前だけは教えてくれ」
「だ、そうです」
御用聞きに泣きついていた女の子は。
「雪天鷹乃(ゆきあまたかの)」
と名乗った。
「んじゃ、あんたとその子は？」
「……月白舞(つきしろまい)。この子は命(みこと)」
ふたりは、芳藍の家族になることを受け入れてくれた。

石段を一緒に上がって、芳藍達は社に戻った。
「んやっ。まだ落ち葉が散らかってるねぇ」
「昭示さん、掃除をおろそかにして何をしているのかしら？」
芳藍が怒りを露(あらわ)にすると、時充がふっと笑ってからこんな一言。
「怒ってばっかだとさ、芳藍。しわが増えるよ」
「時充さん……？」
芳藍が振り返る前に、時充は紙袋を鷹乃に預けて逃げ出していた。
それと入れ替わりに、昭示が芳藍の下にやってくる。
「おや、おかえり」
「昭示さん、掃除をなまけて――って、あら？」
芳藍は昭示の横に、おにぎりをおいしそうに頬張る女の子を見つけた。
「あっ、日照」
「んぐっ。鷹乃だっ」
「あれ、ふたりはもしかして姉妹なんですか？」

んっと、昭示が首を傾げる。
「そっちの子は、男じゃないのか？」
「ボクは女だっ！」
鷹乃は髪が短く、活発なので、男の子と間違われることが多い。
「……ぷっ」
「わ、笑うなっ」
鷹乃の怒っている姿を見て、舞が吹き出した。
「おぎゃ～っ」
「あ、よしよし」
それが原因で、命が泣き出してしまった。
「ご、ごめん」
「いいよ。元気なほうが、あたしは好きだから」
命をあやす舞は、鷹乃ににこりと微笑みかける。
子ども達が親睦を深めている間に、芳藍は昭示に事情を説明する。
「ふむ。なるほどね」
「それで、あの日照という子は？」
「掃除していたら、いきなり空腹だと言うもんでな。朝の飯の残りを握って、食べさせていたんだ」
「はぁ。そうですか」
「俺は昼餉（ひるげ）ができるまで掃除してるから。魚の配達が来ることを想定して、財布を預けてくれないか」
「あっ、はい。どうぞ」
「んっ。鮭が二尾だよな？」
「ええ」
「ちょうどよかったな。これだけの腹の虫を黙らせるには、それぐらいは必要だろう」
「……。そうですね」
「んっ？　どうしたんだ、芳藍」
「ああ、いえ。少し思うところがありまして」
遠くのほうで掃除をしている時充を見つけて、芳藍はあることを

決意する。
「では、昼餉の支度をします。昭示さんは、続けてこの子たちの世話をお願いしますね」
「へっ？　俺ひとりでか？」
「向こうには時充さんもいますし。それでいいですよね？」
芳藍が昭示に返事を求めると。
「ボクはおねえちゃんのお手伝いをする」
「もぐもぐ」
「ねんねだよ～」
「すぅすぅ」
鷹乃は芳藍の裾（すそ）を引いて、日照はおにぎりを頬張り、舞は命を寝かしつけていた。
「んまっ。おじちゃん、おかわり」
「誰がおじちゃんだっ！」
「ふぎゃ～っ」
日照を注意する昭示の声で、命は再び泣き出してしまった。
「うっ。わ、わるい」
「……あたしも、芳藍さんについてく」
命をあやす舞は、昭示を半目でにらんでいた。
「ご、ごめんな」
「いえ。おじさんにも、これからお世話になるから」
「いや、俺はおじさんじゃ。ちゃんと朧昭示という名前があるんだぞ」
昭示が名乗ると、この子たちは一斉に首を傾げた。
「しょうじさん？」
「しょうおじさん」
「……しょうじ？」
鷹乃と舞はうなづいてはいるものの。
「ちっこいおじさん」
「いや、待て」

日照だけは、違う意味で解釈したらしい。
「俺は、昭示だ」
「ういっ。しょうおじさん」
「いや、だから……」
このやりとりは長くなりそうなので、芳藍は鷹乃と舞を連れて台所へ向かった。

紙袋を机に置いて、大きい木の桶にある雪解け水を手桶ですくう。
芳藍はそれを片手に、子ども達を呼び寄せた。
「お手伝いをするなら、これで手を洗いましょうね」
「は～い」
鷹乃はそれを受け取り、地面に置いてから念入りに手を洗っている。
「えっと、舞は見てるだけか？」
「うん。命が寝ちゃったから」
「そっか」
ぱっぱっと手の水を払って、鷹乃は芳藍をあおぎ見る。
「お味噌汁を作りますから、鷹乃には野菜を洗ってもらいます」
「水が汚れたら、そこからすくえばいいの？」
「ええ。これからちょっと危ないことをするので、ふたりは離れて見ててくださいね」
鷹乃は舞の隣に立ち、芳藍を観察している。
その芳藍は穂綿（ほわた）を地面に置き、火打石と火打鉄を両手に持った。
「そのふたつの石、なあに？」
「火打石に、火打鉄ですよ。これらを打ち合わせて、火を起こすんです」
「ひうちいし？　ひうちてつ？　へえ」
芳藍は付け木と薪（まき）を近くに用意し、穂綿を重ねて作った火口（ほくち）の前で正座した。

「見ててくださいね」
火口の上で、芳藍は火打石と火打鉄を打ち鳴らす。
「わっ。火花が」
「っ」
左肩の痛みをこらえ、芳藍は何度もそれらを打ちつけた。
火移りした穂綿を持ち上げ、芳藍はふうっと息を吹きかける。
すると、ぼわっと勢いよく燃え始めた。
「すごっ」
鷹乃だけでなく、舞も目を白黒とさせている。
芳藍は付け木を手にして、それにも火をつけた。
「これを」
火が消えないうちに、付け木と穂綿をかまどに放り入れて。
薪をくべながら竹筒で息を吹きかけ、小さな火を大きな炎へと育てた。
「よし」
立ち上がって深呼吸する芳藍。
ふと、鷹乃と舞がかまどの炎に見入っていることに気がついた。
「火の扱いは、ふたりにはまだ早いですね」
「う、うん」
鷹乃がうなづくと、舞も首を縦に振った。
「さて、鷹乃。手桶で野菜を洗ってください。ごぼうと大根、しっかりと土を落としてね」
「は、はいっ」
背筋を伸ばして、鷹乃が深々と頭を下げる。
「そ、そこまで緊張しなくても。ただ洗うだけじゃない」
「う、うんっ」
芳藍はかまどの上に鍋を置いて、手桶でそれに水を注いでいる。
その横をぎこちなく歩く鷹乃は、ちらちらとかまどの火を見ていた。
「……火が怖いの？」

「ち、ちがうっ」
舞の指摘に、鷹乃は動揺している。
それが可愛くて笑っていたら、芳藍は鷹乃が別なことに困っていると気づかなかった。
「あ、あの。と、届かないよ」
「はい？　あ、そういうことでしたか」
鷹乃の背丈では、机に置いてある紙袋に手が届かない。
芳藍は紙袋を鷹乃に手渡して、その頭を撫でた。
「あ、ありがとう」
「手助けしてほしいのなら、すぐに言いましょうね」
「はぁい」
鷹乃はひとりで頑張る性格で、頼るのを少し苦手としているみたい。
「……あたしも手伝う」
舞は口数が少ないけど、行動で態度を示す女の子なのね。
「いいよ。命の世話をしてればいいだろ」
舞は風呂敷をどこからか取り出し、それを器用に結びつけて命を背負っていた。
「寝てるから、だいじょうぶ」
「んっ。ほんとだ。寝顔がかわいい」
その小さい手で野菜を洗っている姿を見て、芳藍は病気がちだった母親の手伝いをしていた頃を思い出す。
――何だか微笑ましい。
母上も、こういう気持ちでわたくしを見守っていたのかな。
「おねえちゃん、ぼうっとしてたらだめだよ」
「あ、すいません」
鷹乃に言われるまで、かつお節を入れるのを忘れていた。
それらを鍋に入れた後、芳藍は釜のふたを取ってみる。
「あれま。もうなくなってますね」
夕餉（ゆうげ）は雑炊にしようと思っていた芳藍。

日照の食欲を知り、冷や汗をかいている。
「あ、もしかして日照が……」
「だいじょうぶですよ。今から炊くので」
鉄の棒で燃えている薪を隣のかまどに移し、新たに薪をくべて火の勢いを維持する。
両方のかまどの面倒を見ている芳藍は、気になって鷹乃を見やった。
「鷹乃？」
「だ、だいじょぶ」
「そう」
やっぱり火が怖いんだ。そう確信する芳藍。
「よいしょっと」
紙袋に移していたお米を手桶ですくい、おたまで水を足して研いだ後、釜に入れて新しい水を注ぐ。
ふたをしてから、火力を強めるべく薪を投げ入れた。
「おねえちゃん、すっごい」
「いつもやってますからね」
「ぼ、ボクには無理かも」
「覚えれば、ふたりにもできますよ」
「そ、そうかな」
「ただひとつ危ないのは、火の扱いです。わたくしや昭示さんがいない場所で、火遊びはいけませんよ」
「はぁい」
鷹乃が返事をすると同時に、舞もこくりとうなづく。
「うんうん。よろしい」
「まるで、おかあさんみたい」
「おかあさん、ですか？」
言われて嬉しくなり、頬が緩む芳藍。
「うん。こんなきれいで優しいおかあさんだったら、本当に……」
ほんの一瞬だけ、鷹乃が暗い顔をした。

「あっ、ごめんなさい。なんでもないです」
舞のほうも何かを思い出したのか、表情が強張っている。
「こほん。話す気になったら、いつでもどうぞ。わたくしや昭示さんは、あなたたちの保護者ですから」
「あれ、時充さんは？」
「あの人は居候（いそうろう）です」
噂をすれば何とやら。
「んや？　誰がなんだってえ」
「あれま、時充さん」
こちらの様子が気になったのか、戸を開けて台所に入ってきた。
「どうしたんですか？」
「んやっ。おいしそうな匂いに誘われてね」
「はぁ」
芳藍をじっと見つめている時充。
左肩の具合が気になるようだ。
「んで、手伝えることはないかい？」
「でしたら、氷室のほうに松茸があるので。それを人数分取ってきてもらえますか」
「あいよ」
「それはそうと、昭示さんと日照はどうしてます？」
「ふたりで掃除してるよ。あの日照って子、竹ぼうきの扱いがうまいわ」
「は、はぁ」
芳藍は氷室の鍵を手にして、それを時充へと放り投げた。
「うしょ。じゃあ、え～っと」
「わたくし、鷹乃に舞、日照に昭示さん、時充さんで六本です」
鍵を受け取った時充は、舞が背負う赤子を見やる。
「んっと、そっちの命は？」
「おかゆです。松茸をだしにするので、ご心配なく」
「ほっ」

うんうんとうなづいて、時充は台所を後にした。
「松茸が届いたら、ふたりで洗ってね」
「はぁい」
「……うん」

「ぐ」
「おし」
日照と落ち葉集めの勝負をしていた昭示は、負けた。
「勝ったぞぉ」
「ばかな」
昭示が集めた葉は、いもが焼けるほど集まっている。
しかし、日照のほうはそれの倍近い山ができていた。
「日照。掃除の才能あるな」
「へっ？」
「う～む。これはいい戦力だ」
「それより、いも」
「は？」
日照は食い気が旺盛なようだ。
積もった落ち葉を見たら、いもを焼きたくなるのはうなづける。
しかし、その肝心のいもが手元にないのだ。
「すいやせ～ん」
「おや？　もう魚が届いたか」
日照をここで待たせて、昭示は魚を受け取りに表の石段のほうへ走った。

「ありがとうございます。時充さん」
「それぐらいで礼なんて。こそばゆいじゃなぁい」
頭をかきながら、時充は大口を開けて笑っている。

不意に真顔になった時充は、芳藍にこんなことを聞いた。
「芳藍さ、巫女服余ってない？」
「えっ？　まさか、時充さん」
「な、なによ」
「着てみたかったのですね」
芳藍の指摘に、時充はぽかんとしていた。
「あ、ああ。そうよっ。ちょっとでいいから、袖を通してみたかったのよねぇ」
どうして声が裏返ってるんだろう。
芳藍はそれを照れによるものだと理解した。
「時充さんなら、似合うと思いますよ」
「そ、そう？　この子らの分もあるの？」
「部屋にしまってありますよ。仕立ててほしいのなら――と、それで思い出しました」
「んっ？」
芳藍は時充を手招きする。
「あっ、おねえちゃん。まつたけ洗ったよ」
「では、鷹乃と舞。それらはそこに置いて、後はわたくしに任せてくださいね」
「はぁい」
鷹乃はとことこと台所の端に移動し、舞はかまどの火を見守っている。
「んで、芳藍。あたいに用でもあるの？」
「はい。時充さん、仕事があると言ってましたよね？」
「んやっ？　ああ、呉服屋の？　反物を提供してほしいって依頼がどうしたのさ」
「わたくし、それを引き受けようと思います」
ちらりと、時充は鷹乃と舞を見やった。
「なるへそ。事情は解ったわ。後で案内してあげる」
「そ、そうですか」

「別に急がなくても。今は炊事に集中なさい」
手を振りながら上機嫌で、時充は台所を出ていった。

「ふうっ」
玄米飯と味噌汁ができて、松茸も金網でこんがりと焼き上がり、芳藍は一息つく。
「わぁっ」
「おいしそう」
鷹乃と舞はそれを見て、はしゃいでいる。
「ふたりは、昭示さんと日照、時充さんへ広間に来るようにと伝えてもらえますか」
「はぁい」
「うん」
元気よく返事をして、ふたりは駆け足で出ていった。
広間に運ぶ膳を用意しないと、と芳藍が思った矢先。
「ほ、ほうらんさっ」
息を切らして、舞が戻ってきた。
「ど、どうしたのですか？」
「ひ、ひで――げほっ」
「落ち着いて。深呼吸をしてから、何があったのか話しなさい」
「は、はぃ」
呼吸を整えてから、舞は芳藍に事情を説いた。
「何者かに襲われて、昭示さんが倒れててね。ひ、日照がさらわれたって小声で」
「えっ？」
「そ、それを知って時充さんが黒い羽根を見つけて、その後を追っちゃったの。鷹乃も、ついさっき」
「わ、解りました。わたくしを昭示さんのところへ案内してください」

「あ、でも火が」
「すぐに参りますから、舞は昭示さんをお願いします」
「は、はいっ」
かまどの火を砂をかけて消してから、芳藍は舞の背中を追いかけた。

第四話

石段を急いで駆け下りて、鷹乃は街道を走る時充を追う。
「はぁ、くっ、は、はやいよ」
弱音を吐いていても、日照が助かるわけじゃない。
自分にそう言い聞かせて、鷹乃は必死で追いかける。
「ま、まっ、まってよ」
息が切れてしまい、鷹乃は歩き始めた。
ふと、時充が足を止めて鷹乃を見やり、間もなく森の中に姿を消してしまった。
「はぁ、はあ、はあ、ふうっ」
膝に手をつき、鷹乃は深呼吸を繰り返す。
「も、もう一度」
走り出して、森林の前にどうにか辿り着いた。
「ふぅ、はぁ、ふぅ」
呼吸を整えて、いざ森に足を踏み入れようとしたら。
鷹乃は、矢印の刻まれた樹木を見つける。
「もしかして、時充さんが？」
それは一定の間隔で彫られており、鷹乃はそれを来てもいいという意思表示だと捉(とら)えた。
「日照、時充さん」
ボクにも何かできることがあるはず。
そう信じて、鷹乃は一歩を踏み出した。

「ぐっ、済まない」
「昭示さん、無理をなさらないで」
「そうだよ」
まんまとしてやられた。

昭示は魚を受け取ろうと配達の男に駆け寄った時に、腹に拳をもらい。
それでひるんでいる間に、男に日照を連れ去られてしまった。
「くそっ。身体が、しびれてやがる」
思うように動けず、昭示は地面に這いつくばっていた。
芳藍と舞は昭示を止めるも、彼は無理にでも立ち上がろうとする。
「昭示さん。そのままおとなしくなさい！」
芳藍の怒鳴り声がして、昭示は固まった。
「そんな状態で動いても、わたくしたちが迷惑するだけです。いいですか？　じっとしているように」
「……」
芳藍の怒りっぷりに驚いていた舞は、ちらっと背中の命を見やる。
命はすやすやと眠っていた。
「うおっ」
あおむけに寝かされた昭示は、芳藍に腹部を触れられる。
「これは」
芳藍は何か見つけたらしく、それを乱暴に引き抜く。
「いててててっ」
「毒針、でしょうか」
それを投げ捨てて、芳藍はそんなことをつぶやいた。
「ど、毒だって。じゃあ、俺は死んじまうのか？」
「そ、そうなるかどうかは解りませんよ。しびれ薬かもしれませんし」
「どっちにしろ毒じゃねぇか」
青ざめた顔の昭示は、芳藍の手を握り締めた。
「すぐに、医者を呼ばないと」
芳藍が立ち上がろうとした時。
上から黒い影が降りてくるのが見えて、昭示は。
「くそったれ」
「きゃっ」

「わわ」
芳藍と舞を手足で突き飛ばし、その凶刃から逃れさせた。
「ぐぅううっ！」
そうしたことで、敵が持つ短刀は昭示の脇腹に刺さってしまう。
「ふはははっ！　女子（おなご）を庇う余裕を見せるとは、できるではないか」
溢れ出る血が、地面を赤く湿らしていく。
「あっ。時充さんに預けて……」
飛び起きた芳藍は、右手を柄に添えようとするも。
刀なんて端から差していないことに気がついた。
舞は起きてしまった命をあやしながら、芳藍に寄り添う。
「さあ、今度こそ葬（ほうむ）って――ぐおぇえっ！？」
口うるさい暴漢の顎（あご）を殴り、それから昭示は飛び起きた。
「だまってろ。くそったれが」
血を抜いたことで、毒が薄まったらしい。
昭示は芳藍と舞を見やり、四肢が動くことを確かめた。
「い、一撃で」
「……」
芳藍と舞は、昭示に殴られた暴漢の首がねじ曲がっているのを目視した。
敵はそれに恐れおののき、昭示の動向をうかがっている。
「黒装束の敵はまだいるぞ。気を抜くなよ！」
昭示の言葉で、芳藍と舞は気を引き締めた。
「芳藍、これを使え」
脇腹に刺さっていた短刀を引き抜いて、それを芳藍へ手渡す昭示。
「し、昭示さん」
「俺は平気だ。芳藍、その時が来たら頼む」
「……っ」
その言葉の意味を、芳藍は察したのだろう。
昭示と芳藍は背中を合わせて、周りを取り囲む黒ずくめの敵を注

視する。
「舞、わたくしから離れないでね」
「う、うん」
舞は芳藍に言うことにうなづき、身構えていた。
「おい。何者だ、お前らは」
「我らは鴉（カラス）。そこの娘の赤子を差し出せ」
嫌だと首を振る舞。
昭示と芳藍は目を合わせて、同時に決意した。
「嫌だと、言ったら？」
「容赦はせぬ。三度はないぞ。その赤子を渡せ」
黒い羽根をところどころに飾ったその一団は、日照を連れ去った男と同じ格好だ。
そう確信した昭示は、怒りに任せて戦っていいのか迷っていた。
「返答は？」
「い～や～だ」
「なら、ここでくたばれ」
黒ずくめの連中が、一斉に三人へ襲いかかる。
「ぬりゃぁあああああああああぁっ！」
昭示は両足で強く地面を踏み込み、大地を打ち鳴らした。
「な、なんだとっ？」
「ぐるぉぇえええええええっ！」
それで敵全員がひるみ、その隙に昭示は近くにいた男の左胸に右腕を貫通させた。
「ま、まだそんな力を」
鬼の血が覚醒しつつあると、昭示と芳藍は感じていた。
「ほうらぁあああんっ！　ぼうっとすんなあ！」
「ぎるぅあぁあああっ」
芳藍も襲い来る男ひとりを斬り捨てた。
「舞、わたくしから離れてはだめよ！」
「は、はい」

昭示は左腕に抱えた亡骸を放り捨て、敵全員を射すくめる。
「ひ、ひるむなっ！　奴は毒をもらっている。かかれえ！」
「うらぁああ！」
「ぐふぇえっ」
敵を殴り伏せて、昭示は芳藍と舞にかかる負担を減らすことに努める。
「せい。やあっ」
芳藍も舞が狙われないように、短刀で敵の攻撃を打ち払い、隙あらば急所へ刺突している。
「死ねえぇえぇっ！」
「……っ」
ふたりが討ちもらした敵ひとりが、舞に向かって短刀を振り下ろす。
それを右手で受け止めた舞は、左足で何かを蹴り上げた。
「ちっ。その手を断ち切ってやるよぉ！」
それは、ついさっき芳藍が捨てた――。
「なっ。や、やめ――うぐぁああっ！」
毒針を左手でつかんで、舞はそれを男の首へと突き刺した。
「あ、あぐあ……」
動きが止まった敵の短刀を奪い取り、舞は。
「さようなら」
そう吐き捨て、倒れた男の静脈を切り、血を噴出させた。
「くっ。俺は」
それを目撃し、昭示の心臓がはねる。
「ぼうっとしてると、殺しちまうぞお！」
「ぐあっ！」
背中を斬られてしまい、その痛みで昭示の中に強い衝動が起こる。
「ぐるぇえええええっ」
「くっ、こいつはまだ動けるというのか」
振り返り様に敵を殴り殺し、昭示は近くにいる敵ににらみを利か

せる。
それで動きを止めていた黒ずくめの一団だが。
「つぅ」
芳藍の白服に赤い染みが広がっているのを見て、強気になる。
「この女、左肩を負傷しているぞ。たたみかけろお！」
敵が一斉に芳藍を狙ってくる。
それを許すことができず、昭示の心を凄まじい殺意が支配する。
「だまれ、ちくしょうがぁあああああああああああああああああああああっ！」
昭示の叫びに呼応して、大気が爆発し、大地が震える。
「ぬ、はぁ……な、くそ」
気づいたら昭示は、両手で敵ふたりの頭を潰していた。
「し、昭示さん……まさか」
――だいじょうぶだ。
そう言葉で伝えようとした昭示だったが。
「く、あ」
もうすでに、理性のたがが外れていた。
「クッキャァアアアアアアアアアッ！」

「こ、こいつはまさか」
「お、鬼だぁ！」
敵は鬼と化した昭示の前にして、腰を抜かしていた。
「ケケッケケッ」
ぎゅっと、芳藍は短刀を強く握り締める。
もう、もう、この刃で討つしかないのでしょうか？
そんなことを考えながら、芳藍は後ろにいる舞を見やった。
「ほ、ほぅらんさぁん」
舞が、歯をかちかちと鳴らしている。
命も、その背中で泣き叫んでいる。

「に、逃げろぉ！　こんなのを相手にしていたら、生命（いのち）がいくつあって――もるぶぇえっ！」
「ぐよぁあああああっ」
「づるぇえええええっ」
昭示は逃げ惑う敵の頭を潰して回り、境内を紅へと染め上げてゆく。
「ケッケケケケッ！」
そして、昭示は芳藍達を見据えた。
「舞、あなたは逃げて」
「えっ」
「わたくしは理性を失った昭示さんを。この手で屠（ほふ）らなくてはならないのです」
「そ、そんな」
「だから、早く」
袴を引っ張る舞は、芳藍に止めてと言葉なく訴える。
「少しの間だけ、おかあさんにさせてくれてありがとうね」
「ほ、ほうら――」
芳藍は舞を突き離して、鬼と化した昭示へ挑む。
「クッケェッ！？」
短刀でその左腕を斬りつけ、鮮血を散らす。
「クッキャアッ！」
「はっ」
昭示の右の拳を横に動いてかわし、芳藍は間合いと位置取りに気をつける。
舞が狙われないようにするためだ。
「舞、何をしているのっ！？」
「で、でも」
「早く逃げなさい！　これは、わたくしと昭示さんの問題なの」
ずきっと、芳藍の左肩に激痛が走る。
「お願い。ふたりきりにして」

「い、いやだよっ！」
「こうなってしまったら、わたくしと昭示さんはね。戦いという行為でしか、愛を確かめられないのよ」
「え……」
皮肉を言いながら、芳藍は昭示の右腕を斬り払い。
こぼれる涙を、返り血で隠した。
「クッケケッケケケエエエエッ！」
「な、治ってる？」
さっき斬りつけた右腕の傷が、みるみるうちに塞がってゆく。
脇腹も、左腕も、おそらく背中も、急速に治癒している。
昭示の回復力に驚愕していた芳藍は、歯噛みしながら舞のほうを振り返った。
「急所を、狙うしか」
ないとはいえ、芳藍は未だに腹を括れていない。
「クッキャアアアッ」
「やあっ！」
芳藍は後退しながら、昭示の手を斬りつける。
「クグゲエエッ」
浅い傷ではひるみもしない昭示。
「あっ」
昭示の手に、芳藍は左肩をつかまれてしまう。
「あぁぁぁあああああああああああっ！？」
そこを握り潰されそうになる。
「クッ、クグゲエエッ！」
間一髪、芳藍はその手首に短刀を突き刺して逃れた。
昭示はそれに驚いて、芳藍から離れる。
「はぁ、くうっ」
寸前で止めたとはいえ、今ので傷口が完全に開いてしまった。
芳藍の左腕から、多量の血が滴り落ちる。
「うぁあああああああああああああああっ！」

叫んで、歯を食い縛って、芳藍は意識を強く保つ。
そして、もう迷わないと決めた。
「舞、早く逃げて。わたくしは、もう長くはこらえられない」
「い、いやだ」
「わがままを言わないで！　あなたは、命を背負っているのよ。あなたがやられたら、命まで傷ついてしまう。だから、早く――つうっ！」
舞を説得している途中で、芳藍は昭示に腹を殴られた。
接近した昭示の腕をつかむ芳藍。
「クゥギェエエエイッ！」
「舞、はやく……」
今ので、芳藍は意識を失いかけた。
守りたいものがある。その一心で、芳藍は昭示に抱きついた。
「昭示さん、愛しています」
唇と唇を重ね合わせる。
昭示の背中に腕を回した芳藍は右手に握る短刀で、左胸の奥にある鼓動を断とうと――。

「心中など、認められるか」
するも、背丈の高い女性が鞘で殴り、ふたりを気絶させた。
「あ、あなたは……」
「おや、お前は」
舞は、この女性を知っている。
右目と髪以外を包帯で隠す女性に、この社まで導いてもらったからだ。
「むっ。伏兵か」
昭示と芳藍が気を失った直後、再び黒ずくめの男達が現れた。
包帯の女性は舞を庇いながら、敵がどれだけいるのかを数える。
「なんだぁっ！　何があったんだ」

それに加えて、騒ぎを知った町人が集まってきた。
「ちっ。面倒だ。強引にあの赤子を奪うぞ！」
一斉に舞へと襲いかかる黒ずくめの男達。
「やれやれ」
一陣の風が吹く。彼らは一瞬のうちに。
「ぐるぉぇぇぇぇっ」
「ぐひれぁぁぁぁぁっ」
「るぶるぅうううううっ」
ばらばらに、斬り捨てられた。
肉片がぼとぼとと、まるで雪のように散り敷かれてゆく。
「うっ」
この場にいる全員が、口を手で押さえた。
「な、なんだっ」
「あ、あいつ……何をしやがった」
包帯の女性は、微動だにしていない。
右手に持つ刀は鞘に収まったまま。ただひとつあった変化は、風が吹いたことのみ。
「ふっ」
皆の動きが止まっている間に、女性は静かに抜刀した。
「ぐふぁぁぁぁぁぁぁっ！」
「ひぎぇぇぇぇぇぇっ！」
女性が左手で振るった刀から、旋風（つむじかぜ）が走る。
それは大地をえぐり、肉を細切（こまぎ）れにし、血と砂の雨を降らせた。
「ちょっと、待って。敵は黒い人だけ――あっ」
「ぎぃぁぁぁぁぁぁっ！」
女性が放つ風は、見境なく人々を斬り刻んでゆく。
「ふふふっ。あっひゃひゃひゃひゃひゃっ！」
女性が笑っているのを見て、舞ははっとなる。
「生まれたから、死にたいのだろう」
「ぐひぁぁぁぁぁぁっ！」

「さあ、その声を聞かせてみろ」
「りゅぬぇえええええっ！」
こ、こわいっ。
こわいよ、いやだよっ！
恐怖に後ずさる舞。
気絶している昭示と芳藍を見つけて、舞は決心した。
「や、やめてよぉおっ！」
手にした短刀で、舞は女性に斬りかかっていた。
その刃は空振りしてしまう。対する女性は舞を見定めて、刀を振り上げる。
「お前も、三枚に下ろされたいのか」
「早く、早く逃げてぇえっ！」
舞の叫び声で、皆が背を向けて逃げ出した。
女性は舞の行動の意味を察して、不気味な笑みを浮かべている。
「その果敢な態度。敬意を表する」
言葉が終わる、刹那（せつな）。
境内にある神木の葉が風になびく音と、烏（からす）の鳴き声が聞こえた。
「うぐぁあああっ！」
「ぎゅえぇえええっ！」
「ぐらぉおあぁあああっ！」
昭示と芳藍、舞と命、包帯の女性以外。
誰ひとりとして、まともな形を残していなかった。
「ふっ」
女性は舞から距離を取ってから、刀を鞘に収めた。
「どうして……？」
膝を崩しながら、舞は女性に問いかけた。
「どうして、人を殺してうれしそうにしてるのおっ！」
「それがどうした」
あっさりとした返答に、舞は失望した。
「関係ない人まで、どうして……」

「運が悪かっただけだ」
「そ、そんな理由で」
「いけないのか？　目の前にあるのを、どんな声で鳴くのか胸躍りながらさばくのは」
舞は目の前にいる恩人に対して、嫌悪感を抱いた。
「な、なんだこりゃ」
「おい、こいつぁ大事だぞ！」
この場に、また無関係の人が訪れてしまった。
「ふっ」
舞はもう犠牲者を出すまいと、短刀を握り締めて女性に立ち向かう。
女性はそれを鞘で受け止め、力任せに押し返そうとした。
「むっ。こうまで戦を望むなら――」
「おんぎゃ～！」
が、命が泣いたことで女性の動きはわずかだが止まる。
舞はその隙を逃さず、短刀を女性の脇腹に刺した。
「ぐぅ」
「えっ」
女性は痛みにうめきながら、舞から離れた。
「やるな。小娘」
女性は血がにじむそこを手で押さえて、微笑んでいた。
「どうして……？」
「その質問が多いな。今度はどういう意味だ」
「お前か、お前がこれだけの人間を害したのか」
町人の方々が、包帯の女性を取り囲む。
「ふぎゃ～っ」
「ふっ。赤子か」
女性は瞬きをして、舞の背中にいる命を見た。
その瞳はとても穏やかで、舞は無意識に構えを解いてしまっている。

「私の名は功刀衣凛（くとういり）。小娘は？」
「えっ？　あ、あたしは――」
「おとなしくその刀を捨てろ！」
邪魔が入り、女性は不愉快そうな目をした。
「あっ、だめっ！」
「案ずるな。名だけを聞かせてくれ」
「あ、あたしは……舞っ！」
「そうか」
突風が吹き、それは落ち葉とともに女性を包む込む。
それが止む頃には、女性の姿は消えてしまっていた。

「はぁ、はあ、ふう。こ、ここか」
樹木に刻まれた矢印が、ここで途切れている。
鷹乃は茂みの向こうに洞穴を見つけて、姿勢を低くした。
「あいつら、日照をどうするつもりなんだ」
黒ずくめの一団が洞穴の付近を警戒している。
「さあねえ」
「わっ」
知った声が聞こえてすぐ、鷹乃は何者かに口を塞がれた。
「しぃっ。こちらの位置がばれるわ」
息苦しさに鷹乃は時充の腕を叩く。
「あっ、ごめん。だいじょぶ？」
「へ、平気です」
深呼吸を繰り返しながら、鷹乃は後ろを見やった。
「よ」
「あの」
「んっ？」
「どうして、ボクが来るまで待っていたんですか」
「単純よ。伝言を頼もうと思ってね」

「でんごん？」
「あたいは、この一件を終えてしばらくしたら旅に出る」
「ど、どうして……」
「事情が複雑すぎて、一言で説明できないの。それより、あの中に日照がいるのは間違いないわ」
「なんで、それがわかるの？」
「耳を澄ませてごらんなさい」
そうしたら「はらへった～っ」という声が、洞穴の中から響いてくる。
「あれは、日照です」
「うしっ。確証が取れた」
「えっ？　もしかして、そのためにボクを」
「うん。それもあるわ」
鷹乃と時充は、洞穴のほうに目線を戻した。
「おいっ、静かにしろ」
「腹減ったばっかりうるせえ！」
急がないと日照が危ない。
焦る鷹乃を、時充は後ろから抱きすくめた。
「あ、あの」
「これ、預けるわ」
「えっと、これは」
短刀を手渡され、鷹乃は後ろを振り返ろうとする。
も、時充はすでに敵陣へ飛び込んでいた。
「て、敵襲だ」
「ぬふぁああ！？」
時充は口から楊枝を飛ばして、敵の急所を的確に撃ち抜いている。
「火遁（かとん）、鳳仙花（ほうせんか）！」
続けざまに口から火を吹いて、洞穴から飛び出す敵を丸焦げにした。
「な、こいつはっ！」

「来たぞ！　我らと同じ抜け忍が」
鷹乃はどうしたらいいのか解らず、時充の忍術を観察していた。
黒ずくめの連中に囲まれてしまう時充。
口元を歪ませながら、時充は鷹乃のほうをちらっと見やった。
「刃向かうのか。時充」
「悪いけど、あたいはあんたらの言いなりにならない。まとめて相手したげるわ」
「ふん。こちらには人質がいるのだぞ」
「だったら、見せなさいよ。生きているかどうか確かめないと、あたいはこのまま戦闘を続行するわ」
「よかろう。おい、あのふたりを出せ！」
――ふたり？
鷹乃は洞穴に近づきながら、隙をうかがう。
「おぎゃ～」
「あ～っ。はらへったぁ」
穴の中から、男ひとりが出てくる。
日照はひもで縛りつけられ、その片腕には赤子が抱えられていた。
「どうだ？　これで、抵抗するのが無駄だと解ってもらえたかな？」
「赤んぼまで、売り払おうとしてたのね」
「ふふっ。今頃あの社では、虹色の目を持つ赤子を捕らえ、他は全員血祭りだろう」
――にじいろ？
あっ、命のことか。
「まさか、あたいをここに誘い込んで」
「そうだ。お前とまともにやりあっては、勝ち目がない。これならば始末ができよう」
「昭示や芳藍を甘く見ないほうがいいわよ。あのふたり、かなりできるほうよん」
「ふっ。他人の心配をしている余裕があるのか？　お前はここで死ぬんだぞ」

「悪いけど、あたいはもうすでに死んでいるのよ」
社のほうを心配していた鷹乃は、その言葉で自分がすべきことを思い出した。
「何を戯(たわ)けたことを。現に生きているではないか」
「どう思おうが、勝手にどうぞ。抜け忍と野盗の集団……鴉(カラス)が、あたいひとり相手にそこまでしないといけないなんて。笑っちゃうわ」
「ほざけっ！」
「ふうっ。解ったわよ。でもその代わり、人質は解放なさい」
「そうだな。それぐらいは配慮してやらねば」
日照を捕らえていた男が、短刀を振りかざした。
「なっ、待ちなさい！」
「やれえっ！」
鷹乃は短刀を引き抜きながら、茂みから飛び出す。
「ぐるぁあああああっ！」
その男の股間に黒い短刀を突き刺し、鷹乃は落ちてくる赤子を片腕で抱き留める。
「おっと」
続けて鷹乃は、短刀で日照を縛るひもを切った。
「あ、鷹乃」
「いいから、早く逃げるぞ」
鷹乃と日照が時充のほうを振り返る頃には。
「氷遁(ひょうとん)、白百合(しらゆり)」
この場は、白銀の世界と化していた。

「わあっ。カキ氷食べ放題だあっ」
日照がそれを見て、よだれを垂らしている。
「こら、食べたら下すわよ。こん中には、生きた人間が入っているんだから」
「ういっ」

この人、すっごい。火を吹いたり、氷を作り出したり。
鷹乃は尊敬の眼差しで、時充を見上げている。
「んっ？　鷹乃、どうしたのよ」
「いえ、その」
どうしてか、時充からげんこつをもらう鷹乃。
「な、なんで殴るんだよぉ」
「もう少し、早く飛び出してほしかったわ」
「え、ええっ？　だ、だって合図なんて、決めてなかったじゃないか」
「ああ、そういえば」
鷹乃は反撃にと、時充の裾を強く引っ張る。
「ご、ごめんっ。今のはあたいがわるか――っ！」
謝る途中、時充が鷹乃と日照を突き飛ばした。
「ぐうっ！」
「え」
「うわ」
後ろから刺されて、時充の腹部から刀が突き出ている。
「な、く」
口から血を吐く時充が、両手を合わせて印を結ぼうとしたら。
「……。おとなしくなさい」
「な、あ、あんたは――ぐあっ！」
四肢が瞬く間に凍りついて、術を封じられた。
「な、なんだ。お前」
「いてて」
刀を引き抜いたのは、青紫の長い髪を振り乱す少女。あの、雪女だ。
雪女は白い布だけを身体に巻いていて、肌のほとんどが露出している。
その右手には鞘、左手には真っ白に輝く刀が握られていた。
「あ、あんたっ！　どういうつもりよ」

時充は雪女の行いが理解できず、がむしゃらに抵抗する。
が、雪女の氷の枷(かせ)はそう簡単には破れない。
「くっ、早く逃げなさい」
鷹乃と日照は、洞穴の中にいる。
ここから出るには、雪女をどうにかしないといけない。
「日照、この奥に別な出口はあるのか」
「知らね」
「だったら、赤ちゃんを頼む」
「それじゃ、鷹乃は」
「いいから、ボクは時充さんを助ける。あの子を引きつけている間に、外に出るんだ」
鷹乃は黒の短刀を構えて、雪女に接近する。
「……。ふっ」
「この、雪女っ。あんた、鷹乃に手を出したら承知しないわよ！」
雪女の周りには、粉雪が舞っている。
彼女が持つ刀は雪景色の中でも、一際目立つ白を持っていた。
「それに、あたいが打った刀を持ち出してえっ！」
「……。静かになさい」
「くっ。鷹乃、まともにやりあったら勝ち目はないわ。だか――っう」
その口が、氷によって塞がれてしまった。
鼻は塞がれていないことを知り、鷹乃は焦らず雪女に近づいていく。
「と、時充さんを放せ！」
「……。ふっ」
鷹乃は腹を決めて、雪女に斬りかかる。
しかし、何かに足を取られて、身動きができなくなった。
「な、こ、氷が――ぐあっ！」
振り下ろされた刀へ短刀を合わせたら、反応が遅れたせいで弾き飛ばされてしまった。

「つっ」
今あるのは、左手に持つ鞘だけ。
「ぷはあっ。鷹乃、鞘の先端を引きなさい！」
「えっ？」
時充が氷を破り、そんなことを叫んだ。
雪女が刀を下から跳ね上げようとするのを見て。
「ぐっ！」
鷹乃はそれを鞘で受け止める。
「わ、わかったよ」
その言葉を信じて、鷹乃は鞘の先端を引き抜いた。
「……なっ」
隠し刃に気づいて身を離した雪女へ、鷹乃はそれを投げつける。
「今だ、日照！」
「うらぁあああああっ！」
日照は赤子を鷹乃へと投じ、ひるんだ雪女へと殴りかかっていた。
「……っ！？」
凄まじい音とともに、大地と洞穴が揺れ動く。
雪女が発生させた氷壁は、日照の拳で半壊している。
その衝撃で刀を落とした雪女は、洞穴の外へ飛びのいた。
「よっしゃあっ！」
時充は氷の枷を砕いて脱出した。
「鷹乃、あんたが投げたのがいいとこに当たったわ」
時充は鷹乃に駆け寄り、その足を縛る氷を火で溶かした。
「おぎゃ～っ」
「うしっ。もう一発殴ってやらぁ」
鷹乃は赤子をあやし、やる気満々の日照を見送る。
時充は黒と白の刃を鞘に収めて、鷹乃の懐にそれを突っ込んだ。
それから落ちている白銀の刀を拾い上げ、時充は鷹乃と一緒に洞穴から出る。
「……。ふっ」

再び雪女と対峙する三人。
「どういうつもりか知んないけど、刀はこちらの手にあるわ」
時充は刀を両手で持ち、鷹乃を庇うように前に立った。
深手を負っていることには違いなく、息は荒く、汗をかいている。
「おい、オレのねえちゃんと時充さんをいじめやがって。覚悟しろお！」
隣にいる日照は、怒りに任せて雪女へと食ってかかる。
「……っ！？」
日照が足踏みをすると、地響きが起きる。
雪女はそれで体勢を崩すも、すぐに持ち直した。
「す、すんごいわね」
「日照の馬鹿力は、おとななんかには負けないよ。特に空腹で怒ってる時は……」
「な、なるへそ」
時充は、無理をして微笑んでいた。
それを見て鷹乃は、短刀を片手に時充の隣に立つ。
「こなくそがぁああっ！」
「……くう！」
雪女は鞘で日照の鉄拳を受ける。
も、その凄まじい衝撃波に血相を変えて後退した。
「お、押している？　い、いけるわ」
左手で腕を押さえている雪女は、悔しそうに歯噛みしていた。
「どうしたあっ！　もう終わりかよ」
「っ」
「こないのなら、こっちからいくぞ」
雪女は鞘を投げ捨て、日照へと雪を放つ。
「あん？」
四肢を氷漬けにされて、日照は大きく息を吸い込む。
「ぬらぁあああああっ！」
それでも、日照を縛りつけることはできない。

「……なっ」
氷の枷をぶち破った日照は、勢いに任せて拳を放った。
それは寸前でかわされてしまう。
が、その拳は雪女の背後にあった樹木を打ち倒す。
「……ちぃ」
「逃げんな、ちきしょぉぉおおおおおおおおっ！」
その絶叫で、周辺の木々と大地が震動した。
風が吹き荒れ、葉っぱが散らばる。
雪女は鷹乃をにらんでから、ぽつりとこうつぶやいた。
「……。さようなら」
強烈な吹雪が起きる。
それに紛れて、雪女は姿を消してしまった。

「やるじゃない。日照」
「ういっ。ほめられちった」
時充は腹部に淡い光を当てながら、日照の頭を撫でていた。
「何を、しているの」
「傷口を塞いでいるのよ。これをやると自然治癒力が落ちるから、あんまりやりたくないんだけど。そうも言ってられない」
それより、と。
「早く、社に戻らないと。皆が心配だわ」
きれいな刀を鞘に収めて、時充はすっくと立ち上がる。
「おぎゃ～っ」
「あっ」
鷹乃は赤子をあやして、時充の顔をあおぎ見た。
「その子はあたいが預かるわ。ふたりは、走れる？」
「はい」
「うい」
「よし。矢印に従って、街道に戻るわよ」

時充はゆっくりと走り出し、鷹乃と日照も駆け足でその後を追った。

第五話

社に戻ってすぐ、時充は昭示と芳藍を処置して屋内に運び入れた。
それから時充は舞、鷹乃と日照を軽く診察し、今はふたりの世話で日照とともに広間にいる。
鷹乃と舞はそれぞれで赤子を背負いながら、境内にて掃除をしていた。
「どうして、こんなに雪が？」
「……」
竹ぼうきで落ち葉とそれを払いながら、鷹乃は舞に質問をする。
「ごめん。答えたくないならいいけど」
「ううん。少し、説明が難しくて」
「ど、ど～ゆ～こと？」
「……えっと。ここで多くの人が死んだの」
「うん」
「その、血や死んじゃった人の身体がね。いきなり白い雪に変わったの」
「はっ？」
「ほら、やっぱり信じられない顔してる」
首を傾げていた鷹乃だが、時充の忍術を思い出して納得する。
そういうことは起きても不思議ではない、と。
「あれ、信じるの？」
「うん」
「ふぅん」
今度は舞が首を傾(かたむ)けている。
「もうすぐ、夕暮れだね」
「長い長い、一日に感じられたよ」
今日は鷹乃に舞、日照にとって大きな変化があった。
芳藍がおかあさんに、昭示がおとうさんになり。

皆が皆で、この社の家族になった事だ。
「ふたりとも、だいじょうぶ？」
「あっ、時充さん」
「……どうも」
鷹乃と舞は頭を下げて、時充にあいさつする。
「さて、あたいは実況見分と事情説明に奔走しないといけないわね」
「日照は？」
「おにぎり食べさせたら、昭示と芳藍を見てるとか言って、ぐうたらしてたわよ」
「しばらく、そのままにしといてください」
「なんでよ？」
「日照は、怒って暴れた後は眠くなるみたいなんで」
「なるへそ」
うんうんと、時充は両手を腰に置いてうなづいている。
「あんただけかい。今この社で証言できるってのは」
境内で検証していた御用聞きの町人達が、時充を見つけて集まってきた。
「改めて、あたいは時充っていうの。昭示と芳藍が寝込んでるから、医師として面倒を見ないといけない。悪いけど、この子らの世話もしないといけないから、遠出はできないわよ」
声をかけられて、真顔で町人と向き合う時充。
見知った顔を見つけて、時充はにこやかに腕を組んでいる。
「そうかい。おっと、坊主」
「ボクは女だっ！」
昼前のやりとりが再現される。
「御用聞きの皆さん。鷹乃をからかう暇があるんなら、帰ったらどうだい？」
「おっと、すまねぇ。んで、この雪は本当に人間の骸だったのか？
って、信じない連中が多いんだ。オイラの口からじゃダメだ。説明してやってくれないか」

時充は面倒くさくて、頭をかいていた。
「簡潔に説明するわ。この社を襲ったり日照って女の子を誘拐したのは、抜け忍と野盗で構成されている鴉（カラス）っていう一団よ」
「からす？　抜け忍？　野盗だって？」
「ええ。抜け忍がそこら辺の悪党に忍（しのび）の戦闘術を仕込んだ、厄介な集団ね」
「なんだって、そんな奴らがこの近くに？」
「多分、この付近の治安がよろしくないからね」
「具体的に、そいつらは何を目的に動いているんだ？」
「略奪、人身売買、虐殺、私利私欲のためなら何でもやっちゃう黒ずくめの人間ばっかり。ただ抜け忍自体の数が少ないから、統率している人間をさっさと片付けてしまえば、組織としてはかなり脆弱な部類に入るわ」
「ふうん。しかし、どうしてあんたはそいつらにやたら詳しいんだ？」
「さあねえ」
楊枝を口に咥えて、時充は肩をすくめる。
その目は町人の反応をうかがっていた。
「じゃあ、白い雪になったのは」
「そんなのあたいは知らないわよ。なんかの術じゃないの？」
「む。貴様、何か隠していないか？　素直に白状したほうがいいぞ」
「お縄につきたくなければ、そうしたほうがいいな」
旅人の服装をする時充は、町人からすれば信用するに足りないよう。
それを察して、時充は腕を組み直した。
「それは、昭示と芳藍に死ねと言っているの？」
「ち、違う。別に、他の医師を連れてくれれば」
「同じよ。ふたりに死ねと言っているようなものね」
「な、なんだと」
「この子らに食事の世話ができるのは、今のところあたいしかいな

いわ。見知らぬ医師を連れてきたとしても、この子らが警戒して、治療に専念できるかどうか。第一、そいつが食事まで面倒見るとは限らないし――って、んなことをいちいち説く必要があるの？」
心底不満そうに、時充は町人らをにらみつける。
険悪な空気をどうにかしようと、年配の御用聞きが間に入った。
「まぁまぁ。とりあえずオイラがまとめよう。カラスって一団がここを襲って、何人もの負傷者と死者が出たが、死者だけは雪に変わった。それでいいかい？」
「付け足して、鷹乃が背負っている赤んぼと日照が拉致されたけど、鷹乃の活躍で救出に成功。この社でも舞と謎の女性の活躍で、ふたりと社を守れた。以上よ、理解できた？」
時充の高圧的な態度に、反感を抱いている町人が多数。
それを見兼ねて、鷹乃と舞は時充の隣に並ぶ。
「うん。そうだよ」
「……間違いない」
ふたりは町人を前にして、頬をふくらませて抗議している。
それがおかしくて、時充と年配の御用聞きは吹き出してしまった。
「この中で理解がいいのは、あなたひとりだけね」
「ボクは嫌いだけどねっ」
「ははは っ。坊主にはすっかり嫌われちまったか」
「ボクは女だって！」
「うんうん。この坊主の将来が楽しみだ」
「女だって、言ってるのにっ」
いじるにいじられて、鷹乃はすねてしまう。
ぽんっと、年配の御用聞きは鷹乃の頭を撫でた。
「昼の一件もそうだが、お前さんには男気がある。弱い者を見捨てられないその気持ち、いつまでも忘れるなよ」
「う、うん」
「よし。この辺で引き上げるぞ。坊主らの腹の虫が鳴きっぱなしだからな」

「ぼ、ボクは……女だ」
鷹乃は、小声でそう主張した。

社内の広間にて正座し、食事をしている時充達。
「んやっ。味噌汁はいいけど、ご飯が冷えててごめんね」
「おいしいです。芳藍さんのご飯」
「……うん」
「ぐがぁあああ」
日照はおにぎりを何個か平らげ、味噌汁と松茸を頬張った後、横になって眠っている。
かけ布団は時充が被せたのだが、日照の寝相は悪い。
すでに布団は日照から外れている。
「最初ぐらい、皆で一緒に食べたかったなぁ」
「……次があるよ」
「そ、そうだね」
玄米飯を噛み砕き、味噌汁を飲み込む。
鷹乃と舞はまともな食事にありつけ、興奮して米粒を膳に散らかしている。
「ありゃりゃ。ま、自分らが食べ終えたら、赤んぼにご飯をあげてね」
「はぁい」
「……はい」
時充は小さいお椀によそったおかゆを、ふたつ用意してくれていた。
鷹乃と舞は自分の分を食べ終えて、背中にいる赤子におかゆを食べさせる。
「ほらっ」
「命。お口をあ～ん」
さじでそれをすくって、ふぅふぅと息を吹きかけて、その小さい

口に運んであげる。
「食べさせたら、後でげっぷさせなさいよ」
「はぁい」
「……うん」
舞が命と呼びながらおかゆを食べさせているのを見て、鷹乃はちょっぴりうらやましいと思った。
「そーいや、その赤んぼ。名前ないのよね」
「……そだね」
「あの、時充さん」
「安城光（あんじょうひかり）」
「はい？」
鷹乃が言うよりも先に、時充は赤子を名付けていた。
「あれ、鷹乃？　ふざけんなって言いたげな目をしてるけど……」
「なんでもありませんっ」
「ああ、そういうことね。だったら、好きに――」
「光で、いいです」
「そ、そうっ？」
赤子の笑顔を見ていたら、鷹乃は怒るのが馬鹿馬鹿しくなったようだ。
ふいと、時充の目線が隣に移った。
「それはそうと、舞」
「……はい？」
「命は虹色の目をしているの？」
ぎくりと、舞が反応する。
「鷹乃が抱く光もそうだけど、命も普通とは思えない眼（まなこ）を持っている。連中が狙うのもうなづける理由だわ」
鷹乃が抱える光の瞳も、太陽のような輝きを持っていた。
「……あの」
「いいわよ。別に見せなくても。ここからでもお天道様と虹の架け橋が見えるから」

鷹乃と舞は、たがいに抱く赤子の瞳をのぞき見た。
それからふたりは顔を上げて、じぃっと見合っている。
「おふたりさん、何やってんの？」
「舞の瞳も、黒くてきれいだと思って」
「……前に同じく」
恥ずかしくなって、ふたりは同時に目線をそらした。
「それはいいけど、ひとつ気になったんだよね。ふたりはさ、どうして妹と一緒に家を飛び出したの？」
「飛び出したんじゃ、ないよ」
「追い出された？」
「そっちが正解だね」
「なら、簡潔に教えてくれない？　芳藍や昭示にも、いずれ話さないといけない時が来るんだからさ」
「気になるの？　時充さん」
「だから、こうして聞いているんじゃないの」
「ふ～ん」
鷹乃は眠っている日照を見た。
「んや？　日照が関係しているのね」
時充はそれだけで察したらしく、鷹乃をじっと見つめている。
「日照が大食らいで、食費がかさむからって捨てようとしたんだ。許せなくて反抗したら、ボクも追い出されちゃったんだよ」
「なるへそ。もういいわ」
次に、時充は舞を見た。
「……あたしも？」
「別に言わなくても大体は察せるわ。命が売り飛ばされるとか、そんな事情で家出したんでしょう？」
「っ」
図星だった。
「さて、おしゃべりはこれぐらいにしましょう。食事を終えたら、お風呂を沸かさないといけないしねぇ」

「自分から話を振っといたくせに」
「早く済ませて、昭示と芳藍の具合を診たいのよ」
その話を持ち出すと、鷹乃と舞はだんまりになる。
「けぽ」
「ふぷ」
光と命の背中をさすり、げっぷを出させた鷹乃と舞。
「ごちそうさまでした」
「……ごちそうさま」
ふたりは手を合わせて、深々とおじぎをした。
「んやっ。おそまつさま」
すでに完食していた時充は、後片付けを始める。
「ボクらも手伝うよ」
「ううん。ふたりは日照と、隣の広間に寝てるふたりをお願い。どうせ役に立たないし」
「な、なんだとっ。それぐ――うっ」
時充に挑発されて、意気込んで立ち上がろうとした鷹乃だったが。
「ほらねっ」
正座によって足がしびれたらしく、四つん這いになっている。
「しばらく動かないほうがいいわよ。赤子背負ってるんだから、転んだりしたら大変だし」
「は、はい」
「……うく」
舞も、同じ体勢になっている。
ふたりは情けない姿で、しびれが抜けるのを待たなければならなかった。

風呂場で光と命のおしめを変えるついでに、鷹乃と舞は身体を洗っていた。
「……ねえ」

「んっ？」
「鷹乃は、どうしてあたしと命を助けたの？」
「え？　う～ん。ただ、そうしたかったからかな」
「……。そう」
ふたりは手桶で湯をすくい、それを頭から被る。
「理由なんてないよ。気がついたら、いつの間にか行動してた」
「……危ないよ」
「わかっているさ。わかっているけど、見て見ぬ振りなんてできないよ」
「……。優しいんだね」
「それは、違うよ」
「どうして？」
「ボクは優しくしたいとか、かわいそうだとか、そんな気持ちで舞と命を庇ったんじゃないよ。ただ、そうしたかっただけさ。ボクの心が、ふたりを守りたいと……後悔したくないと。その声に背を向けたり、逆らえなかっただけさ」
「やっぱり、優しいよ」
「そ、そうなの？」
「……うん」
照れ隠しに、そっぽ向く鷹乃。
「……ありがと」
ちょっと遅れて、舞はにこりと微笑んだ。
「そういう舞もさ、昭示さんと芳藍さんを守ったんだろう？」
「……あたしも助けられた」
「ふたりに？」
「ううん。全身を包帯で巻いた、女の人に」
「誰だよ、それ」
「この町に来る前に、あたしと命を悪い人から守ってくれて、ここに導いてくれたの」
「ふうん。いい人もいるんだね」

「……どうなんだろう」
「えっ？　どうって、皆を助けたからいい人なんじゃないの？」
舞は鷹乃をじっと見つめ、溜息をついた。
「関係ない町の人まで、斬り殺したんだよ？」
「そ、それは……どうして」
「あたしも、そう聞いたよ。そうしたかったからって言ってた」
ふたりは手桶にすくった湯に、赤子の半身を浸からせる。
そうしてから、手でゆっくりと身体を洗ってあげた。
「考え方なんて、人それぞれで違うよ。その人は、昭示さんや芳藍さん、舞に命を傷つけようとしたのかい？」
「それは、ないけど」
「だったら、その人はいい人だと思うよ」
「どうしてっ！」
舞が語気を荒げたのに驚いて、光が泣き出してしまった。
「あー、よしよし」
命も泣きそうになったので、舞も腕に抱いてあやしている。
「話してよ。舞のほうで何があったのか」
「……。うん」
それを聞いてから、鷹乃も何があったのか簡単に説明する。
「やっぱり、その人はいい人だよ」
「……どうして？」
「昭示さんと芳藍さんが死んじゃってたら、舞がそこにいた全員を皆殺しにした犯人だと思われたかもしれない。その人は舞と命を守るためにしょうがなく悪者を演じて、自分に罪を被せたんじゃないかな」
はっと、舞は口を手で押さえる。
「それに、日照がさらわれる時に敵は町人に化けていた。もしかしたら、その人はそれも判別できていたのかもしれない」
鷹乃の言葉で、舞が瞳を潤ませる。
「もしかしたら、だよ？　ボクの言っていることは、全部正しいと

は限らない」
「……っ」
涙をこらえている、舞。
鷹乃は光におしめを当てて、先にここを出た。

「んやっ。おかえり」
広間に戻った鷹乃は、無言で芳藍の脇に正座する。
「ど、どうしたんだい」
鷹乃は芳藍と昭示の顔を一瞥(いちべつ)して、顔を上げて時充の目を見つめた。
「足は崩してもいいわよ」
言いながら、あぐらをかく時充。
「そういうつもりはありません」
「んっ？　随分とかしこまってるわね」
「旅に、出ちゃうんですか？」
鷹乃の言葉を受けて、時充は少し間を置いてから返事した。
「それは撤回する」
思わず頬が緩んでしまう鷹乃。
「嬉しそうね。でも、すぐではなくなっただけよ」
「……あっ」
話の途中で、舞がふすまを開けた。
「こっちに来なさい」
「……邪魔なんじゃ」
気にしなくていい、と時充は手招きする。
舞は鷹乃の隣に正座して、芳藍のほうを見た。
「心配をかけて、すみませんね」
「起きて、たの？」
「……おはようございます」
びっくりしている鷹乃をよそに、舞は冷静にあいさつした。

「昭示さんは……」
「しばらく起きないわね」
「暴れたから？」
「んやっ？　鷹乃、舞から――」
聞いたと、鷹乃はうなづく。
芳藍と時充は、ふうっと一息つく。
「そう。なら話は早いわ」
時充は真剣な表情で、鷹乃の目を見た。
「鷹乃、あんたは鬼と化した昭示を怖いと思うかい？」
頭をかきながら時充は、鷹乃に問いかけた。
「実際には見てないけどさ。空腹の日照をたしなめてきたボクにとっては、それぐらいじゃおどろかないね」
「なるへそ。確かにあの日照は、とんでもなかったわねぇ」
芳藍と舞は首を傾げて、鷹乃と時充はそれを思い出して溜息をひとつ。
「がぐがあああ」
いびきをかいて寝ている日照を見て、ふたりはまた溜息をひとつ。
鷹乃は膝で歩いて、日照に布団をかけてあげた。
「えっと、芳藍さんの具合は」
「平気よ。鷹乃、心配してくれてありがとうね」
「う、うん」
「それよりも、おねえちゃんとは呼ばないのね」
「今日から、おかあさんですから。おねえちゃんと呼ぶのは、失礼かなぁと思って」
それには舞もこくこくとうなづいている。
「う～ん。まあ、しょうがないですね」
芳藍は名残惜しげに、それを承諾（しょうだく）した。
「んやっ。余計な話はそれで終わりかい？」
「ごめんなさい」
「謝らなくていいさ。日照と昭示は寝てるけど、ここであたいの素

性について教えとくわ」
「……」
楊枝を咥えたところを見て、鷹乃はぎくりと反応する。
一方、舞はいぶかしげな顔をして、時充の全身を眺めていた。
「安心なさい。鷹乃、撃ったりしないから」
「そ、そーですかっ」
そのやりとりで、時充が何者か皆にも知れ渡った。
「あたいは十五年前、抜け忍になったの」
「ボクらが、生まれる前に？」
「んやっ？　そういえば、鷹乃と舞は」
「ボクは七つで、日照は五つです」
「……鷹乃と同じく」
時充は憂鬱（ゆううつ）な吐息をもらした後、話を続けた。
「松平――じゃない。徳川については、知ってるわね」
「幕府、ですね。それがどうしたと？」
「芳藍。あたいがその幕府が作られる前に、徳川を暗殺しようとした人間のひとりだと言ったらどうする？」
鷹乃と舞は理解できてないようだが、芳藍だけは目を見開いていた。
「となると、時充さんは九つの時すでに」
「忍者だったわ。あたいは反対派の忍（しのび）と相対して、連中を片付けたんだけどね。ひょんなことで誤解されちゃって。仕方なく抜け忍となり、追手とやりあったわ」
肩をすくめて、時充は溜息をひとつ。
「それから旅をしつつ、刀鍛冶として生きていこうと思ったんだけど。今こうして、過去の精算をするはめになっている」
「精算って。時充さんは、あのカラスって連中とどんな関係なんだよ」
鷹乃の質問を受け、時充は口に咥えていた楊枝を指でつまむ。
「復讐（ふくしゅう）よ。元はと言えば、反対派の残党が鴉（カラス）を作ったの。それに属

する抜け忍のほとんどが、あたいに対してよろしくない感情を抱いている」
それはそう、と時充は鷹乃と舞を交互に見た。
「あたいと同じような不可思議な術を使う人間を、皆は見た？」
ふたりだけでなく、芳藍も首を横に振った。
「鴉（カラス）は抜け忍と野盗の集団と言ったわね。覚えてる？」
「う、うん。その、抜け忍は何人ぐらいいるのさ」
「おそらく、三人」
「な、なんで確信が持てるの？」
「単純よ。町内への潜伏、社への襲撃、日照を誘拐してあたいを殺そうとした連中。これらを踏まえると、三人が一番妥当」
時充の推論に、芳藍は納得してうなづいていた。
鷹乃と舞は理解できずに、たがいに顔を見合わせている。
「少なからず、内ふたりは今日中に死んだと思うわ」
「はっ？　な、なんでまた」
「ふふっ。だって、そうとしか思えないもの」
説明もせず、時充は腹を抱えて笑っている。
「さて、これぐらいでいいでしょう。あたいは倉のほうで作業するわ」
急に真顔になった時充は、よっこらせと腰を上げた。
「作業ってなにさ？」
「刀を研いでいるのよ。これでも一応、刀鍛冶なものでねぇ」
伸びをしている時充に、芳藍はあることを頼んだ。
「あの、でしたら部屋に行って服を持ってきてもらえませんか」
「この子らのも？」
「ええ」
「ふ～ん」
鷹乃と舞をじっと見下ろしている時充。
ふたりは何かされると勘違いし、芳藍に寄り添う。
「うむ」

次に時充は、寝ている日照も観察していた。
「目測で、これだというのを選んでくるわ」
「は、はあ。合わなくても、わたくしが後でどうにかしますよ」
「芳藍はおとなしく寝てなさい」
静かにそう告げた後、時充はここを退室した。

明朝、芳藍は鷹乃に揺り起こされた。
「芳藍さん。わっ」
「あら？　どうか、しましたか」
眠気で閉じかけた瞳を軽くこすり、芳藍は鷹乃に目を凝らす。
鷹乃は巫女装束に袖を通しており、それを見て芳藍は期待に胸を躍らせる。
――鷹乃が似合うのですから、日照と舞の姿を見るのが楽しみですね。
「日照が空腹でさ。昨日の余ったご飯を食べても、もうちょっとってうるさいんだ」
ゆっくりと上体を起こして、芳藍は左肩に手をやる。
「安心しな。あたいが治しといたから」
「と、時充さん？」
声がしたほうを振り向いて、隣に昭示がいないことに気づく。
代わりにそこには、あぐらをかいた時充がいた。
「いいから早く、朝餉作るの手伝ってくれない？　昭示だけじゃ、日照を止められるかどうか」
「昭示さんは、元気なんですか」
「一応ね。早くしないと、日照が昭示に潰されるわよ」
芳藍は鷹乃に助けてもらい、布団から出て、立ち上がった。
「目覚めて早々、家事に勤(いそ)しむなんて思いもしませんでした」
「ごめんよ。炊飯はあたいがやるし、芳藍と鷹乃は補助するだけでいいわ」

「承知しました」
用意された服に着替える芳藍。
鷹乃にじっと見つめられているので、気恥ずかしいようだ。
「ど、どうしました？」
芳藍が胸にさらしを巻いていると、鷹乃が目をうるうるさせる。
その様子が気になり、芳藍は鷹乃に声をかけた。
「おっぱい、おっきい」
「はいっ？」
鷹乃がうなだれて溜息をついているのを見て、時充が鼻で笑った。
「ひどいっ」
「いいじゃない。あたいなんか、とっくに成長止まってるしぃ」
腕を組んで、自身の胸を隠している時充。
対する鷹乃は、背中にいる光が泣き出して慌てている。
「まだちっこいんだから、大きくなる可能性はあるわよ」
「う、うっさい」
「さて、あたいは台所に向かうわ。ふたりは後からお願いね」
腰を上げて、時充は足取り軽やかに広間を出ていく。
頬をふくらませて、不満そうに時充を見送る鷹乃。
――あれ？
そういえば、どうして時充さんは巫女装束を着ないのでしょうか。
以前欲しいと言っていたけど、あれは冗談だったのかしら。
「鷹乃。何でもよく食べれば、いつか大きくなりますよ」
その頭を撫でながら、好き嫌いをしないように鷹乃に言い聞かせる芳藍。
「いつ？」
「そ、それは……明言できませんね」
「う～ん。芳藍さんは、何を食べてそんなに？」
「そうですねぇ。幼い頃は、お豆腐を口にすることが多かったような」
「じゃあ」

「でも、お豆腐切らしてますよ？」
がっくりと、解りやすくうなだれる鷹乃。
その背中で光が笑っている。
「では、お昼頃に買い出しに行きましょうか」
「いいの？　芳藍さん、まだ」
「付き添ってくれれば、平気です。さあ、おしゃべりはここまでにして手伝いに参りましょう」
「はぁい」

広間に集い、皆はいただきますをする。
炊き立ての玄米飯に、余った松茸が入っている味噌汁。
おかずは野菜の煮物だけ。
「んぐっ。こうして皆で食べれて、幸せだねぇ」
日照が唐突にそんなことを言い出した。
「おっさんくせぇこと言うな。少し前まで、俺で遊んでたくせに」
「うぅ」
そう指摘されて、日照は照れている。
日照と昭示が仲良しなことに、芳藍は少し複雑だった。
「昭示さん、身体の具合はどうですか？」
独り占めされるのが嫌で、芳藍は昭示に話しかける。
「んっ？　ああ、俺より芳藍が心配だ」
昨日の事もあってか、暗い顔をする昭示。
「わたくしは平気です。まだ本調子とは言えませんが、時充さんのおかげでかなり回復しています」
精一杯微笑んで、芳藍は皆にだいじょうぶだと伝える。
「あつっ」
「んや。鷹乃、あんたも猫舌なのね」
「ふん。おっぱい、ちっこいくせに」
「うっさいわね！」

朝の一件をまだ引きずっている、鷹乃と時充。
火花を散らすふたりは、黙々と箸を進めている。
「……芳藍さん」
「んっ？」
舞が隣にいる芳藍に声をかけた。
心配そうに見つめている舞に、芳藍は微笑みを返した。
「気にせずに、舞もきちんと食べましょう」
「……はい」
皆は楽しそうだった。
この平穏がいつまで続くのか。今だけのものなのかもしれない。
そんな不安が、鷹乃と舞を突き動かした。

朝餉後。
芳藍は鷹乃と舞と一緒に、竹ぼうきを手に境内を掃除をしていた。
昭示と日照は町のほうへ魚を買いに出かけている。
「んや。様になってるねぇ」
時充が倉のほうから出てきて、芳藍達にあいさつをする。
その手には、見覚えのある刀があった。
「芳藍、これを」
「預けていた刀ですね」
「有事の際、これがなくて困ったんじゃないの？」
「それは否定できませんね。敵から奪った短刀で、どうにかなりましたから」
「んや。とりあえず、これは帯刀（たいとう）しときなさい」
言われるがままに、芳藍はその刀を帯に差した。
右手で柄を握り、左手で鞘を押さえて具合を確かめる。
「……あの」
「んや。なんだい？」
舞が時充の服の裾を引っ張って、こう頼み込む。

「刀を、ひとつ」
「あっ、ボクも」
鷹乃もそれに乗じて、時充に刀を催促していた。
「冗談で言ってるのかい？」
「本気です」
「……同じく」
屈んで、時充はふたりと向き合った。
「理由を言いなさい」
「ボクは、皆を守る力が欲しい」
「命を守りたい。もっと強くなりたいの」
突然の申し出に、時充はうなづいて納得する。
「あいひゃひゃっ！」
「いたいいたいっ！」
はずもなく、鷹乃と舞の頬をつねっていた。
「な、なにすんだっ」
「……うぅ」
恨めしそうににらむふたりに対して、時充は真顔でその目を見据えた。
「あんたら、力と強さを同じものとして考えてないかい」
「えっ。ち、違うの？」
「……はい？」
「やれやれ」
首を横に振り、溜息をもらす時充。
「あいひゃあっ！」
「うっひぃっ！」
それからまたふたりの頬をつねり、ぐりぐりと回している。
「時充さんっ！」
芳藍が注意をすると、時充は苦笑いしながらその手を離した。
涙を浮かべているふたりに、時充はこう教え諭(さと)す。
「いいかい？　刀って、刃物ってのはね。痛みを相手に与えるんだ」

「わ、わかってるよ」
「鷹乃、話は最後まで聞いて。舞も、ちゃんと聞きなさい」
「……はい」
頭を撫でてから、時充はふたりの肩に手を置いた。
「痛いだろ？　涙が出るくらいに」
それには、ふたりは素直にうなづく。
「切り傷はね、それ以上の苦痛なんだ。ふたりはさ、それをあたいや芳藍、昭示に与えたいと思うのかい？」
「思わないよ」
「……嫌だよ」
「だろう？　けど自分ではそう思っても、時として間違い、刃を大切な人に向けてしまう場合もあるんだ」
「そんなの絶対にないよ」
「……。うん」
「保障はどこにあるんだい？　ふたりが、あたいの打った刀を誤って使わないって保障はさ」
舞は伏し目になり、黙り込んでしまった。
鷹乃はうつむきはするものの、時充から目をそらしていない。
諦めきれないのか、舞は顔を上げた。
「ふたりは、自分が弱いと思うから力を得たいと、刀をあたいに求めたんだろう？」
時充はおもむろに立ち上がり、ふたりの頭を優しく撫でた。
「は、はいっ」
「……うん」
「ふたりは、強い子だと思うけどね」
きょとんとしている、鷹乃と舞。
やがて、その意味を理解したのか鷹乃が口を開く。
「ボクは皆に助けてもらった。守られてばっかりで、ひとりじゃ何もできなかったんだ。何が強い子だよ。そうやって、おとなはごまかすのかよ！」

「助けてもらったり守られることが、弱いと馬鹿にされたって感じるの？」
「そ、そうだよ。皆は、ボクが弱いから助けたんだろう！」
「鷹乃、あんたは正義感が強い」
「うっ。な、なんだよいきなり」
「困っている人を助けたい、弱い人を守りたい。鷹乃さ。あなたはその気持ちを、行為を、不純だと思うの？」
「っ」
「あなたはその気持ちに嘘をつかず、純粋な想いで行動に移した。自らの危険を承知で、あなたは強者に立ち向かった。あたい達だって同じよ。そんなあなたと真正面から向き合いたくなったから、手を差し伸べたの」
「ぼ、ボクは……」
「舞と命を庇ったあなたを、誰が弱いって罵るのよ？　あたいも、昭示と芳藍も、舞も命も、御用聞きの方々も、誰もあなたを馬鹿にしてないじゃない。その気持ちを大切にしなさいって、あのおじさんも言ってたでしょう？」
　はっと、鷹乃は胸を押さえる。
「鷹乃、あんたにないのは力だけさ。その強さを表現する力がないから、自信が持てないんじゃないの？」
「……っ」
　鷹乃は頬を染めて、その上に涙を流した。
「あはは。鷹乃、あんた少し頑固ね。強がったりせず、もっと皆を頼りなさい」
「う、うっさい」
「立派なんだから、胸を張りなさいよ」
「と、時充さんよりあるもんねぇ」
「――なんやて？」
　そこだけ、時充が声色を変えた。
　皆は固まっていたが、時充は構わずに話を続ける。

「こほんっ。次は舞ね」
「……あ、はい」
呼びかけられて、舞はぼんやりから立ち直った。
「舞は、命を守りたいんでしょう？」
「う、うん。そうです」
「そのためなら、あたいを屠れるかい？」
「……っ」
背筋が凍るような威圧的な眼差し。
舞はそれに驚いて、たじろいでしまう。
「ほら、逡巡（しゅんじゅん）した。そうやって迷うから、後ろを狙われるのよ」
「ど、どうしたら」
「単純だよ。信じればいい」
「し、信じる？　なにを」
「あたいや芳藍、鷹乃に日照、昭示を。あなたに手を差し伸べた人をね」
「そ、それは……」
「中には、その気持ちに付け込む輩（やから）もいるかもしれない」
「じゃあ」
「けど、舞はあたい達が裏切ると思うかい？」
その一言に、舞がぴくりと反応した。
「背中にいる命を、あたいや芳藍に預けてもいいのよ」
「え」
「ふっ。信じるのが、怖いの？」
「……っ」
その表情からは、戸惑いの色がうかがえた。
「舞、あなただけじゃないのよ。命を大切にしたいって想いは、鷹乃だって行動で示したじゃない」
「そ、そうだけど」
恥ずかしそうに、舞は鷹乃を見る。
鷹乃は照れ隠しにそっぽ向いた。

「舞にとって命を大切にしたいという気持ちはさ、弱い自分を隠すだけの強がりなのかい？」
「そ、そんなことは」
「だったら、命を守る最善の方法があなたの背中にあり続けるだけとは限らないわ。あなたひとりで守るのではなく、皆と手を取り合うのがあたいは最善だと思う。違うかい？」
「……っ」
「現に、あなたは命を背負った状態で敵と戦うはめになった。昭示や芳藍がいて、謎の女性が駆けつけて、あなたも命も無事で済んでいる。これが、どういうことか解る？」
「守られた、と？」
「そう。どうしてあなたと命を守ったと思う？」
「……わからない」
「好きだからよ」
「っ」
「妹を守りたい。そのために強くなりたいという気持ちはうなづけるわ。でもその前に、あなた自身とあなたの大切なものを、あたい達にも背負わせてくれない？」
「あたし……と、命を？」
「あなたが死んでしまったら、妹である命が未来に泣いちゃうのよ。それぐらい、理解できるでしょう？」
「……」
「ひとりで背負わないで。この手を握ることからでいい。少しずつ、皆を信じてあげて。好きになってよ」
時充が差し出した手を、舞はおずおずと握った。
「うん。よくできた」
「あうっ」
頭を撫でられて、舞は頬を赤くした。
「さあて、あたいは倉に戻って作業しないと」
時充が踵（きびす）を返した時。

「あっ」
「んや？　どしたの芳藍」
思わず声を上げてしまい、皆が芳藍のほうを向く。
「お豆腐を買うついでに、時充さん」
「ん。あの件ね。なら、作業の再開は少し遅らせないと」
「それもあるんですけど。ここで待っていてください」
「んや。ああ、それね」
時充が目を細めて、にや～っと笑う。
芳藍はその理解力に溜息をつき、社内に戻っていった。
「早くしなよ」
「は、はいっ」
時充はその後、首を傾げる鷹乃と舞に妙なことを吹き込んだ。

時充に案内され、芳藍は鷹乃と手を繋いで町内を歩く。
その背中にいる光はすやすやと眠っており、鷹乃の子守りのうまさがうかがえる。
「鷹乃」
「んっ？」
「時充さんに、何を吹き込まれました？」
「ふぇ？　あ、その、芳藍さんは女の子の日だから、あんまり無理させちゃいけないって。それと、昭示さんは好機を逃したとか言ってたけど。ど、どーゆー意味っ？」
前を歩く時充をにらみつける芳藍。
「んやっ？」
芳藍の殺気を感じたらしく、時充は足を止めて後ろを振り向いた。
「ほ、芳藍……」
青ざめた顔の時充は、芳藍の気迫に圧倒されていた。
「時充さん。もう少し婉曲（えんきょく）な言い回しができるのでは？」
「充分に遠回りしたでしょ……？」

「後で意味を理解して、この子らが頬を赤らめるのを楽しみにしているのですか？」
「おっ、正解。女の子が性を知って恥ずかしがるの、本当に見ててたのしぃ――ぐふっ」
時充に鉄拳制裁を下す芳藍。
その場に崩れ落ちた時充は、お腹を押さえて声を出さずに悶えている。
「ほ、ほぅらんさぁん？」
「あ、鷹乃。悪い事をしたら、あなたもこうなりますからね」
「う、うん。ボク、ぜったいにわるいことしません」
繋いだ手から、じっとりと汗を感じた。
芳藍はちょっとやりすぎたと反省する。
「さあ、鷹乃。時充さんはほっといて、先にお豆腐を買いましょうね」
「う、うん」

豆腐の配達を依頼した後、芳藍は立ち直った時充と一緒に呉服屋におもむいた。
「ん？　あれ、芳藍ちゃん？」
「はい？」
ここの主人は若い女性で、着ている服もそれなりに上等だと解る。
長い黒髪を振り乱し、前髪を手で後ろにやってから、その人は芳藍に問いかけた。
「あれ、あっしのこと覚えてない？」
「……。えっと」
芳藍はその人の緑色の目を見て、何か引っかかったらしい。
「結葵流翠（ゆうきるすい）って聞けば、思い出すかい？」
「あ」
その名前を聞いて、芳藍は思い出す。

この人は芳藍と昭示が幼い頃、社にいた人だ。
記憶がおぼろげな芳藍は、苦笑いしながらうなづいた。
「ま、仕方ないね。あんたと昭示、かなりちっこかったし」
「んや。顔見知りかい？」
時充に聞かれ、芳藍は指で頬をかきながら答える。
「母上が病死する前に、社にいた記憶はあるんですが……」
「あんまり覚えてないってことね」
流翠の鋭い指摘に、芳藍は頭を下げる。
「別にいいわよ。芳藍ちゃん、まだ五つだったもんね」
流翠は芳藍の反物を品定めし、首を縦に振りながらこんな一言。
「これだけのものを織れる人、なかなかいないのよね。まさか、詩於（し お）さんの娘さんが織り上げていたとは。ふむふむ、納得だわ」
「はぁ。そうですか」
芳藍は母親の手帳を見て裁縫を覚えたので、ただの真似事ぐらいにしか思っていなかった。
こうして評価されて、芳藍は嬉しさに頬を緩ませる。
「おや、坊やは子守りをしているのね」
「ボクは女ですけど」
むくれて、鷹乃は流翠をにらんだ。
「えっ？　あ、そうなの」
驚いて、流翠は手で右胸を押さえる。
「ん～？　あんた、誰かに似てるね」
「なんだよ。ごまかすな」
「ごめんごめん。では、この反物は大事に仕立てます。報酬として、これをどうぞ」
流翠が帯紙を巻いた小判を何十両も出したので、芳藍は言葉なくぎょうてんする。
「んやっ。もらっときなよ。社では子供も増えて、食費がかさむからさ」
「でも、ここで働く人もいますし。それほど多くはいただけません」

困った様子で、流翠は巾着袋に小判を詰める。
「じゃ、はい」
「うっ。なんでボクに」
「契約金とかもろもろに、謝罪の意を込めて。どうぞお受け取りください」
それを鷹乃に手渡して、流翠はにこにこと微笑む。
ふと鷹乃は、後ろの芳藍をあおぎ見た。
「いいですよ、鷹乃。それをあなたのお小遣いにしても」
「だめだよ。これは、芳藍さんのお金でしょ。ボクが勝手に使ったら、それこそ悪いことじゃないか」
言いながら、びくびくしている鷹乃。
「わっ」
誤解を解くために、芳藍は鷹乃の頭を優しく撫でてあげた。
「なら、これは皆のために使いましょうね」
「うん」
その巾着袋をもらい受ける芳藍。
「では、これにて失礼します」
ふいと流翠と時充の目が合った。
「んやっ？」
「あんた、本当に泥棒じゃなかったのね」
「なっ。あたいが芳藍を連れてくるまで、そんなことを思ってたの？」
「だってさ。こんな上等な生地を、本当に知り合いが織ったのか半信半疑だったんよ」
芳藍の反物に触れて、流翠はうっとりと溜息をもらす。
「ま、これで疑いが晴れたからよしとせんとね」
「ぷっ」
その一言に、鷹乃が吹き出す。
「たぁかぁのぉっ？　あんた、あたいで笑ったわねぇ」
「時充さん？」

すかさず芳藍が注意すると、ぎくりと時充は硬直した。
「あはは。今後とも、うちの店をごひいきに」
「はい。失礼いたします」
「あいよ。またよろしく～」
元気一杯に手を振る流翠。
無邪気な笑顔に見送られて、芳藍達も自然と笑みがこぼれていた。

芳藍達が帰宅して、夕餉の支度をしている間。
昭示は竹ぼうきを手に、境内から夕日を眺めていた。
「ふうっ」
神木を見上げて、昭示は嘆息（たんそく）する。
「俺は……」
二度も、鬼と化してしまったんだよな。
もうあのような事はごめんだと、深く自省する。
「弱いんだろうな。俺は」
「誰がだい？」
「うおっ」
背後に時充がいて、昭示は驚いて飛びのいた。
「予告もなしに、後ろに立たないでくれ」
「声かけたわよ。返事をしなかったのは昭示のほう」
「そ、そうか。ごめん」
「謝んなくていいわよ。作業を中断して、休憩（きゅうけい）がてら誰かと話をしたかったのさ」
それとは裏腹に、時充は腕を組んで頬をふくらませている。
「俺が話し相手なのは不満か？」
「そういうつもりはないわ。いきなり出端（でばな）をくじかれて、機嫌が斜めなだけ」
「それは悪かった。んで、話って？」
「んや。鎌かけようか思ったけど、止めたわ。単刀直入に昭示は、

芳藍に好きと言ったの？」
昭示はうなだれて、大きな溜息をついた。
「伝えてないのね」
その反応に、肩をすくめている時充。
「できるはずないだろ。俺は、鬼と化して芳藍を傷つけたんだぞ」
「下手をすれば、舞や命を潰していたかもしれないしね」
「俺を、泣かせたいのか？」
「そういうつもりはないわ。もしもの話よ。仮にそんな想像をして泣くと言うなら、あの子らに情が移ったってことね」
鎌かけないっていうのは嘘か。
抜け目ない時充を前にして、昭示は顔を引きつらせる。
「時充さん、あんたは幸せだよな」
「なんでよ？」
「鬼じゃないからさ」
「……。そうでもないわよ」
目を伏せて、暗い面持ちで時充は口を開けた。
「あたいは、幼い頃に人に売られたのよ」
「へえ。そうだったのか――って、なにいっ？」
「引き取ってくれたのが、隠居してた老忍者だった。そのおじいさんはあたいを育てて、多くの術を教えてくれた」
それが三歳の頃だった、と。
「おじいさんはあたいが五つの時に亡くなってしまい、言われるがままに近くの里に連れてかれてね。そこで修行に明け暮れた。あたいが八つの頃にはすでに、家康公の護衛を任されるほどの信用があった」
「天才、だったんだな」
「違う。あたいはただ、運がよかっただけ。本来なら、忍術なんて学ぶはずがなかった」
時充の頬に、一粒の涙が流れる。
「も、もういいぞ。思い出して泣くんなら、俺は」

「気にしないで。この場を誰かに見られても、あんたに泣かされたとは言わないから」
袖で涙をふいてから、時充は話を続けた。
「十五年前、九つの時。あたいは家康公を暗殺しようとする敵をとある町内で迎え撃った。そしてそいつらは、修行を共にした仲間だと知った」
「内乱？」
「ええ。幼いあたいは、ただひたすらに同胞を屠るしかできなかった。自分が生きるために、狂った戦場の中で、同じ釜の飯を食った人間を屍（かばね）にしていったの。そしてあたいはこう考えてしまった」
「ど、どうしたんだ」
「家康を、屠殺（とさつ）しようとしたの」
それを聞いて、昭示は返す言葉を失う。
「騒乱の元が、こいつなら。いっそ屠って、この嫌な戦乱を止めたいと考えた。けどそれをしたって、国中が混沌とするだけ。そうなってしまえば、争乱で真っ先に淘汰（とうた）されるのはあたいのような女子供。それに気がついて、そいつを仕損じた」
「ど、どうなったんだ。それから」
「それが原因で、あたいも反対派だと認識されたわ。夜の町中を逃げ続けて、抗（あらが）って戦い。そして……今があるの」
ふうっと深呼吸をし、時充は空をあおいで瞬きを繰り返す。
袖で涙をふき取り、楊枝を咥えて、両手を腰に置く。
それから目線を、昭示へと戻した。
「そんな、過去があったんだな」
「今の話、芳藍だけにしてもいいわよ」
「えっ？　あの子らには」
「重すぎるわよ。大きくなってから、それとなく教えてあげて。あたいは、こういう人間だったと」
夕日に照らされた憂鬱そうな時充。
それを目の当たりにして、昭示はこの人は女性なんだと再認識し

た。
「んやっ。どうしたの？」
「い、いや……」
慌てて時充から目線を外す昭示。
「ふふっ。あたいにほれると、火傷じゃ済まないよ」
目を細めて、時充は唇をとがらせる。
「それ以前に、あんたは芳藍一筋じゃないのかい」
「な、なにをいきなり」
いつもの調子に戻った時充は、にやにやしながら昭示をからかう。
「その芳藍を……俺は、傷つけたんだぞ」
両手を見つめて、昭示は過ちを振り返る。
「ふむ。罪悪感があるのかい？」
腕を組み直して、時充は真剣な面持ちで訊ねた。
「あるよ。芳藍は、俺を止めようとしてくれたんだ。それなのに、俺は」
両手に握り拳を作って、もう誰も傷つけまいと神木に誓う昭示。
ざわざわと風が吹いて葉が舞い散り、それが地面へ落ちる前に手でつかんだ。
「彼女に対して、何もできないでいる」
「傍にいるだけでいいって、言ってたじゃない」
その葉を地面に落として、昭示は時充へと向き直る。
「それが、いつか悲惨な末路を引き込みそうで怖いんだよ。俺は、ここにいないほうがいいんじゃないかって、考えたりもしている」
「そんな心配をしてたって無駄さ。どうなるかはあんた次第だし。いざとなれば、あたいや芳藍が昭示を止める。鬼と化しても、誰かを傷つける前に何とかすっから安心しなよ」
時充らしい励ましの言葉に、昭示は口元をほころばせた。
「結局、俺も守られてばかりなんだな」
「でもあんた、鬼と化しても芳藍達を最後に相手にしたそうね。ある程度は、理性があったんじゃないの？」

「記憶にない。俺は自分が何をしたのか。芳藍や時充さんから聞いて知ったんだぞ」
「なるへそ。けどね、諦めたらそこでしまいだよ。必ずきっと、答えは見つかるはず」
「どうして時充さんは、鬼の力がどうにかなると思うんだ？」
「ふっ」
鼻で笑っている時充。
「身近に、あんた以上に恐ろしい鬼がいると言ったら？」
「はっ？」
「しかもそいつは、その力を正気を保ったまま使いこなせる」
「だ、誰のことを言ってるんだよ」
「……。日照よ」
間を置いてから、時充はそう答えた。
「あ、ああ。そんな話を聞いたな。しかし、それなら日照も鬼ってなるんじゃ」
「日照は人間よ。もしそうなら、鷹乃にも似たような力があるはず」
「じゃあなんで、鬼って言ったんだよ。日照に失礼だろう」
「比喩（ひゆ）よ、比喩。例えじゃないの」
歯を見せて笑っていた時充は、楊枝を指でつまみながら雪峰のほうを見やった。
楊枝を咥え直した時充は、溜息まじりに昭示のほうを向く。
「んなことよりも、早いとこ芳藍に気持ちを伝えなよ。あの娘、かなりの強がりだからね」
「……。そうだな」
「好きだっていう想いは、言葉にしてくれないと解らないんだよ。女の子は特に、それに不安を感じやすいんだから」
「そうなのか？　言わないと、伝わらないのか？」
――しまった。つい口が滑った。
昭示がそう言った途端、時充はしたり顔になる。
「あらあっ。昭示は芳藍をちゃんと好いてるのねぇ。おねーさん、

嬉しいわっ」
まじめに考えているんだと、昭示は時充に抗議の目線をくれる。
「ご、ごめんごめんっ。他人の恋路を邪魔するつもりはないんだ」
手を合わせて平謝りの時充。
「ごめんね。本当に」
「いいよ。俺が芳藍を待たせているのが悪いんだしさ」
しばらく気まずい沈黙が続く。
それは時充自らが破った。
「まっ、主観的に芳藍は辛抱強い娘だね。体さばきを見る限り、あれを芳藍に渡してよかったと思ってるよ」
「あれって、刀か？　無駄に鞘の長い」
「ふっ。芳藍も育ち盛り。背が伸びれば、ちょうどよくなるよ」
「そこまで、計算してたのか？」
「まっさかぁ。扱う人が最初から知れてなければ、それは成立しないでしょ。考えすぎ」
「だ、だよな」
片目を閉じて、時充は腕を組んだ。
「銘とかは、刻んでなかったな。どうしてなんだ」
う～んと伸びをしながら、昭示は時充に訊ねた。
「あんな特徴的な刀なんて、そこいらの誰も真似しないよ。鋼色（はがねいろ）でない刀身なんて、一目見ればすぐにあたいの作品だって解るさ」
「そうかもしれないが、名前を付けないと不憫（ふびん）じゃないのか」
竹ぼうきで近くの落ち葉を集めながら、昭示はそう意見した。
「んや。あるにはあるんだよ。髭龍（しりゅう）という名がね」
「しりゅう？」
「ほら、ね。言ってもぴんと来ないでしょ？」
くししと、歯を見せて愉快そうに笑う時充。
昭示もつられて吹き出してしまう。
腕をほどいて、時充はにこやかに自分の趣味を語り始めた。
「龍乃髭（りゅうのひげ）。そういう意味さ」

「りゅう？　ひげ？」
「外国の伝承さ。あたいは貿易とかで入った外国の作品とかを見て、それを取り入れたいなって思ったの。けど、刀の形を損なわないように。かつ刀としての機能も失ってはならない。芸術として後世に語り継がれるような、そんな一振りにしたかったのよ」
「へえ。でもどうして刀鍛冶になろうと？」
「んやっ。おじいさんが、刀を打って生計を立てていたのよ」
「なるほど。その師匠に、術と鍛冶について学んだのか」
「正解よんっ」
目と目を合わせて、ふたりは同時に微笑む。
時充は頬を指で引っかきながら、真顔で昭示にこう言った。
「すでに、鷹乃や舞に与えたいなって思う刀はあるんだよ」
「あるのか？」
「ただ、刀身とかの研磨がまだ終わってなくてね。女が使う物だ。重量をそれなりに軽くしとかないと、細腕では負担がねぇ」
「普通、刀って製作過程で放置しないはずだが？　鉄は熱いうちに打てって言うし」
「それはそうだけど。あたいの製法は他のと違うのさ。刀身に顔料が馴染んでいるか、他に色々と細工してるせいでね。とにかく時間がかかるのよ」
肩をすくめて、時充は溜息をひとつ。
竹ぼうきを地面に置いて、昭示は集めた落ち葉を紙袋に詰め込んでゆく。
「まるで、時代の先を走っているみたいな言い方だな」
「誰も理解してくれないけどねぇ」
苦笑する時充。
「ところで、その落ち葉は火種にするの？」
「ああ。ここではいつもそれに使ってるんだよ。他の用途では、焼きいもとかね」
「お。それいいわね」

じゅるりと、舌なめずりする時充。
「やっぱ女の子は、焼きいも好きなんだな。芳藍も大好きみたいだし」
「そういう昭示は？」
「俺はあんまり好きじゃないんだよな。いっつも火の世話したりするからさ」
「それ、焼きいもと関係ないわね。食べるのは好きなんでしょ？」
「ま、ね」
ぱんぱんの紙袋を足下に置いて、昭示は竹ぼうきを拾い上げる。
「話を戻すけどさ。芳藍のは、青の顔料が馴染んだってなるのか。あれには、何の意味があるんだ？」
「あれは単純に見てくれだけでなく、潮風などで錆びないように配慮してあるのさ」
「錆？　へえ」
「それと、金属の強度を高める意味もある」
「ほう。ぜひとも、詳しく教えていただきたい」
「だめよ。昭示に教えたって、あたいに何の得もありゃしない。これはあたいが編み出した技術。専売特許を、軽々と他者に教えるもんですか」
悔しそうに目で抗議する昭示。
対する時充は、ふふんと上機嫌だ。
「まっ、刀はじっくりやるよ。あの子らの想いを無下（むげ）にはできないからね」
「そっか。ありがとう」
「何で昭示が礼を言うのさ？」
「いや、なんというか。皆が本当の娘のように思えてね」
「なら、あの子らを泣かせないように強くなりなさい。鬼の力は、精神の問題よ。心を律すれば、きっとどうにかなる」
「努力はしてみるよ。それと芳藍には、今夜に想いを伝える。だから、ふたりきりになれるようにさ。その、は、はは、配慮してくれ

ないかっ？」
「んやっ？　優柔不断かと思ったけど、そうでもないのねぇ」
「う、うっせぇ。悪かったな」
「言われた通り、夕餉を終えたら皆の面倒は見といてあげるわ」
ほくそ笑む時充を無視して、そっぽ向いて掃除を再開する昭示。
「そういや、昭示」
「なんだよ」
「芳藍はさ。あの日になると、いつも機嫌悪いの？」
「はっ？」
「あ、知らないのならいいわ。自爆しちゃったあたいが悪いんだし。ごめんごめん。さようなら～っ」
強引に話を完結させて、時充は倉のほうへ逃げ出した。

夕餉を終えて、率先して片付けを手伝い。
こうして、昭示は芳藍と台所にいる。
「珍しいですねぇ」
「なんだよ」
「昭示さんは、家事が好きではないと思っていました」
洗い物を終えて、昭示と芳藍は手ぬぐいで手の水気をふき取る。
「では、時充さんを助けに戻らないと」
「あ、芳藍」
「はい？」
これからもう一仕事。というところで昭示は芳藍を呼び止めた。
「なんですか？」
少し不機嫌そうな顔付き。
はやる気持ちを抑えて、昭示は芳藍の両肩に手を置いた。
「ど、どうしました？」
不安そうに見つめる芳藍に、昭示は勇気を出して告白しようとする。

「しゅ、す、すき……」
「はい？」
「こ、こほんっ」
噛みそうになり、一度咳払いをする。
改めて、昭示は――。
「す、好きなんだ。芳藍が」
「……っ」
芳藍に、自分の気持ちを伝えた。
「よ、よく聞こえませんでした」
「はっ？」
「お、お願いです。もう一度、聞かせてくれませんか」
頬を赤らめて、芳藍は昭示にそうねだる。
「芳藍が、好きだ」
ほろりと、芳藍の瞳から涙がこぼれた。
「昭示さん。ずるいです」
「な、なんでだよ」
「だって、もしかしたら昭示さんが……ひとりでどこかに行ってしまうのではないかと。不安で、しょうがなかったんです」
ぎゅっと、芳藍は昭示に抱きつく。
「そ、そんなことあるわけないだろ」
「嘘です。昭示さん、自分が鬼であることを理由にここを去ろう。一度は、そう思ったはずです」
ぎくりと、昭示は反応してしまった。
「やっぱり、そうだったんですね」
「い、いや、それは」
芳藍は昭示の襟（えり）をつかんだ。
「逃げないで。あなたは二度も助けられたんですよ？　これだけ想われているのに、あの子らが懐（なつ）いてくれたのに、あなたはその気持ちを裏切るつもりなのですか？」
「今は、そんなつもりはない」

「本当、ですね？」
「ああ。俺の中にいる鬼とどう向き合うべきか、それを摸索している。少なからず、制御できる方法はあるはずさ」
「どうして、そのような考えを」
「時充さんに言われて、気がついたんだ。俺は、ただ逃げるだけで立ち向かおうとしていなかった。自分の弱さに、宿命から背いてはならない。俺の父親だとほざいたあの鬼ですら、言葉を発するほどの余裕があった。俺もきっと、正気を保ったままこの力を使いこなせるはず」
「……っ」
「あ、ごめん。芳藍は、まだそれを」
「平気です。本当にあなたを、信じていいのですね？」
「もうだめだと感じたのなら、俺を迷わずに討て。俺はそうならないように、自身を律することに努める」
「あっ」
芳藍を抱き寄せる昭示。
「あ、んっ」
それから唇を重ねて、胸に触れて、芳藍を求めようとした。
「んんっ！」
どんと突き放されて、昭示は我に返る。
「あ、い、いや……か？」
「そ、そういうつもりはありません」
「ご、強引だったな。ごめん」
「そうじゃないと、言ってるじゃないですかっ」
赤面して怒る芳藍は、そっぽを向いてこう説明した。
「今日は、そういうことはできない日なんです」
「なんだってっ？」
「で、ですからっ。そのような行為は、後日に改めて」
着衣を直し、芳藍は背伸びをして――ちゅっと接吻をした。
「鼻の下を伸ばさないでくれませんか」

「そ、その、な？　後日って、大胆なことを言うんだなと思って」
「わたくしは、ずっと……」
「んっ？　聞こえないぞ」
「な、なんでもありませんっ！」
いきなり怒鳴られて、昭示はたじろいだ。
少しでも離れるのは嫌なのか。芳藍は昭示に抱きついて、ゆっくりと瞳を閉じた。
「大好き……です」
昭示は「愛している」と返事をしてから――再び、唇を重ね合わせた。

第六話

真夜中。時充は五本の刀を脇に抱えて、倉から出てきた。
「ふうっ。これで、あたいの仕事は終わりね」
虫の鳴き声だけが歓迎してくれる。
「もう少し、ここにいたかったなぁ」
さみしさを感じ、そうつぶやいてしまう時充。
屋内に戻ろうと、歩き始めた時。
虫の声が、不意に止んだ。
「――誰？」
その一言は、暗闇に空（むな）しくこだました。
「な」
地面から白い布が飛び出して、それは時充の持つ刀をひとつ奪った。
「このお！」
それを取り返そうとするも、その布はあまりにも素早い。
「……。ふふっ」
白布を操っていたのは、雪女だった。
雪女は、白服に藍色の袴を着用している。
「あんた、泥棒稼業でも始めるつもりかい？」
「……。そのようなつもりは」
ないと言っても、正確にそれだけをくすねている時点で。
「よっぽど、鷹乃にお熱のようね？」
そう確信する時充。
答える代わりに雪女は左手で、白布が握る鞘から白銀の刀を引き抜いた。
「その巫女服、よく似合っているわね」
「……ど、どうも」
頬を染める雪女。

雪女は付近に粉雪を散らし、鞘を持つ白布を浮かせて守りを固めている。
「ちょうどよかった。ふたつほど質問があるのよね」
黒白の短刀を収めた鞘を懐から出しながら、時充は抱えていた四本の刀を倉内へと放り投げた。
「……。どうぞ」
答えるつもりはあるらしく、雪女は構えを解いた。
時充は雪女と向き合い、短刀をいつでも抜ける体勢を取る。
「あたいに刀を打たせたのと、鷹乃を付け狙う理由は何よ？」
「……ふっ。未来に、必要になるから」
「未来ですって？　あんた、もしかして」
「予見したのです。未来に、絶望が現れると」
「なら、どうして鷹乃を殺そうとするの？　あの子は、まだ育ち盛りなのよ」
「ふふっ」
「何が、おかしいのよ」
「まだ、取り戻せるかもしれない」
「な、何をよ？」
「あの子は、邪魔だから。今すぐにでも、消さなければならない」
凄まじい憎悪。時充は、心身が凍える。
ゆっくりと言葉を発しない時点でもう、雪女が本気だというのは解った。
「鷹乃をやらせはしないわ。あの子は、将来いい女になるんだから」
時充は腹を括った。
ここで雪女を倒さなければ、鷹乃が危ない。
「だから、許してはおけない」
「なんですって？　はん、雪女も嫉妬するのかい」
「それだったら、どんなに楽でしょうか」
憂(うれ)いを見せた雪女は、刀を両手で握り締めた。
「日照を相手に、逃げるしかできなかった」

「何が、言いたいのです？」
「あんたにも、苦手なものがあるんだと知って安堵したのよ」
「雷を」
時充は黒白の忍者刀を帯に差して、右手に雷電をまとわせた。
そこからほとばしる電流は激しく、暗黒を照らす白光となる。
「覚悟しな。助けられた恩義はあれど、あんたをこのまま野放しにするのは危険だ」
「ふっ」
鼻で笑うほどの余裕。
「いつまで余裕ぶっこいていられるのかしらね！」
残像がちらつく速さ。時充は勢いのままに雪女へと殴りかかった。
「なっ」
地鳴りがした。
雪女は攻撃が触れる直前、時充の手首をつかみ、即座に腕を地面へ埋めた。
「言いませんでしたか？　未来が見通せると」
とっさに腕を引き抜いて、時充は距離を取る。
「くっ。電光をあっさりとかわすなんて」
「あなたには感謝しています。ですから、この刃で傷つけたくはない」
「だからって、鷹乃を屠るのを見逃せって言うのかい？」
「ええ」
「いーやーだーねえっ！」
続いて時充は、先程手に入れた石ころに火を灯した。
「地面から引き抜く際に」
「ええ。次は、石火よ」
石を溶かし、白い霧が発生するほどの灼熱を右手から発した。
先刻の電光のまぶしさとは異なり、揺らめく炎は周囲を温かく照らしている。
「ふっ」

またしても、鼻で笑われた。
稲妻より火炎のほうが、雪女には脅威に感じるはずなのに。
「はあっ！」
大地に赤い線を記しながら、時充は雪女へと殴りかかる。
「っ」
「少し、遅かったわね」
今度は、先程のように往なすことはできなかった。
それを受け止めた雪女は、たまらず手を離して後退する。
「ちいっ」
電光と違い、石火の利点は高熱にある。
蜃気楼（しんきろう）現象で攻撃の頃合をぼかしたため、時充を目で正確に捉えることは難しい。
「どう？　寒さになれたあんたじゃ、この熱さは天敵よねぇ」
雪女は右手を庇い、じりじりと時充から間合いを取っている。
「未来が見通せるとか言っていたのに、視覚に頼っているじゃないの」
「ふふっ」
「な、何がおかしいといーーえ」
雪女の右手は、もう治癒していた。
「ば、馬鹿な……？　あんた、一体何を」
「あれぐらいの熱で、勝機を見出したつもりですか」
「ふ、ふざけんじゃないわよ！　金物や、鉱物を溶かす熱を……」
治癒したのではなく、端から効果がなかった。
それを悟り、時充は悔しさに歯噛みする。
「火之迦具土（ひのかぐつち）神に比べたら、そのような焔（ほのお）など赤子に等しい」
ぼそりとつぶやいて、雪女は肩をすくめた。
それを見た時充は、楊枝をいくつか口に咥える。
「まさか」
「ええ。わざともらいました」
台詞を先取りされた。

「くっ」
「もう、終わりですか」
弱点だと思っていた攻撃が、空振りなんて。
時充は雪女の底知れぬ強さを知り、冷や汗をかいている。
「ど、どうしたんだ」
昭示の声。
社にいた他の皆も、騒ぎを聞きつけて飛び出してきた。
「ふふっ」
鷹乃を見て、雪女がうっとりと吐息をもらす。
「な、お前は」
「雪天鷹乃。さあ、こちらへおいで」
不気味な笑みを浮かべて、手招きをする雪女。
「だ、だれがっ。お、お前なんて、怖くないぞ！」
鷹乃がこちらを見た時、時充は意を決した。
「雪女さん、あんたの相手はあたいのはずよ！　よそ見なんて、随分と余裕じゃない」
右手だけで印を結んで、時充は。
「電光石火（でんこうせっか）！」
さっきのふたつの術を合わせた。
「はあ。仕方ありませんね。ならばこちらも」
対する雪女は刀を白布に預け、印もなしに同じ術を発動させた。
「なっ、うそ」
「あなたの恩師からの技。使えるのは、あなただけとは限りませんよ？」
言い終えて、雪女は時充へ突っ込む。
「くうっ！」
止むをえず、時充は雪女に合わせた。
「うぅぅぁぁぁあああああああああああああああああっ！？」
凄まじい爆発がして、時充は大樹に張りつけにされる。

雪女は宙返りをして衝撃を逃がし、石段の近くに着地した。
「と、時充さん」
――鷹乃、来ちゃだめ。
そう叫ぼうとするも、時充は声が出せない。
不用意に飛び出した鷹乃を、白布が刀で斬り捨てようとした――
刹那。
「ちっ」
「鷹乃、時充さんをお願いします」
芳藍が割り込み、刀を収めた鞘でその斬撃を防いだ。
「う、うん」
鷹乃が時充の傍に駆け寄ろうとした時。
その間に、もうひとつの影が降り立った。

「雷遁、白菊！」
さっきの電光より、遥かに電流の量が多い。
しかも、それを発動させたのは――。
「確か、結葵流翠――って、くう」
――この殺気、あたいを狙っている？
流翠の攻撃を神木に向けさせまいと、時充はしびれがあるままで高く跳んだ。
「ちぃ。逃げるな、兄の仇い！」
右手の術を解いて、流翠も跳躍しようとした。
が、それは抱きついた鷹乃によって止められる。
「は、離しなさい！」
「いやだっ！　時充さんは、いい人なんだ。どうして、どうしておねえちゃんがそんなことをするんだよお」
「和正にいちゃんを殺したからよっ！　だから、あっしはあいつを討たなければならない。絶対に許さないんだからあ！」
鷹乃を振り払い、流翠は屋根上にいる時充をにらみ据えた。

「まさか、あんたは……鴉(カラス)の抜け忍？」
「ええ、そうよ。あっしはあんたを殺す。この場で、和正にいちゃんの無念を晴らすの」
「あっ、だんごのおねえちゃん」
日照の声がして、流翠はぴくりと反応する。
「あ、あんた。あん時の腹減りっ子」
声のしたほうを向いて、流翠はほっと安堵している。
「時充さんと、鷹乃をいじめるなっ！」
日照が立ちはだかり、流翠の表情に動揺が走った。
「そ、そこをどきなさい」
「いやだ！」
その隣に、鷹乃も立った。
「ちっ。なら」
「な、そのふたりには手を出さないで！」
流翠は後ろを振り向いて、昭示と芳藍とやりあう雪女を見定め。
「水遁(すいとん)、紫陽花(あじさい)！」
地面から湧き出す水で包囲し、その動きを封じようとした。
「その程度で」
雪女は白布でその水気を吸い取り、凍らせることで流翠の制御下から外した。
「くそっ」
「あなたも、刃向かうのですね」
鷹乃に近づけさせまいと、昭示と芳藍は雪女を挟(はさ)み撃ちしている。
「俺と芳藍で雪女はどうにかする。他の皆は逃げろ！」
命を背負う舞は、鷹乃から預かった光を抱えてまごついていた。
「ふざけないで。人と鬼の間(あい)の子が」
「ぐはああっ！」
雪女は目に見えない踏み込みで、昭示の腹に拳を打ち込んだ。
「昭示さん！」
それで動転した芳藍。

雪女はその隙に踏み込み、彼女を拳で殴打しようとするも。
「ちっ」
「あんた。あの鷹乃って子にゃあ、手を出させないよ！」
流翠が割り込み、その拳を両手で受け止めた。
雪女を背負い投げた後、流翠は素早く印を結ぶ。
「水遁、睡蓮（すいれん）！」
高圧の平たい水手裏剣を手の平に作り、それを連続して投げつける。
「凍えよ」
雪女は空中で姿勢を直しながら、冷気でそれらを凍結させ、地面へと落とした。
「ちっ。相性がかなり悪いわねぇ」
「よっと」
軽やかに着地した雪女は、憂鬱そうにとある名をつぶやいた。
「衣凛」
すかさず時充は跳躍する。
「なんだとっ？」
空中で衣凛に体当たりをして、流翠への跳び斬りを邪魔した。
「あ、あんた。あっしを……」
まだ完全ではなくて、時充は着地でよろめいてしまう。
「いいから、皆。早くここから逃げなさい。あたいひとりで、ふたりをやる」
誰も、その言葉に耳を貸さなかった。
「俺は、時充さんに世話になってんだ。このまま、恩返しをせずに見捨てられるか」
「わたくしも同じです。それに、我が子を付け狙う輩がいるのであれば。この刃で斬り捨てるまで」
昭示と芳藍は、子ども達を庇ってふたりの前に立つ。
「未来を育むこの子らを害するなんて、あっしは許さない。それに、あんたが勝手に死んじゃったらさ。和正にいちゃんに、顔向けでき

ないじゃない！」
流翠は雪女と衣凛と対峙し、皆に加勢する。
包帯を巻いた上に巫女服を着ている衣凛は、外気にさらした右目で皆を一瞥する。
かきこきと首を鳴らして左手に持つ刀を鞘を収め、それを帯に差した。
「やれやれ。私は準備運動でもしようかな」
「……。どうぞ」
雪女が促すと、衣凛は高く跳躍して町のほうへ降りた。
それから間を置かずに、断末魔がこだまする。
「な、なんてことすんのっ！」
「時充、あなたが刃向かうからです。この腕の中で、鷹乃を抱き締めて、壊してあげようと言っているのに。それを、拒むから」
悲鳴を耳にして、愉快そうに笑う雪女。
「あの」
「んっ？　あ、舞！」
昭示に光と命を預けて、舞が表の石段を駆け下りていった。
「さあ、鷹乃。この胸で泣いていいのよ？　ただ一度だけでいい。この腕で愛したいの。壊したいのよ。あなたをね」
「い、いや……だ」
雪女の狂気を浴びる鷹乃は身をすくませ、冷や汗で髪と服を湿らせていた。
「そのような行為、わたくしがさせません」
芳藍は刀の切っ先を雪女に向けながら、その間に割り込んだ。
「うぁあああああああああああああああああっ！」
見兼ねた日照が芳藍の横を通り過ぎ、雪女へと殴りかかる。
「うわっ」
その馬鹿力は、あの時みたいに――通じることはなかった。
「ふっ」
雪女が拳を受け止めた際、衝撃波で地面が揺れる。

それにひるまず軽々と持ち上げて、日照を芳藍のほうへ蹴飛ばした。
「くうっ！」
雨戸にめり込むも、芳藍は日照をしっかりと抱き留めていた。
「芳藍！」
「くっ、日照。けがはありませんね？」
「う、うぅ。あ、あいつ。前より、強くなってら」
駆け寄る昭示は、ふたりが無事と知って安堵した。
後ろを振り返り、昭示は寄り添っていた鷹乃にふたりを任せる。
「あんたっ。子供相手に手加減もしないのね！」
白菊を発動させた流翠が、雪女へと殴りかかった。
雪女は時充にしたのと同様に、流翠の右腕をつかんで、地面へと突っ込ませる。
「く、くそっ」
今度のはかなり深く、雪女が押さえているのもあって腕を抜けない。
「あなたが憎むべきは、時充ではありませんよ」
「な、何を言っているの」
雪女は流翠に攻撃もせず、真実を明らかにする。
「あなたの兄、和正を屠り、正宗を奪ったのは衣凛ですよ」
「う、嘘よっ！　そんなのにだまされたりしないんだから！」
「それは十四年前ですよ？　それより一年前に、時充はあなたを身をていして庇ったというのに。その恩義を忘れ、あまつさえ憎しみを抱くなんて」
その雪女の呼びかけて、ふたりは過去を思い出した。

『ぐうっ！』
『あ、あ……』
時充は九つの時に。

ひとりの女の子を庇って、背中にくないと手裏剣を受けた。
『よ、よかった……』
恐怖で気を失っている女の子。
その子に何も当たっていないことに、安堵する時充。
『な、時充』
反対派にいた、ひとりの青年。
同じくその子を助けようとしたけど、時充の行動に驚いて固まっていた。
『あんた、早くこの子を連れて逃げなさい』
『な、なんだと？　お前、敵である我らを庇うのか』
『いいから、早く』
追手が、来てしまった。
『時充！　家康公の謀殺を図った罪状にて、ここで打ち首にしてくれよう！』
青年は事情を知り、改めて時充の顔を見る。
『これ、あげるわ』
時充は自身が使っていた正宗を鞘に収めて、青年に投げ渡した。
『大事に使いなさい。おじいさんの、形見なの。その、正宗は……』
『と、時充……』
『逃がさんぞ！』
追手が刀を振りかざし、三人に迫り来る。
後ろを振り返ることをせず、時充は両腕を広げた。
『ぐぼえっ』
その腕に、腹に、小さな身体に刃をもらい、吐血する。
『は、やく……』
『す、すまない！』
走り出す青年を追おうとする敵全員を、時充は。
『風遁（ふうとん）、蒲公英（たんぽぽ）！』
かまいたちで屠り、注意を全てこちらに引きつける。
『ま、まだそのような力を隠しているか』

『へ、へへっ。あたしは、まだ……やれるわあ！』
残りわずかな、生命（いのち）で。
あたいは、精一杯に強がったんだ――。

「じゃあ、あっしは……鴉（カラス）にそそのかされて、恩人を」
討とうとしたんだ、と。
流翠は過ちに気づいて落胆する。
「雪女さん。あたいと流翠の意識に語りかけて、過去を思い出させてくれてありがとう」
「……。いえ」
「けど、それとこれとは話が別よ」
このやりとりの間に、鷹乃は身を潜めていた。
雪女はそれに気づいて、流翠から手を離して立ち上がる。
「せっかく、愛してあげようと思ったのに。どうして逃げるのでしょうか」
「それは、あんたの愛が歪んでいるからよ！」
流翠が、油断していた雪女に白菊をぶつけた。
「ぐぅぅぅぅっっっ！」
それを腹にもらった雪女は、苦痛に顔を引きつらせる。
「あっしは同性愛とか否定はしないけどさ。あんたは、血を見なければ愛を確認できないのかい？」
――落ち込んでいるかと思いきや、攻撃の機会をうかがってたのね。
時充はしびれがないことを確認し、静かに微笑んだ。
「さすが、忍（しのび）ですね。騙（だま）し合いに長けている」
「あんたがあっしの存在を忘れていたからよ。どうよ？　白菊の味は」
「ふふ」
「強がりはよしな。少なくともあんたにゃ、しびれがあるはずだよ」

雪女は、がくりと膝を崩した。
呼吸も荒く、額に多くの汗をかいている。
「はんっ。こうなっちまえば、あんたの思い通りにはいかないよ」
「うふふっ」
「笑っていられるの？　なら、すぐにでも黙らせてやるわ」
流翠が追い撃ちをかけようとした瞬間。
雪女の全身から、激しい電流が現れた。
「なっ」
「あれぐらい、建御雷之男神（たけみかづち）と比べるほどでもない」
続けてまばゆい輝きが、雪女から放たれる。
「あなた方は邪魔です」
時充と流翠は、めくらましをもらってしまった。
「では、これで失礼します」
雪女は高く跳び、町のほうへと姿を消した。
「時充さん」
芳藍の声。
「だいじょうぶよ。流翠、あんたは」
「あっしも、目をやられた」
昭示や芳藍は距離があったため、影響は少なかった。
「わたくしは、鷹乃を追います」
「だめよ。芳藍、その身で激しい運動はしてはいけない」
「じゃあ、どうすればいいんですか」
「光と命を守りなさい。昭示も、ここにいること」
町のほうでは衣凛が暴れている。
時充は、昭示と衣凛にやりあってほしくはなかった。
「んなこと言ってる場合かよ！　時充さん、俺はそれでも」
「昭示い！　あんたはまだ鬼の力をものにしていない。それに、芳藍は本調子ではないのよ。ここと家族を守るのが、今のあんたにできる最善の事。解った？」
目が、見えてきた。

「し、しかし。日照もいなくなったんだぞ」
「なんですって？　鷹乃を追ってしまったのね」
流翠のほうが先に回復したらしく、時充に近寄ってきた。
「ごめんなさい」
「い、いいわよ。謝らなくても」
「いいえ。あっしはつい最近ね。自分を育ててくれた和正にいちゃんを殺したのは、あなただと聞かされました。冷静になれば、嘘だと見抜けたはずなのに。雪女から真実を説かれるまで本当に……ごめんなさい」
「謝っている暇があるなら、衣凛と雪女の片方をどうにかして」
「御意（ぎょい）」
流翠はすぐにこの場を飛び去り、ふたりの行方を追った。

社から離れて、時充は家屋の屋根上を走りながら、町の惨状を目の当たりにする。
「こいつぁ、衣凛の仕業ね」
姿を見せた人間を、手当たり次第に斬り捨てている。
ただ唯一、救いなのは。
「ふぇええええ～っ！」
「だ、だれが……こんなことを」
女性と子どもには、全く手を出していないことだ。
「流翠が衣凛とぶつかったら、ちょっち面倒ね」
舞は衣凛を追い、鷹乃は雪女から逃れ、日照は雪女を追った。
流翠は復讐心に燃え、衣凛を探している可能性がある。
「となると、あたいが探すべきは鷹乃のほうかしら」
とある屋根上に止まり、時充はそこから鷹乃の気配を探る。
「うわあああっ！」
鷹乃の声？
「ふふふっ」

雪女の声もする。
「まずいわね」
近くでやりあっていると知り、時充は声がしたほうへ跳ぶ。
「鷹乃！」
ふたりを見つけた時充は忍者刀を投げつける。
「と、時充さん」
それは雪女が振り下ろす刀に命中し、斬撃の軌道をそらした。
「ちっ。気づかれましたか」
鷹乃は落ちたそれを拾い上げ、雪女から距離を取る。
時充はふたりの間に降り立ち、注意深く雪女のほうを見つめた。
「そこをどきなさい。時充」
「嫌よ」
「鷹乃は、今ここで葬らなくてはならない」
「なんでよ」
「これ以上、放置していたら……情が移ってしまうから」
言い終えてすぐ、雪女は時充へ斬りかかった。
時充はとっさに、その斬撃にくないを合わせる。
「くっ。武器を隠しているなんて」
雪女は後退して、右手を刀の峰に添えた。
それを一度引いて、次に押し出そうとした時。
時充はすかさず、後ろにいる鷹乃を蹴飛ばした。
「うぐぁ」
刀身から放たれる、密度の濃い気刃（きじん）。
直撃はまぬがれたものの、かわすのが遅れた時充は、地面に当たったそれの跳弾（ちょうだん）を食らってしまう。
「と、時充さん」
「鷹乃、あんたは逃げなさい！」
右のふくらはぎに、深手をもらってしまった。
持ち味の素早さを殺され、時充は自分の舌を甘噛みする。
「時充、まだやると言いますか」

くないを構え時充は、雪女を冷静に観察する。
白布は鞘を握り締めて、雪女の死角を補っていた。
「情が移るのが怖いから、今のうちに害するって言うの？」
「ええ」
「そんな身勝手な理由で、鷹乃の未来をつむの？　ざけんなあっ！」
雪女は刀を下段に構え、右手を峰に添えている。
それを見て鷹乃は自らを奮い立たせ、時充の隣に並んだ。
「ボクは、ボクは時充さんだけに嫌な思いはさせないよ」
黒い短刀を引き抜いて、鷹乃は時充を守ろうと前に立つ。
「ここはあたいに任せなさい」
「狙われているのはボクだ。時充さんを犠牲にはできない」
「鷹乃、あんたにはあいつの気が見えないでしょう？」
「気、だって？」
「ええ。さっきのあいつの攻撃は、気によるものよ。刀に気をまとわせて、それを圧縮してから放つ。あんな気撃（きげき）をまともにもらったら、それこそ即死ね」
「と、時充さんには……」
「見えているわ。気の目視は、鍛練（たんれん）でどうにかなるものではないけれど」
少なからず、それができなければ。
衣凛と雪女に対峙することは、自殺行為に等しい。
時充は右足の痛みに息を荒げ、袖で額の汗をぬぐう。
「ふうっ」
「どうしたの？　雪女さん」
前髪をかき上げて、額の汗を手の甲でぬぐっている雪女。
襟をつかんで、ぱたぱたと中に空気を入れている。蒸れるのが嫌なようだ。
「……。霜月霙（しもつきみぞれ）」
「な、なによ。それ」
「名前ですよ」

言いながら、人差し指で自分を示している。
「冥土の土産に、教えて差し上げようかと」
「随分、気前がいいじゃない」
口を動かしながら、みぞれは刀を上段から振り下ろす。
時充はくないでそれを押さえて、鷹乃に攻撃する機会を与えた。
「そらあ！」
「ちっ」
みぞれは鷹乃の斬撃を跳んでかわし、浮いた白布が持つ鞘を踏みつけ、更に高く跳躍した。
「ちょっと、みぞれ。人が精魂込めて打った刀をさ、ぞんざいに扱うのは止めてくれない？」
遥か前方に降り立ったみぞれへ、時充は文句を言ってやった。
「そのような意図はないのですが」
聞こえているのか、みぞれは右手に頬を預けながら答えた。
白布はみぞれの背後に移動し、ふわりと鞘を構えている。
「だからって、足で踏むのはいただけないわ」
「……。ごめんなさい」
意外にも、みぞれは頭を下げて謝った。
「と、時充さんにけがさせといて。今更かよっ！」
鷹乃は時充の前に出て、震えながらも右手で短刀を構えている。
「下がりなさい。みぞれの挑発に乗っちゃだめよ」
「時充さんが傷つくのは嫌だっ！　ボクが、ボクがここで……戦わなかったら、大切な人を守れないでいたら、いつまでも弱いままじゃないかあ！」
「勇気と無謀を履き違えないで」
「大好きな人を守れないで、何が正義だよ。そんな後悔だらけで成り立つ正義なんて、くそ食らえだあああああっ！！」
鷹乃はひとりでみぞれに突っ込んでしまう。
「つぅ」
足の痛みで、時充の初動が遅れてしまった。

「歓迎します。あなたの勇気をね」
時充が追いつく前に、みぞれが鷹乃の背後を取った。
「えっ」
みぞれは鷹乃へと、白銀の刃を突き刺そうとする。
届かないと解っていても、時充は手を伸ばした。
「ぐほぁあああああああああっ！」

誰かが、その間に割り込んだ。
「お、おじさん」
「ちっ」
みぞれは時充の接近に気づき、刀を抜いて屋根上へ跳んだ。
「ぼ、ぼうず……け、けがは、ねぇよな？」
「お、おじさんっ！」
年配の御用聞き。
鷹乃を坊主とからかっていた、壮年の男性は。
みぞれの凶刃を受け、倒れてしまう。
「時充さん、おじさんを助けてよ。ねえっ！」
みぞれを前にして、悠長に処置などしてられない。
それにこの人は、左胸を貫かれている。
今から処置したところで、間に合わない。
「お、おじさんっ」
時充が目をそらしたことで、鷹乃は絶望する。
「た、鷹乃……と、言ったな」
「しゃべっちゃ、だめだよ」
時充は飛び下りたみぞれを注視し、ふたりには手を出させまいと前に立つ。
「オイラはな、昔に息子を……病気で亡くしちまってなぁ。鷹乃、お前さんは……そいつに、よく似てやがる」
「えぐ、ひっぐ」

「ば、かたれ……な、くんじゃねぇ、よ」
泣きじゃくる鷹乃を励まそうとする、男性の手。
けどもう、その腕は力尽きてしまい――。

「うぁあああああああああああああああああああああっ！」
その絶叫は、町中にこだました。
鷹乃は男性の亡骸にすがりついて、ぽろぽろと大粒の涙をこぼす。
「お、おやっさん」
ここでの騒ぎを聞きつけた町人達が、男性と鷹乃に寄り添う。
「みぞれえっ！　あんたの行いには、もう我慢ならないわ！」
「ふっ。だったら？」
――足がどうなろうが、もう知ったこっちゃない。
印を結んで、時充は電光石火を発動させようとした。
「あたいの刀を使って、とんでもない事をしてくれたわね。覚悟なさい」
刹那。時充の横を過ぎて、誰かがみぞれへと突っ込んだ。
「た、鷹乃」
「こんのぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっ！」
怒り狂う鷹乃。
舌なめずりしたみぞれは。
「ふふっ」
嬉しそうに、白銀の刀を鷹乃へと振り下ろす。
鷹乃はそれを、わざと右腕に受けた。
「くらぁえぇっ！」
「な」
瞬時に黒の短刀を左手に持ち替え、みぞれの右腕に刃を刺し込んだ。
「つうっ」

みぞれはそれを振り放し、慌てて後退した。
「逃げるなあっ！　おじさんを、おじさんを――よくもぉおおおおおおおおおっ！」
たがいに右腕を力なく垂らして、ふたりは相手をにらみ据える。
「やりますね。けど」
みぞれは白布で創部（そうぶ）を包み、すぐさま止血した。
それは淡い光を放っており、傷を癒しているようだ。
「それぐらいで、満足したのですか？」
「うぅるせぇえええええええええええええええええええええええっっっ！」
この場にいる皆が、言葉を失う。
発気（はっき）、している。
鷹乃の全身から、白く輝く気が溢れていた。
「っ。ならば」
みぞれは峰に手を添えて狙い澄まし、接近する鷹乃へ気刃を放つ。
「そんなのおっ！」
鷹乃はそれを、左手に握る刀で撃ち払った。
「な……っ！」
まさかのことに驚愕するみぞれ。
発気したと同時に、鷹乃は気を目視できるようになっている。
みぞれが刀を振り回し、連続して気刃を放っても。
「当たるもんか！」
左右へ動くことで、直撃をまぬがれている。
「よっと」
時充はそれらを跳び越えて、鷹乃の動きを注視しつつ、好機をうかがう。
「うぁあああああっ！」
鷹乃の気をまとった斬撃を、みぞれは後ろに下がって回避した。
外れたことにより、鷹乃の気が地面に触れて、爆発を引き起こす。
「こっちも、忘れるんじゃないよ！」

「くあっ！」
それでひるんだところを逃さず、時充はくないを投げた。
右手に刺さったそれを口で抜いて放り、みぞれは追撃を恐れて屋根上へ跳ぶ。
「はぁ、はぁ、くうっ」
鷹乃は、もう息切れしている。
――無理もない。
ぶっつけでやってるから、配分が解らないんだね。
「落ち着きなさい。鷹乃」
「おじさんの……かたきぃ！」
だめだ。声が聞こえていない。
鷹乃にいつ限界が訪れるか。時充はそれが不安だった。
「仕方ありませんね。本気で参りましょう」
「うそつけぇっ！　逃げることしか、できないくせに！」
「……ふっ」
瞬時に、みぞれは時充と鷹乃の間に割って入った。
「うわぁあああああっ！」
鷹乃の背中を蹴飛ばして、みぞれはふたりを分断した。
「この――」
殴りかかる時充を見るなり、みぞれは地面を蹴って退避した。
その際に地震が起きて、時充は動きを封じられてしまう。
「ぐほぁあああああああああっ！？」
浮いた鷹乃の上へ移動し、みぞれはその背中を踏みつけて、半身を地面にめり込ませた。
「は、はやい」
けれど、時充も負けてはいない。
「さようなら」
みぞれは刀を逆手に持ち、鷹乃に突き立てようとする。
その寸前で、時充は両手で刀身を押し留(とど)めた。
「ちっ」

「さ、させ……ないわよお！」
みぞれは柄から手を離して後退し、白布から鞘を受け取った。
「ぶ、無事よね？」
「く、つぅ」
鷹乃はゆっくりと立ち上がる。
「ぼ、ボクは……」
「休んでなさい」
もう、気は出ていなかった。
それどころか、目がうつろだ。
「た、鷹乃」
時充は血だらけの手で、鷹乃を抱き締める。
「ふふっ。さあ、すぐに黄泉（よみ）へと誘（いざな）いましょう」
鷹乃を横たえて、時充は白銀の刀を握り締めて立ち上がる。
その切っ先をみぞれに向けながら、時充はこうたんかをきった。
「もう許せないわ。いたいけな子供をしいたげて、ただで済むと思わないで」
「うふっ。倒れた鷹乃を庇いながら、戦えるのですか？　時充」
みぞれがこちらに歩み寄る。
時充は距離があるうちにと、前に踏み込んだ。みぞれも同じく。
ふいと物陰から、誰かがみぞれに斬りかかった。
「ちぃ」
不意撃ちされたみぞれは、再び屋根上へ跳ぶ。
「逃がしませんよ！」
「待ちなさい、芳藍！」
時充は芳藍を引き止めて、こちらへ呼ぶ。
「と、時充さん」
「鷹乃をお願い」
時充は鷹乃を芳藍に預けて、刀を両手で持つ。
月明かりに照らされたみぞれをあおぎ見て、時充は彼女に問いかけた。

「みぞれ、あんたは鷹乃が好きなんでしょう？」
「ええ」
「ならどうして、傷つけるの？」
「どうせ、いつか死ぬのだから。今ここで死のうが、後に死のうが、みぞれにとって大差はない」
「大差が、ない？　それは、あんたの感覚でしょう！」
「ふふっ。早くその亡骸を抱き締めたいのに、邪魔をしないで」
みぞれの姿が消えた時、時充は背後へと刀を突いた。
「ひっ」
芳藍の頬に、峰が触れている。
「ぐっ」
刃先は、みぞれの左肩を貫いていた。
「芳藍、切れてないよね？」
「は、はい」
時充と芳藍が追撃しようとした時には、みぞれの姿はなかった。
「う、動きを……ぐぅ。よ、読むとは」
屋根上から声がして、ふたりはそちらを見やる。
「鞘、落ちてるじゃない」
逃げる際に手離したらしく、時充はそれを拾って刀を収めた。
鷹乃の持つ忍者刀と、それを交換する。
「血で滑るわね」
手に癒しの光を当てて、止血してから改めてふたつの忍者刀を握る時充。
「みぞれ、未来が見えるのはあんただけじゃないのよ」
「ふっ。言ってくれますね」
「それに、あんたは予見できるとか言いながらさ、あたいに苦戦しているじゃない。それも計算ずくなの？」
「どうでしょうか。ここまで時間をかけて、どうにもならないのだとしたら」
「だと、したら？」

「みぞれがしようとしている事は、運命に拒絶されているのかもしれません」
「運命？　あんた、おじさんが死んだのも運命だったと言いたいのかい」
「そうですね」
「っざけんなあ！　たったそれだけで、多くの人間を屠るってのかい？　あんたに助けられた恩義があるとはいえ、ここまでされて腹が立っちまったよ」
何かを感じ取ったみぞれは、血相を変えて声を荒げる。
「――時充。下がりなさい」
「あんっ？」
「いいから、下がってよ！」
みぞれが一瞬で間合いを詰めて、時充と鷹乃を抱える芳藍を蹴飛ばした。
刹那。横から凄まじい突風と青白い光が現れて――家屋もろとも、みぞれを飲み込んだ。
「な、なによ……？」
「い、今のは……？」
それはいくつもあった家屋を消し飛ばし、大地に大きな爪跡を残し、ほたるのような光を漂わせていた。
「ぐ……ぅあっ」
みぞれは深手を負い、大地がえぐれた中で寝転がっていた。
口から血を吐き、虫の息ながらも立ち上がろうとする。
「み、みぞれ。あんた、あたいらを助けて」
すでに体力も気力はなく、みぞれは空に手を伸ばして、ある名前を口ずさんだ。
「ぐっ。や、やた……からす」
浮いた白布をつかんで無理に起き上がったみぞれは、黒ずくめの人間に囲まれる。
「あれは、鴉（カラス）？　なんで」

黒装束に身を包んだ一団は、瞬く間に黒い羽根となる。
「……鷹乃を、お願いね」
それだけを言い、みぞれは微笑みながら倒れた。
「みぞれ――なっ」
「カアッ！」
大きな黒い怪鳥がそこに降り立ち、黒い羽根の上で眠るみぞれをついばんだ。
漆黒の帳（とばり）が広がり、烏（からす）とみぞれは忽然と姿を消していた。

一方、時はさかのぼり。
町中のある場所では、風が吹き荒れていた。
「わわっとお！」
衣凛の放つかまいたちを、流翠は素早い動きで回避している。
速さによる牽制（けんせい）は効果的で、衣凛は流翠についていけない。
「逃げるしか手がないのか？　笑わせるな！」
「あぶなっ」
衣凛は右手に刀を収めた鞘を持っていて、抜刀せずに全身からかまいたちを放つ。
流翠はそれを目視できるため、回避がたやすいのだ。
「ぐるぁあああぁあ……」
「ずぶぇえええっ」
けれど、それが見えない町人は巻き添えとなり、次々に害されてゆく。
「ちくしょうがあ！」
流翠は左手の忍者刀で斬りかかるも、その鞘で受けられてしまう。
一撃入れたらすぐに離脱して、衣凛のかまいたちを避けられる間合いを維持する。
「その程度か？」
「黙りなさい！　和正にいちゃんを、殺した仇め！」

「なんだと？」
「あ、あんた。山の中で男から刀を奪って、殺したでしょう！」
それを聞いて、衣凛が固まる。
「まさか、お前は」
「あっしは、その男の……義理の妹よっ！」
その隙をついて、流翠は斬りかかった。
「っ」
鞘で受け止めるのが遅れ、衣凛は体勢を崩す。
「どぅして、おにいちゃんを殺したのよぉおっ！」
涙を流しながら、流翠は衣凛の顔を殴った。
「つう。いい拳だ」
衣凛はわざとそれをもらい、流翠との間合いを離した。
「社に預けてたあっしを養おうと、飛脚となって各地を転々としていたのに。地理とか覚えるのが大変だって聞いて不安だった。なんで、なんでえっ！　あんたの都合で、殺されなくちゃならないのよぉおおおおおおおおおおおおおおおおっっっ！」
「私とて、果たさねばならなかった事がある」
「そ、そのために？　なんで、おにいちゃんを……」
「血縁だと認めたくはないが、父を討つために邪魔だったのでな。その刀はそいつを屠るべく用いた。今は折れてしまったが、手元に置いてある」
「だったら――」
「後で返してやろう。私と相対して、生き残ることができたのならな！」
抜刀によるかまいたちを、跳んでかわす流翠。
「空中にいれば、自由に動けまい！」
左手に持つ刀を振り返して、新たにかまいたちを撃ってくる。
――けどね。
「なにっ？」
衣凛が捉えたのは、材木だった。変わり身の術だ。

「はぁあああああああああっ！」
物陰に潜んでいた流翠はすかさず、白菊を衣凛の背中に叩き込んだ。
「ぐはぁあああああああああああああああああああああああああっ！？」
前方に勢いよく転がって、衣凛は地に這いつくばった。
「くっ。何度も、発動させたから」
めまいがして、流翠は追撃を諦める。
首を軽く振り、深呼吸を繰り返した。
「や、やるな……っ」
「まともにもらって、なんで」
立ち上がってくる衣凛を見て、流翠は目を見開いた。
「それぐらいで、参ると思うのか？　見くびるなよ。これでも私は……鬼なんだ」
「お、鬼ですって？　ふざけないで。どっからどう見たって、あんたは人間じゃない」
「見てくれで判断するな。私が言っているのは――力だよ」
「くうっ！？」
殺気で硬直した流翠の腹へ、衣凛は鞘の先端を打ち込んだ。
「がふあぁあああああああああああっ」
嘔吐（おうと）をして、流翠はたまらず膝を崩す。
「さらばだ」
衣凛の振りかざした刀が、流翠の首を斬り落とそうとした矢先。
「やぁめぇろぉぉおぉうぅぉぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっっっ！」
日照の声が、大気を震わせた。
「ぐぅうううううううううううっ」
それでひるんだ衣凛は、日照の接近に対応できず。
腹部に、重い鉄拳をもらった。
「くうあっ。これ、しきでえ！」

それで突き飛ばされ、倒れまいと踏ん張っていた衣凛だったが。
自身の背後に、もうひとりいることに気がついた。
「せぇえいっ！」
「あぐっ」
舞は衣凛の背中を蹴飛ばして、白菊で負った火傷を刺激する。
「くっ。舞まで、潜んでいたか」
衣凛は三人に囲まれ、嬉しいのか笑っている。
「多勢に無勢じゃない」
よろけながらも、流翠は立ち上がる。
ふと、流翠は衣凛が握る刀に違和感を覚えた。
「あんた。その刀、おかしくない？」
「何がだ？　ああ、ようやくか」
衣凛が持つ刀には、刃がなかった。
正確に言うなら、刃引きされた刀身であるため、鋭利な刃物ではない。
「そんななまくらで、人が斬れるはずないわ。あんた、何のためにそれを」
「ふふっ。それは時充に聞け」
「え？」
衣凛は日照を警戒している。流翠と舞には目もくれない。
「待って」
「ん？」
気合充分の日照と違い、舞のほうは様子が違う。
目と手でふたりを制して、舞は衣凛に話しかけた。
「衣凛、さん。どうして、あの時あたしを助けてくれたの」
「ふっ。それを問うてどうする」
「だって、あたしと命を守ってくれたから」
「守った？　違うな。私はお前を利用して、大勢の人間を屠殺したのだ」
「それだったら、どうしてあたしを殺さなかったの？　昭示さんや

芳藍さんを、どうして見殺しにしなかったの？」
「……っ」
衣凛は、答えに困っていた。
舞の純粋な目を見て、衣凛はたじろぐ。
「やっぱり、鷹乃の言う通りだ。悪い人から守ってくれたんでしょう？」
「黙れ」
「なんで、こんなことをするの。本当は、人殺しなんて――」
「聞こえなかったのか？」
容赦のない殺気が、衣凛から放たれる。
舞は恐怖で口が止まり、ごくりと唾を飲んでいた。
「そんなこと、どうでもいいだろう」
「あんた、この子らに手を出すんじゃないよ！」
流翠は身構えて、衣凛を注視する。
「私へ攻撃した時点でもう、血の流し合いをしたいと了承したようなものだ。だから、もう嫌だと泣き叫んでも寸止めはしないぞ」
衣凛の姿が、霞んだ。
「ぐほぁあああああっ！」
衣凛は日照の脳天にかかと落としを当て、その半身を地面に埋め込んだ。
「きゃあっ！？」
続けて舞へ回し蹴りを浴びせて、家屋に突っ込ませた。
「あ、あんた――ぐあっ！」
「せめてもの手向けだ」
流翠の顎を蹴飛ばして、それから衣凛は腹を踏み、彼女を押し倒す。
「く、うぅ」
鞘の先端を腹に押しつけ、流翠の動きを封じ込める衣凛。
気が渦巻く、なまくらの刀身。
衣凛はそれで、流翠の左胸を貫いた。

木片を手で払い、舞は半壊の家屋から飛び出した。
「あ、ぐ……ぅっ」
日照と舞は、見てしまった。
衣凛が、流翠の左胸に刀を突き刺しているのを。
「復讐者よ。義兄の下へ逝け」
衣凛の腕を、つかんでいた両の手は。
ぱたりと、地面へと落ちた。
「そ、そんな」
「後は、ふたりだけか」
刀を引き抜いて、それに付着した血を払う衣凛。
「てんめぇ……っ！」
地面にめり込んでいた日照は、おもむろにそこから立ち上がった。
「だんごのねえちゃんを、よぉくぅもぉぉおうぅうぉぉおおおおおおおおおっっっ！」
「なにぃ！？」
絶叫する日照。
その大声だけで、近くの家屋が消し飛んだ。
「ば、馬鹿な……」
衣凛と舞も吹き飛ばされてしまう。
空中で体勢を直して着地し、衣凛は日照を注視する。
「わっと」
転んでいた舞は、流翠が握っていた忍者刀が目の前に落ちたので、それを拾い上げる。
「うあぁあああああああああああっ！」
日照は地面がめくれるほどの力で衣凛へと踏み込み、その腹に重い拳を叩き込んだ。
「ぬ、ぐあぁぁ……っ」
大地が揺れ動き、ひび割れる。

殴られた衣凛は刀と鞘を落とし、地面に弾んで浮き上がった。
「うらぁあああああああああああああああっ！」
日照は衣凛の上へ跳び、両足で腹を踏みつけた。
「ぐ、ふぁあああ……っっ」
半身が埋まった衣凛の上にまたがって、日照はその顔を何度も殴打する。
「おねえちゃんを、おねえちゃんをぉおおっっ！」
号泣しながら、衣凛を激しく殴り続ける。
日照を止めようと、舞が近づこうとした時。
「う、ぐっ」
衣凛が、右手で日照の首をつかんだ。
「図に乗るなよ。小娘」
「ぐ、ぐあ……ぁっっ」
「無駄だ。呼吸路を断たれては、力など出せまい」
骨がきしむほど、衣凛は力を入れている。
「お前は、力はあるようだがな……はぁ、言ってしまえば、っ、それだけだ」
むくりと起き上がり、衣凛は右腕だけで日照を持ち上げた。
その間も日照は、剛力で衣凛の腕を握り潰そうとしている。
顔をしかめる両者。どちらも、鋭い目つきで相手をにらんでいた。
「や、やめてよお！」
舞が衣凛を止めようと走る。
おたがいに吐血するも、一歩も譲らない。
どちらかが音を上げるまで、このまま力比べをするつもりだ。
「ぐぁあああああああっっ！？」
舞よりも早く、衣凛へと一撃を浴びせたのは。
「ちっ。急所を外したか」
・・・流翠だ。
白菊は腹部を貫通し、衣凛を感電させていた。
「げほっ。う、うぐあぁあああああっっ」

解放された日照は顔が青ざめ、息苦しさにのたうちまわる。
「ば、馬鹿な……っ」
「このまま、引導を渡してやんよ」
その言葉ではっとなり、舞は流翠を止めるべく叫ぶ。
「だめえっ！　衣凛さんを、殺しちゃやだぁぁあああっ！」
ほんの一瞬、流翠はためらってしまった。
「く、くくっ」
「何がおかし――きゃあああああああああっ！」
衣凛は、その隙を逃さない。
無数のかまいたちに襲われ、流翠は全身をずたずたに引き裂かれた。
「ぐ、はぁ……な、なんと」
衣凛は片膝を崩して、両手で腹を押さえている。
「くっ。舞、日照を連れて逃げなさい」
流翠は瀕死でありながらも、幼いふたりを守ろうと衣凛の前に立つ。
「それはできない」
「言うことを、聞いてよ」
舞はゆっくりと、流翠と衣凛に歩み寄る。
「そうか。お前は右に心があるのか」
「ええ。あっしは生まれながらにして、身体の作りが逆なのよ」
だから、左胸を刀で刺されても生きていられる。
「くくくっ。ここまでやられるとはな。あの雪女に、黄泉にてしいたげられて以来だ」
不敵に笑う衣凛は。
「だがもう、遊びは終わりだ」
顔の包帯を、乱暴に引き剥がした。
「な」
「え」
衣凛の左目は、白と黒が逆転していた。

「逆眼(げきがん)をさらすはめになるとはな。覚悟しろよ？」
「あ、ひ、ひい」
その瞳ににらまれた流翠の様子がおかしい。
「く、あ」
「ぐえっ」
流翠は尻もちをついて、近くで倒れていた日照に抱きつく。
「ふふっ。それぐらいで屈するとはな」
次に衣凛は、その目で舞を見た。
「さあて、次はお前の番だな。舞」
その瞳に凝視された瞬間、舞の呼吸が乱れる。
声が出せず、手足が震え、握っていた短刀を落としてしまう。
――おぎゃああっ！
命の、声？
「どうした。私に問答をしていた時の威勢は、どこに消えたんだ？」
――ふぇええんっ！
命が、泣いている？
「くくくっ。すぐに楽にしてやろう」
『あなたが死んでしまったら、妹である命が未来に泣いちゃうのよ』
時充の言葉を思い出した。
その瞬間、舞の心から恐怖が消える。
「なに？　まさか」
鞘を踏んで転がし、うまく蹴り上げて舞は短刀を左手につかむ。
衣凛は舞から離れ、落ちていた刀と鞘をかまいたちで浮かして、その手に戻した。
「くっ」
青白い光を全身にまとう舞。
衣凛は刀身に気を渦巻かせ、その刃で舞へと斬りかかる。
「そんなの」
素早い動作で短刀を引き抜き、舞はそれから伸びる青白い刃で衣凛の斬撃を打ち払う。

異質な力を感じた衣凛は、たまらず後退する。
「くっ。なんだ、その力は？」
衣凛は屋根上に跳び、日照と流翠を見やった。
「させないよ」
瞬く速さで、舞は衣凛とふたりの間に立つ。
ゆらゆらと立ち込めるその輝きは、舞の残像をちらつかせる。
「ま、舞。あんた、その力は」
流翠の問いに、舞は答えない。
代わりに、舞は短刀の切っ先を衣凛へと向けた。
「ふ、ふふっ」
不敵に笑いながらそこを飛び降り、衣凛は舞と向き合った。
「あたしは、衣凛を……あなたを、信じるよ」
全身から白い気をほとばしらせる衣凛。
それに伴い、辺りのものがかまいたちによって切断される。
「信じる、だと？」
おたがいに、一歩も引く気はない。
「何度裏切られても、あなたを正してみせる」
「そこまで、私にこだわるのはなぜだ？」
「ありがとう。心から感謝して、そう言える人だから」
何も答えず、衣凛は両手で刀を振り被った。
その刀身には凄まじい気が渦巻き、付近の大気をかき乱す。
吹き荒れる風は、次第に嵐となってゆく。
「私は鬼だ。お前とは住む世界が違う」
舞も両手で短刀を握り締め、その刀身に青白い光を注ぎ込む。
ほとばしる輝きは、密度を増して夜の闇を祓(はら)う。
「それでも。あたしは、あなたにありがとうと言ったから。ずっと、ずっと信じてる」
衣凛が、刀を振り下ろした。
眼前に迫り来る旋風に向かって、舞は青白い光を解き放った。

芳藍に鷹乃を任せて、時充は町中を漂う残光が何なのかを探りに走る。
「あれは」
衣凛に、舞？
「待ちなさい、衣凛！」
気を失っている舞へ、刀を突き立てようとする衣凛。
足の痛みをこらえて、時充は間に入り込んだ。
「つっ！」
その刃を白刃取りで受け止めた時充。
かまいたちまでは防げず、両腕に切り傷を負う。
「と、時充……か」
衣凛の目の焦点が合っていない。
時充の姿を見て、意識がはっきりしたらしい。
「ぐ、うぅ……」
「無事、ではなさそうね」
舞の傍（かたわ）らには、流翠と日照が倒れていた。
爪跡の始点がそちらにない。
それを見て時充は、さっきの光が舞によるものだと確信した。
「どけ。この娘は、今ここで討たねばならん」
「だめよ。それは、あたいが絶対に許さない」
衣凛の右腕がだらりと、力なく垂れた。
そこだけ青白い光が残っているのを見て。
――当たったのね。
「みぞれは鷹乃を害するのに失敗して、でっかい烏（からす）とともに気配を消したわ。残るは衣凛、あんただけよ」
両目を見開き、衣凛は時充から離れた。
「くくくっ。あの雪女が、やられただと？　時充がやったのか」
「……。そこにいる、舞よ」
それを言った途端、衣凛は刀を引いた。

「さっきのを、まともにもらったのよ」
「ならば、ここで舞を討つのはよろしくないな」
「なんでよ？」
「将来、その娘が大きくなり……あの力を、使いこなせるようになる日が待ち遠しい」
「もしかして、舞がみぞれを倒せると思ってるの？」
「ん？　みぞれとは、もしや」
「ええ。あの雪女の名前よ」
「そう、か。名乗ったのか」
目を白黒とさせていた衣凛は、唇を噛み締める。
――まだまだ、私は未熟者だな。
「どこまで伸びるのか、この目で一度確かめてみたい」
「そうね。あたいも、鷹乃にそんな思いを抱いたわ」
溜息をついて、衣凛は刀を鞘に収め、それを帯に差した。
「ま、待ちな……っ」
「お前の相手は、次があったらだ」
流翠に返事をした衣凛は背を向けて、手招きする。
「誘っているのね。あたいを」
時充の声を聞くやいなや、衣凛は雪峰へと跳んでいった。
社の皆には旅に出ると言った手前、これはいい機会。
「んっと」
そう感じた時充は、懐をまさぐって手帳を出した。
「流翠、これを預かって」
彼女の前にそれを投じて、時充はこう説明する。
「医学についてと、刀の銘が記されているわ。照らし合わせれば、あたいの作品が何を意味するか。と、誰が所有すべきか理解できる」
「とき、みつ」
「悪いけど、あたいは戻れないかもしれない。処置に困ったら、それを見なさい。薬草やら傷の手当ての仕方とか、記録されているから」

流翠に引き止められる前に、時充も雪峰へとおもむいた。

「遅かったな」
「野暮用があってねぇ」
雪峰の麓、砂利の傍らに冷たい河川が流れている。
「あれは」
「みぞれ、ね」
衣凛と時充は大きな烏(からす)が空を飛び、雪峰の頂上へ向かっているのが見えた。
「あの烏(からす)。やっぱり」
「あれほど大きい鳥類は、初めて見るな」
黒い羽根が、川にいくつか舞い落ちる。
「みぞれ。あの烏(からす)を飼い慣らしているのね」
「やはりそれは、雪女の名前か」
「あれ。聞いてなかったの？」
「信頼されていないんだな、私は」
衣凛の溜息で、張り詰めた空気が少しだけ和む。
「ぐふっ」
「衣凛、あんた腹を……」
よろめく衣凛を支えようとした時充だったが。
逆眼の視界に入ってしまい、身をすくめてしまう。
「これぐらい、どうとでもない」
「……」
再び、ふたりは空をあおぎ見た。
「ところでさ、衣凛。あんたはいつ死んだの？」
時充と衣凛は、みぞれに黄泉帰りを許された存在。
本来なら死んで成仏し、生まれ変わるべきはずのふたりを。
みぞれは、未練があるならそれを解消してから逝け。
そう言い、手を差し伸べた。

「この雪峰に昔、鬼がいたんだ。あの流翠とかいう娘の兄から正宗を強奪し、昭示を社に預けてから、鬼を討伐したのさ。相討ちだったがね」
肩をすくめて、衣凛は顎をしゃくり話を促す。
「徳川暗殺に失敗して、追い忍とやりあっていたの。連中が手裏剣を投げたとこに流翠がいてね。あたいはそれを庇い、和正に流翠を守った。それでね、おじいさんの形見だった正宗を託したの」
同時に吹き出す。
「どうやら私と時充は、図太い因縁があるようだ」
「認めたくはないけどね」
ふたりは背を向けて歩き出し、ほぼ同時に振り返った。
「あんたは、まだ逝く気はないのね？」
「せめて、孫ぐらいは。と言いたいが、成長した舞も見たい。我ながら、本当にわがままな女だ。お前と違い、優柔不断だよ」
衣凛は刃先を時充に向けて、全身から発気を行った。
「ひとつ、教えとくね」
「なんだ？」
「その刃のないなまくらだけど。刀の銘は、羽翼（うよく）と言うの」
衣凛の場合、扱う刀はなまくらでないと刀身が持たない。
その気があまりにも強いので、刃こぼれが起きてしまうからだ。
気を刃として用いる前提があったからこそ、時充は衣凛にその刀を授けた。
「羽翼。鳥の翼か」
「ええ。ぴったしでしょ？」
「私が生き残ったら、大事にしよう」
対する時充は口に黒と白の短刀を――黒露白明（こくろはくめい）を咥えて、左右の手で別々の印を結ぶ。
「火氷遁（かひょうとん）、画竜点睛（がりょうてんせい）！」
「右に火を、左に氷だと？」
黒露は月、白明は日を表現したもの。

時充は右手で白明を抜き、左手には黒露を握った。
「さあ、仕上げよ。あんたを永眠させてあげる」
――運命、か。
みぞれが言っていた運命、それが何なのか。
少なくとも、あの子達にとって衣凛とみぞれの存在は脅威。
恩を仇(あだ)で返そうとも、ここで討ち果たさねばならない。
「言ってろ。私も、負けるのは嫌なのでね」
左目の、逆眼。
それによって集中力を乱されたくないので、時充は目をつむった。
「ふっ。そこまでやるか」
言いながら、衣凛が踏み込んでくる。
時充は全速力で駆けて、振り下ろされる羽翼に――両手を合わせた。

第七話

時充が姿を消して七年が経過した、ある日の昼下がり。
命と鷹乃のふたりは、流翠が営む呉服屋を訪れていた。
鷹乃は背が高く、長い黒髪を何にも束ねず下ろしている。
命は肩まで伸びた黒い髪を、邪魔なのか何度も払っていた。
「ええっ？」
「いきなりはだめかい？」
ふたりは居間にてだんごとお茶をいただき、流翠との他愛ない話に花を咲かせている。
「ん。別にいいんじゃないか？」
「で、でもお」
鷹乃は首を縦に振る。
命は返答に困っており、鷹乃と流翠を交互に見て、まごまごしていた。
「奮発しとくから、これでどうだい？」
鷹乃は巾着袋を受け取り、中を確認してぎょうてんする。
「こ、こんなにか？」
「芳藍の反物が好評でねぇ。商売が軌道に乗ってきたから、それぐらいは出しても支障はないよーん」
どれどれとのぞき込んで、命もびっくりして目を見開いた。
「小判がざっくざくぅ」
「命、それは止めろ」
「あはは」
鷹乃に注意されて、命はこほんと咳払いをする。
「じゃあ、流翠さんの分の夕餉も作りますね」
「おっ、久々に社で食事できるわぁ」
「あれ？　流翠さんって以前、社にいたんですか？」
命が聞くと、流翠は天井をあおいで、何かを思い出している。

「あっしはね……芳藍の母親、詩於さんに裁縫を教えてもらったのよ。昭示と芳藍はまだちっちゃかったわねぇ」
「ふたりの面倒を見てたのか？」
「もっぱら、あっしがふたりの世話をしてたよ。その頃、詩於さんは病気がちでね。無理を頼んで、織物の技術を学ばせてもらったのよ」
「ふうん」
鷹乃は流翠から話を聞いて、満足そうにうなづいている。
なぜか命をおんぶしようとする鷹乃。
命はその肩に、ぼしっと突っ込みを入れた。
「……続きを話してもいいかい？」
「構わない。今のは戯(たわむ)れだ」
「そう。昭示が八つ、芳藍が五つの時に……詩於さんが病死してね。あっしはその頃、十五だったかな。詩於さんの縁故(えんこ)もあってね、この前主人に住み込みで雇ってもらったのよ」
「んっ？　あれ、流翠さんは三十路を過ぎてないのか」
「あっしは二十八よっ！」
鷹乃の失礼な発言に、流翠は反論して頬をふくらませる。
「えっ。もっと若いと思ってました」
命は瞳を輝かせて、流翠を見つめている。
「な、なんですって？　命ちゃん、もう一度言ってごらん」
「肌がつやつやしてるので、驚いてます。普段から何を召し上がっているのか、教えていただけないでしょうか」
「水炊きよ」
「鍋物、ですか？」
「うん。若鶏(わかどり)をぶつ切りにして、野菜や豆腐と一緒に煮込み、付け汁で食べるの。週一でここの皆と箸をつついているわよ」
ふと、鷹乃が腕を組んで何か考えている。
「命、今日の夕餉は水炊きにしないか」
そんな提案をされて、命はびっくりして目を丸くする。

「あのお。材料がないんですけど。それ以前に、もう献立(こんだて)は決まってますし」
「残念だ」
鷹乃は残念そうに、がっくりとうなだれる。
「若鶏なら、ひとつかふたつ提供してもいいわよ」
「いえ、その。わたしは鶏(とり)をさばくのはやったことがないので」
手を振って命が断ると、流翠は微笑みながらこう申し出た。
「あっしがその場で調理するわよ。人数が多いから、追加のおかずとしていいんじゃない？」
「そういえば、命。今晩の献立はなんだ？」
鷹乃が聞くと、命は腕を組みながらこう答えた。
「う～ん、玄米飯に味噌汁、浅漬けに松茸を焼こうと思っていたんですけど。そうなると芳藍さんに相談して、献立を変えないといけませんね」
それを耳にし、ふたりは目を光らせる。
「味噌汁を止めて、水炊きを作らせてちょうだい」
「は、はぁ。流翠さんにそこまで押されると、無下に断れませんね」
「よしっ。命ちゃん、水炊きの残り汁にご飯を入れて雑炊にするわよ」
「はぃ？」
「それが、かなりうまいのよ。あっしらはいつもそうやって夕餉を締めてるから、どう？」
命と鷹乃はちらりと横を見やる。
作業場で仕事をしている女性の方々が、それを思い出して唾を飲んだり、よだれを垂らしていた。
「これは期待できそうだ」
鷹乃はお腹を両手で押さえて、すっかりそのつもりである。
命は瞬きを繰り返して、流翠のほうを向いてこう訊ねた。
「あの、もしかしてここの方々の分も用意しないといけませんか？」
「あっしだけでいいわよ。ここの連中は、昨日にそれ食べたんだも

の」
だから、よだれが出るほど記憶が鮮明なんだ。
そう納得して、命はうなづく。
「食材は夕暮れ前に持ち込むから、その辺は心配しないで」
流翠がちらっと鷹乃を見やる。
それだけで察したのか、鷹乃は腕を組んで答えた。
「日照が大食らいだから、あれだけで四、五人分として数えてくれ」
「……ちょっち多めに見積もっておくわ」
ふたりとも苦笑い。
「帰ったら、芳藍さんにその旨を伝えておきますね」
「あいよっ」
命は流翠からもらった巾着袋のひもを締めて、それを片手に立ち上がる。
「それは僕が持とう」
「あ、はい」
同じく立ち上がった鷹乃に、命はそれを手渡す。
ふたりが帰ると知り、流翠も直立して見送りに来た。
草履に足を通してからも、鷹乃と命は玄関で流翠とおしゃべりする。
「命ちゃん、七つになって……すっかり主婦してるわねぇ」
「自慢の妹だ」
「鷹乃、それを日照に言ってごらん」
「気にするな。すでに何度も言った」
「あぁ、そう」
鷹乃と流翠のやりとりに、命はおかしくて吹き出してしまう。
「たまには、日照がこっちに来てほしいのよねぇ」
「掃除やら、松茸狩りで外出はするがね」
「松茸、あの子に発見できるの？」
「案ずるな。日照の食べ物への勘は、妙に鋭い」
「ふうん。余ってるのならさ、少し分けてくれない？」

鷹乃の後ろにいる命に許可を求める流翠。
「はい。構いませんよ」
「んじゃ、新鮮なお魚と交換しましょ」
「いえ、別にそこまで……」
「やりくりしても、厳しいんでしょ？　素直に受け取ってよ」
「は、はぁ。いつもすいません」
軽く会釈した隙に、鷹乃は命の頭を撫でる。
すかさず脇腹に肘を打ち込む命。
それをもらった鷹乃はうずくまった。
「おお、見事な返し」
「く……う、腕を上げたな」
ほめられても、ちっとも嬉しくない命だったりする。
「鷹乃さんは、わたしをからかうのが好きですね」
「違う。命が可愛いからいけないんだ」
「それはうなづけるわね」
持ち直して立ち上がる鷹乃。
「んじゃ、鷹乃。これも受け取りな。お裾分け」
「おや、野菜か？」
野菜の詰まった紙袋を鷹乃は受け取った。
「水炊きの具材もあるのか」
「ええ。先に渡しとくわ。下ごしらえくらいはできるでしょ？」
「まあ、な」
巾着袋を懐にしまい、鷹乃はそれを両腕に抱える。
「しばらくしたら社に向かうから、よろしくね」
「はい」
「僕も台所で、その腕前を拝見しよう」
三人は手を振って別れた。

「あの子よ。虹の目をしてるわ」

「うわっ。本物だ。気持ち悪い」
町中を歩いていると、雑踏からそんな声が聞こえてくる。
「ごほんっ」
命の隣を歩く鷹乃は咳払いをして、帯に差してある刀に左手で触れた。
抜刀できる体勢を取った鷹乃を見て、ひそひそ話をしていた人々が散っていく。
「鷹乃さんっ」
「な、なんだ？」
「そうやって、力をちらつかせるのはよくありません」
「……済まない」
悪気はないと解ってはいる。
それでも命は、いたたまれなくて注意してしまう。
「さあ、早く帰りましょう」
「僕は、好きだけどな」
「はいっ？」
その一言に、前を歩いていた命は振り返る。
「命の目は、とても綺麗だ。恥じることはない」
「……からかってます？」
「本気で言っているよ。雨の後に青空に架かる虹を、こうやっていつでも眺められるんだ。この楽しみを、他人にどうこう言われるのは我慢ならなくてね」
「楽しみって……」
鷹乃は命の手を取り、小声で「ごめん」と謝る。
「馬鹿にしたつもりはない。誤解を与えてしまった。本当にごめん」
深々と頭を下げる鷹乃。
命は頬をふくらませて、鷹乃の手を引いて歩き出した。
「待て。そう急ぐと、転んでしまうぞ」
「だいじょうぶです」
「はあ。僕が悪かった。頼むから、機嫌を直してくれないか？」

「わたしは鷹乃さんを怒れませんよ。今まで、何度も助けられたから……」
「関係ないさ」
「ありますっ。今だって、ほら。わたしの手を握って」
「見失ったら大変だからな」
「そ、そんなことしなくても……迷子にはなりませんっ」
「命はちっこいから、探すのが面倒なんだぞ」
「やっぱり、からかってます？」
足を止めて、命は鷹乃の顔をあおぎ見た。
「本気で心配しているんだ」
真剣な眼差しで見つめる鷹乃は、不機嫌な命に微笑みかける。
「早く帰ろう。皆が待っているから」
「は、はい」
頬を染めていた命は、鷹乃の手をぎゅっと握り返す。
歩幅を合わせて歩いていると知り、命は背の低い自分を嫌悪した。
（あ……）
よく見ると鷹乃の手には、木刀の素振りでできた豆がある。
それに、洗い物を率先してするからか、かなり荒れていた。
「鷹乃さん」
「なんだ？」
「いつも、ありがとうございます」
「そうか」
照れ臭いのか、鷹乃はそっぽを向いた。
「鷹乃さんが、男の人だったらよかったのに……」
「んん？　何か言ったか」
「いえ」
聞こえていなかったことに、命は安堵する。
「もうすぐ社だな」
「はい」

表の石段を上がり、鷹乃と命が境内に入った時。
「たぁかぁのぉーっ」
鷹乃に、ひとりの女の子が抱きついた。
短い黒髪と衣服は汗で湿り、遊び盛りなその子は鷹乃の腰から離れようとしない。
「光、紙袋を落としそうになったじゃないか」
「すりすりぃ」
光は鷹乃が大好き。
「あっ、また命と手をつないでるぅ」
そのせいか、鷹乃が他の誰かと仲良くしているのが我慢ならない。
「命、その手は離さないぞ」
「はうっ」
紙袋で片腕を塞がれている鷹乃は、命の手をしっかりと握った。
逃げようとしていた命は、突然のことに気が動転する。
「むうっ」
「光、離れろ」
「やだっ」
「わがままが過ぎるぞ。これでは台所に行けないだろう」
「鷹乃が、手をつなぐまでこうしてる」
光が腰に抱きついているので、鷹乃は自由に動けない。
命も手を握られたままなので、おろおろしている。
「芳藍にご飯抜きと言われるぞ」
「うっ」
光は渋々といった感じで、鷹乃から離れた。
「よしっ。台所へ急ごう」
「わわっ」
その隙に鷹乃は早足で歩き出し、光を振り切る。
命は転げそうになるも、何とか体勢を直してついていく。
「今度は、ひかりの番だよっ」

「そ、それはいいんですけど……ゆ、ゆっくり歩いてください」
命の様子に気づいて、鷹乃は足を止める。
「あら、鷹乃。おかえりなさい」
と思ったら、台所前に辿り着いただけだった。
三人の目の前には、衣服を入れた竹かごを抱えた芳藍がいる。
どうやら洗濯をしていたらしい。
「芳藍。僕から伝えたいことがひとつある」
「はい？　なんでしょう、鷹乃」
命は流翠のことだと思い、鷹乃から芳藍に目線を移した。
「僕は芳藍が大好きだ」
「うえっ？」
唐突な鷹乃の告白。
光は声を出して固まり、命と芳藍は目を白黒とさせている。
「た、鷹乃っ。真顔で言われても……」
「冗談だ。夕餉のことなんだが、流翠さんが水炊きの材料を持ち込んで来る」
「え。流翠さんが？」
ちらっと、芳藍が命を見る。
うなづく命と鷹乃の紙袋を一瞥（いちべつ）し、納得した様子。
「そうですか。献立を変えないといけませんね」
「味噌汁を止めるだけでいいそうだ。それと、水炊きを食べ終えたらご飯を入れて、雑炊にするらしい」
「あら、それはいいですね」
鷹乃からそれを聞いて、芳藍は瞳を輝かせている。
「とりあえず、これでいいんだよな？」
「ええ。それと、松茸を少し分けてほしいと言っていましたね」
「芳藍、まだあるよな？」
鷹乃と命の質問に、芳藍は竹かごを置いて後ろを見やった。
「氷室のほうに行けば、数十本はありますよ」
鷹乃は命から手を離し、巾着袋と紙袋を芳藍に手渡した。

「んっ？」
「はい？」
芳藍の顔を見て、鷹乃は何かに気づいた。
その後ろから、空いた手を狙う光を警戒して――いるわけではない。
「芳藍。台所で手桶に水をすくい、明るいところでそれをのぞき込め」
「はっ？」
「いいから、早くしろ」
「は、はぁ。なんですか、唐突に」
いぶかしげながらも、鷹乃の言うことを聞く芳藍。
台所に入り、しばらくしたら。
「あっ！」
という声がした。
「さて、洗濯物を干しに表に回るか」
鷹乃は満足そうに、竹かごを両腕に抱えた。
「あうぅ」
光は鷹乃の手が塞がれてしまい、悔しそうにじだんだする。
「こほんっ。ありがとうございます、鷹乃」
台所から出てきた芳藍は、顔が真っ赤だった。
「いや、これからは気をつけてくれ」
ぴっと襟を正して、芳藍は明後日のほうを向く。
「芳藍さん、風邪ですか？」
様子が気になり、命が近寄りながら声をかける。
「いえ、そういうのではありませんから」
目を合わせたくないのか、芳藍は命に背を向ける。
「今の部屋割りをした、僕に感謝してくれ」
「どうもすいませんね」
光と命は意味が解らず、首を傾げている。
「むっ。芳藍さん、鷹乃と怪しい」

「光、わたくしは鷹乃とは何もありませんよ」
芳藍は光のほうを向いて、違うと否定する。
肩をすくめて、鷹乃は爆弾発言をした。
「昭示が激しいのは事実だがな」
「鷹乃っ！」
その一言に反応し、声を荒げる芳藍。
光と命は、ただただ呆然としている。
「さて、僕は表で洗濯物を干すよ」
「はあ。鷹乃……そういうのは、控えてくださいね」
「それは昭示に言ってくれ……」
まだ夕餉の支度をするには早いので、命と光は鷹乃を手伝うことにした。

物干竿に白衣や藍の袴を干し終えて、命と光は廊下に腰かける。
「鷹乃、遊ぼうよ」
「光、もう少し待て」
鷹乃は干してある衣服を伸ばして、よしっと両手を腰に置く。
「これでいいか」
「夕暮れまでに、乾くでしょうか」
「まあ多分、生乾きだな」
命の問いかけに、鷹乃は苦笑いする。
鷹乃がふたりに歩み寄ると、待ってましたと光が抱きつく。
「わあい」
「うお」
それを受けて、鷹乃はよろける。
光の頭を撫でて、鷹乃はちらりと命を見やった。
――うらやましい。
「うぅ」
命はじゃれているふたりから目をそらし、うつむいて落ち込んで

いる。
「ど、どうした？　命」
「はい？」
「どうしたんだ、元気がないぞ」
「いえ、少し眠いだけですよ」
「そうか。広間で昼寝しててもいいんだぞ」
命は顔を上げて、地面に置いてある草履に足を通した。
「もうすぐ夕餉の支度もありますし、のんびりはしていられません」
「そうか」
「では、台所のほうに戻ります」
「んっ。流翠さんが来たら、僕もそっちに向かうから」
「はい」
ふたりに背を向けて、命は裏のほうへ回った。
「ふう」
胸に手を置いて、溜息をついている。
「命？」
「わっ」
考え事をしていたら、命は誰かとぶつかってしまう。
「……どうしたの？」
「おねえちゃん、いつからそこに」
それは、命の姉の舞だった。
「声をかけたのに、そのまま突っ込んできたでしょ」
舞の容姿は身体の線が細くて背が高く、腰まである長い黒髪を白い布でひとつに束ねている。
その髪と白布は汗にぬれて、衣服も少し湿っていた。
妹の命は、そんな姉の姿を見て赤面する。
「あ、ごめんなさい。ちょっとぼうっとしてて」
鼻が痛くて、命はそこを手でさする。
少し距離を置いて、改めて姉と向き合った。
「今日も、素振りや走り込みをしてたの？」

命は舞の右腰に差してある刀を見て、それから舞の顔をあおぎ見る。
「誰も相手してくれないから」
「鷹乃さんなら、そっちにいますけど。光ちゃんと一緒に」
「……なら、論外」
そう吐き捨てて、舞は腕を組んで考える。
「日照さんや昭示さんは？」
「彼女は裏の石段を掃除してたし、昭示さんも何かの集まりでまだ帰ってない」
命の質問に、舞は溜息まじりに答える。
「芳藍さんは台所で支度をしてるでしょうし。わたしはお手伝いに向かうところだったので」
「……はあ。ひとりで石段を昇降（しょうこう）してるわ」
「後で流翠さんが来るので、その時に止めてね」
「えっ。なんで？」
「お鍋を作ってくれるんです」
「はぁ」
それで思い出したらしく。
「――はうっ」
舞の腹の虫が、騒ぎ出した。
「空腹なんですねぇ」
「うぅぅ」
恥ずかしくて、お腹を押さえながら舞はうつむく。
「わたしが何か作りますから、おねえちゃんも一緒に」
「えっ。あたしはこれから階段のほうに行くのに」
「そんな音を鳴らした状態で、練習なんてもってのほかです」
その手を握って、命は舞を連れて台所を訪れた。

「芳藍さん」

「あら？　命に舞、どうかしま――なるほど」
こちらを振り向いた芳藍は、言う途中で察したらしい。
気まずい舞は、目をそらして唇をとがらせている。
「おにぎりでも作るわね」
「えっ。い、いいですよ」
「じゃあ、梨でも」
「……はい」
芳藍が目の前で梨をちらつかせると、舞はうつむいて溜息をついた。
「舞、鍛練のやりすぎは身体を壊しますよ」
包丁で器用に皮を剥きながら、芳藍は舞に説教をする。
「探しに行きたいから」
「何を？」
「……時充さんを」
ぴたりと、芳藍が手が止まる。
その間に命は、壺の中の糠漬(ぬかづ)けを確かめていた。
「鷹乃と、そういう話をしましたね」
「うん」
芳藍と舞は目と目を合わせ、真顔で話し合う。
「雪峰に、おもむくつもりなのですか。舞」
「七年前からずっと、あそこは吹雪(ふぶ)いている。何かが、隠されている気がするの」
雪峰の周辺は、常に吹雪が起きている。
その中を無理に進もうとすると、どうしてか逆戻りするという。
「鷹乃に日照、舞が社の裏にある山を歩いているのは……」
「道を探すためだよ。松茸はついでだけど」
悪びれた様子もなく、舞はそう答えた。
「危険ですよ」
「解っている。でも、時充さんが死んだとは思えないの。流翠さんから、手帳を預かってそれっきりだって聞いても……」

命と光は、時充を知らない。
鷹乃に舞、日照と芳藍が持つ刀は、その人が打ったものだと聞かされている。
命と光にも刀はあれど、ふたりは刃物に興味がない。
そのふたつは、昭示が預かっていた。
「あ、いいかも」
なすをひとつ取り出し、命は一口味見する。
今晩のおかずはこれにしようと、命はいくつか漬け物を取り出しておいた。
「気持ちは解ります。が、あの雪女に包帯の女性と対峙して、勝ち目はあるのですか？」
「ある。鷹乃と日照も、昔のように子どもじゃないもの」
「そういうところが、子どもなんですよ」
それには何も言い返せない舞。
芳藍はその表情を見て、諦めていないと察する。
「はぁ。言っても聞きそうにないですね」
皮剥きを再開し、芳藍は切り分けた梨を小皿に盛りつけた。
ふと、舞がちらっと命を見やる。
「おねえちゃん、食べる？」
「……命が漬けたの、おいしいから」
舞は命から食べかけのなすを手に取り、一口かじる。
「あっ、おいしい」
瑞々（みずみず）しいなすの漬け物は、舞を笑顔にした。
「芳藍さん、そこの野菜。漬け込んでもいいですか？」
「えっと、そのために買い込んだのでは？」
「あはは。それ、水炊きの材料です。中には煮るのに適さないのがあるので」
机の上にある紙袋をのぞき込む芳藍。
中からきゅうりとなすを取り出し、命に了解を求めた。
「はい。それを新たに漬けときます」

「そう。じゃあ、お願いね」
「はあい。このまま押し込んじゃいます」
芳藍からそれを受け取り、命は壺の中から今まで漬けていたのを取り出した。
今晩のおかずとして使うのか、指で数えている。
「うん」
それから新しい野菜をその中に入れてゆく。
「ふう」
「命、これで手を洗いなさい」
「あ、すいません」
芳藍は手桶に水をすくって、命の前に差し出した。
それから芳藍は舞のほうを向いて、説教の続きをする。
「舞。鷹乃と日照にも後で注意しますが、雪峰に勝手に出かけないように」
「……うん」
「もし行くと決めたのなら、前もって言うように。解りましたか？」
「……はい」
大きな溜息をついて、芳藍は頬を緩めた。
「よろしい」
安心したのか、芳藍は梨をもうひとつ剥き出した。
「舞、食べていいですよ」
そう促され、舞はすでに切り分けられていた梨をひとつつまむ。
「いただきます」
「どうぞ」
舞は梨をひとつ頬張り、ん～っとうなっている。
「冷たくて、果汁がたっぷり」
「氷室で冷やしましたからね。ささ。命も、おひとつ」
「はぁい」
命は壺にふたをして、手洗いをしてから梨をひとついただく。
「あっ、ほんとにちべたい」

「命、食べながらしゃべらないで」
「んぐっ。ご、ごめんなさい」
芳藍に叱られて、命は瞬きを繰り返す。
命が謝ると、続けて舞は頭を下げた。
「あっ、おねえちゃん。わたしをばかにしてる」
「そ、そういうつもりはないよ」
命が頬をふくらませたのを見て、舞は吹き出してしまった。
「むう」
「ほらほら。仲良くなさい、ふたりとも」
新しい梨を小皿に並べて、芳藍もひとつ口にした。
「あら。歯応えが、いいですねぇ」
「……元気はもらった」
舞のお腹は満たされたようで、また鍛練へと出かけよう――とした矢先。
「おっ」
日照がおやつを嗅ぎつけてきた。
「皆して、梨を食ってる」
竹ぼうきを片手に、物欲しそうに芳藍を見ている。
短い黒髪と、男の子と間違われそうな顔立ち。
その言動と性格もあってか、あまり女性らしくないと評判である。
本人は一切気にしてないようだが。
「日照、あなたもひとつどうですか？」
「ん～っ。いいや」
「あら、珍しい」
「今ここで腹を満たすと、もったいないような気がするんだよなぁ」
――なるほど。
命に舞、芳藍も納得した。
「んじゃ。オレはもう少し境内を掃除してるわ」
手を振って、日照は上機嫌で外に出ていった。
「……日照って、ほんとに食べ物への勘がいいね」

「流翠さんの水炊き、ほとんど食べられそう」
舞と命のつぶやきに、芳藍は天井を見ながらそれがどこにあるのか思い出していた。
「まあ、普段より大きな土鍋を使えば……問題はないかと」
命も芳藍と同じく、腕を組んでそのありかを思い出そうとしている。
「……もういっこ」
舞は梨をもうひとつ食べて、日照を追うようにここを飛び出した。
「さて、わたくし達は支度を始めましょうか」
「そうですね」

「こんにちわーっす」
鷹乃に案内されて、流翠が台所にやってきた。
光に抱きつかれている鷹乃は、その頭を撫でて溜息をひとつ。
「あら、流翠さん」
「おっ、芳藍。あなたのおかげで繁盛してるわぁ」
芳藍は流翠の持つそれを見て、瞬きを繰り返す。
「そ、そんなに持ってきたんですね」
「日照がいるからね。これぐらいないと、足りないでしょ。芳藍」
流翠の手には処理されて、皮を剥がれた若鶏が三羽。
それを机の上に置いて、流翠は胸を張る。
「うしっ。今から仕込むわよ」
意気込む流翠をよそに、鷹乃は愚痴をもらす。
「僕は手伝えそうにない。ごめん」
「すりすりぃ」
命と芳藍は苦笑いしながら、流翠とともに調理する。
その過程を観察していた鷹乃は、頃合を見てこう切り出す。
「僕は食膳を広間に運ぶよ。ご飯とかおかずは、もうそろってるしさ」

「あっ、じゃあわたくしも。命、流翠さんを補助してあげてね」
「はぁい」
鷹乃と芳藍が台所から離れてしまい、命はちらっと流翠のほうを見る。
「んや？　命ちゃん、人見知りかい？」
「そ、そうじゃないですけど」
「あはは。まあ、あっしは命ちゃんの味方だから安心しなよ。それは一度置いてさ。この土鍋使えばいいのかい？」
「あ、はい」
流翠は土鍋をかまどに置いて、水炊きの調理を始めた。
「でも、どうして急にこちらでお鍋を？」
「昔話がしたくなってね。それに……」
「それに？」
「なんでもないよ」
言葉を濁した流翠は、肩をすくめて命に微笑みかける。
「さて、と」
手桶で雪解け水をすくい、流翠はそれを鍋に注いで昆布も入れる。
まな板の上で若鶏を包丁でさばき、それを鍋の中に放っていく。
「慣れてますね」
「いつもやってるからねぇ」
それから野菜をざく切りにして、鍋に並べていった。
「意外に簡単ですね」
「鶏の血抜きから皮剥ぎまで、ここでやったほうがよかったかい？」
想像して、命はうっとうめく。
「ほら、ね」
命の様子を見て、流翠は愉快そうに笑っている。
「それ見ると食欲なくす人もいるからね。家でやっといてよかったわ」
「わたしたちが帰った後、それを？」
「ええ。ひとりで解体して遊んでたわ」

またしてもうめいてしまう命。
やりすぎたと、流翠は反省する。
「えっと。お魚は？　松茸と交換するって言ってましたけど」
「舞が氷室のほうに鮭を二尾運んでくれたわ。もうすぐこっちに来るんじゃない？」
噂をすれば、何とやら。
「あっ、流翠さん」
「おや、舞。あんた、すっかり美人になったねぇ」
「……はい？」
お世辞に慣れていない舞は、微妙な反応をする。
彼女は机の上にある空の紙袋を見つけ、それに松茸を詰め込む。
「おや、あんがとね」
「……いえ」
足音がして、ここにいる皆はそちらを向いた。
「あれ、舞。ちょうどよかった。食膳を運ぶのを手伝ってくれ」
鷹乃が再びここを訪れて、舞にそうお願いする。
「……鷹乃」
「なんだ？」
「あたしは日照を呼んでくる」
「あ、逃げるな！」
舞は脱兎のごとく走り去り、鷹乃は諦めて溜息をつく。
腰に光が抱きついているため、だ。
「くっ。舞め、後で覚えていろ」
「それ、妹の前で口走る台詞かい」
「なに？　あっ、命。いたのか」
鷹乃は命を見つけ、頬を指でかく。
「芳藍さんに、ここにいろって指示されましたからね。聞いてなかったんですか？」
「そんな余裕があると思うか？」
「……なさそうです」

「うむっ。理解が早い」
光にくっつかれたままの鷹乃は、動きだけでなく思考も鈍ってしまう。
「少しは鷹乃から離れたほうがいいわよ。光ちゃん」
鍋の具合を見ながら、流翠が口出しをする。
「ううっ。鷹乃、一緒にお風呂に入ってくれなぁい」
「まるで、昔は一緒に入っていた口振りね」
「うん」
流翠と光のやりとりに、鷹乃は不満そうに意見した。
「まだ光が赤ちゃんの頃だ。今はひとりでゆっくりしたいんだぞ」
「鷹乃、付け汁は何がいい？」
「おい、聞いてるのかっ」
「聞いてるわよ。醤油（しょうゆ）かだし汁か、あっしは皆の好みを知らないのよ」
首を左右に振って、鷹乃は命を見る。
それにつられて、流翠と光も同じほうを向いた。
「酢醤油（すじょうゆ）でいいと思います」
「なるへそ。ふたりは？」
「僕はそれでいい」
「ひかりも」
皆が納得したので、命は付け汁の材料を探し始める。
その間に鷹乃と光は食膳を持ち、広間に運んでいく。
「命、何をしているの？」
鷹乃と入れ替わりに、芳藍がここに戻ってきた。
「付け汁になるものを探してるんです。とりあえず、酢醤油がいいみたいです」
「う～ん。昭示さんのために、柚子（ゆず）を用意してくださいね」
その一言で、流翠と命が舌を巻く。
「ふーん」
「へぇー」

「な、なんですかその反応はっ」
ふたりは目が合う。
うんうんとたがいにうなづき、改めてふたりは芳藍を見た。
「ふたりは、わたくしを馬鹿にしているの？」
「そういうつもりはありません。昭示さんの好みを把握している芳藍さんに、敬服していたんです」
「あっしも同じさ」
鍋をのぞき込む流翠は、両手で印を結んでいる。
「水遁、捩菖蒲（ねじあやめ）！」
命と芳藍が声をかける前に、流翠は鍋に術をかけていた。
「な、何をやっているんですか」
「うわわ。め、目が回る」
「えっ。鍋の中を渦巻かせて、あくを浮かせているんだけど」
芳藍と命は鍋に近づき、感嘆して拍手している。
「おたまでこれをすくえば、ようやく人前に出せるわね」
流翠は次々とあくを取り、得意げに微笑んでいる。
「忍術を料理に扱うなんて、わたしには無理ですねぇ」
「右に同じく」
命と芳藍は、諦めの溜息をひとつ。
「は、はあ。ただのあく取りに術を使っただけじゃない」
「でも、流翠さんは他にも何かやってそうですし」
「……」
命の突っ込みに、流翠は渋い顔をする。
「ど、どうしました？」
「ううん。料理に忍術を使用するだけで、そこまで意見されるとは思わなかったのよ」
そんな流翠は芳藍を見やり、「火を消していい？」と訊ねる。
「もう作るものはありませんし、どうぞ」
「あいよ」
砂をかけて消火し、流翠は手に水をまとわせて鍋を持つ。

「ほら、さっさと広間に運ぶわよ。腹を空かせたのが、大勢いるんでしょ」
流翠に急かされて、命と芳藍は残りの膳を運んだ。

「いただきま～す」
昭示が帰宅し、皆で鍋を囲む夕餉の時。
「さあ、たんと召し上がれ。あっし特製の――って、日照いっ！」
「お、んまんまっ」
流翠が説明する途中で、日照が箸を伸ばして鶏肉を一口頬張る。
それがきっかけとなり、他の皆も鍋を箸でつつく。
「まあ、前置きはいいじゃないか」
「そ、そうね」
昭示の一言に、流翠は顔を引きつらせる。
「どうしたんだ？」
「んっと、昭示。あんた、いい男になったわねぇ」
流翠の一言に、昭示が吹き出しそうになる。
「な、なんだよいきなり」
「芳藍は幼かったからいいとして、昭示。あんた、あっしのこと覚えてないでしょ？」
「……はっ？」
「ああ、もういいわ」
がっくりと、流翠はうなだれる。
「ひどっ」
光が箸で昭示を指し示し、突っ込みを入れた。
「い、いや……俺は、ぼんやりとは覚えているぞ」
「具体的に？」
立ち直った流翠が、昭示を追及する。
「え、えっと」
「そう。あの約束を忘れてるのね」

それを耳にして、芳藍が昭示をにらんだ。
更に、皆も続いて昭示に抗議の視線をくれた。
「お、おいっ。なんで俺は皆に敵視されなくちゃならないんだ」
「昭示。すでにその頃から芳藍にお熱だったのねぇ」
流翠のつぶやきで、皆は何となく察した。
「まあ、今は幸せそうでよかった」
にこりと微笑む流翠は、昭示と芳藍を祝福していた。
「ところで、約束とは？」
「芳藍、掘り返さなくても何もないわよ。引っかかった時点で、どんだけ愛してるのか見え見えじゃないの」
ふっと鼻で笑う流翠に、してやられたと落ち込む芳藍。
「ささ、今は食事の時間よ。たらふく食べなさい」
流翠の水炊きは好評で、すぐに具がなくなってしまった。
ほぼ半分は、日照が平らげている。
「あれま。ここの皆は食欲旺盛ねぇ」
あまりにも早く空っぽになったので、流翠は口をあんぐりとさせている。
「さ、殺気が……急ぎましょう」
流翠は日照がご飯を狙って、目がぎらつかせていることに冷や汗をかく。
「雑炊にするから、芳藍」
「はい」
「うしっ」
飯櫃（めしびつ）を開けて、流翠はしゃもじで玄米飯をよそう。
それを鍋の中に入れて、ゆっくりとかき混ぜている。
「後は、少しお味噌を足せば完成よ」
芳藍は流翠の指示でおたまで豆味噌をすくい、それを鍋の中で溶かしていく。
「お椀を用意しなさ――って、はやっ」
待ちきれないのか、皆は流翠へとお椀を差し出す。

手伝いをしていた芳藍は、流翠と同様にびっくりしている。
「ひとりずつやるから、おとなしく待ちなよ」
苦笑いしながら、流翠は均等になるよう盛りつけていく。
「あっしがゆっくり食べる時間がないじゃない」
「お手伝いしましょうか？」
「いいわよ。命ちゃん」
命の申し出をやんわりと断り、流翠は皆の食べる姿を見て微笑む。
ようやくと、芳藍と流翠は自分の雑炊を食べ始めた。

第八話

時はさかのぼり――。
天上にあるという世界、高天原(たかまがはら)は……紅に染まっていた。
『ぐ、ぐぁあああ……っ』
天岩屋戸(あめのいわやと)に張りつけにされた男は、苦しみに喘いでいた。
『この程度なの？　須佐之男(すさのお)命』
青みがかった紫の長髪を血にぬらし、一糸まとわぬ身体を白い布で巻いた、澄み渡る空のような瞳を持つ少女。
みぞれは十握剣(とつかのつるぎ)を奪い、彼の左胸にその刃を突き立てていた。
『黄泉津大神(よもつおおかみ)が、どうして……高天原を滅ぼさんとする』
その刀身を握り締め、抗おうとする男。
その剣は岩屋に深く食い込んでおり、たやすく抜けそうにない。
『わちきはただ、返してほしいだけだよ』
『な、なにを……』
『天叢雲剣(あめのむらくも)を。君達の言う、草薙剣(くさなぎのつるぎ)をね』
男の目が、大きく開かれた。
『なんだと？　あれは、すでに天照大御神(あまてらす)様の……』
『あれは元々、わちきのものだから。となれば、すさのお。君の倒した大蛇(おろち)が、誰の手先だったのか……うふふ。解るでしょう？』
『な、なんと……』
『天叢雲剣はわちきの創造した神器。その存在は常に感知できるし、それが移動した経路もなぞっていける』
『お、俺は……まさか』
『そう。君は知らぬ間に、わちきの計画に加担していたんだよ』
悪かった男の顔色が、更に青くなる。
『ぐほっ！』
血を吐いて、男は力を振り絞って、みぞれへと手を伸ばす。
『ま、まだ……俺は』

『もう君に用はない』
『な、泣きながら……言える台詞か』
白布は男の首に巻きついて、徐々に力を強めていく。
『さようなら』
みぞれは涙をこぼしながら、男にとどめを刺した。

天安河(あめのやすのかわ)で、みそぎをしているひとりの少女がいた。
その傍らには、男がひとり血みどろで倒れている。
『闇淤加美神(くらおかみ)、建御雷之男神(たけみかづち)をやったんだね』
返り血だらけの羽衣(はごろも)をまとい、長い藍髪を指先ですいている小柄の少女。
闇淤加美神は水浴びをしながら、憂鬱そうにみぞれを迎えた。
『……泣いているの？』
その手には布津御魂剣(ふつのみたまのつるぎ)が握られており、その刀身には血がこびりついている。
切れ長のその瞳でみぞれをにらむ彼女は、剣を収めながらこう答えた。
『そっくりそのまま、台詞を返すよ』
ふたりは河川で血を洗い流してから、本殿へと向かう。
『こちらで何があったのか。詳しく聞かないのですね』
みぞれの隣を歩く闇淤加美神は、憔悴(しょうすい)していた。
『純水を使えば、雷電など恐るるに足らない。違うかい？』
『……』
みぞれは闇淤加美神の前に出て、少し早足で歩く。
『それも、予見したのですか』
『ううん。ただの勘』
『……恐れ入ります』
『ん？　どうやら、お待ちかねのようだね』
ふたりは本殿の前に辿り着いた。

その前に、神々しい輝きを放つ剣を持つ、ひとりの女性が立っている。
『なんと。黄泉と通じる者がまさか……闇淤加美神。あなただったとは』
『天照大御神。わたくしは黄泉と通じてはいませんよ』
『黙りなさい！　天に背くその行い、私自らが裁きを下します』
草薙剣を握る女性は――剣に裏切られた。

『く、ぅっ』
ひとりでに動いた剣は、女性の左胸を貫いていた。
『天叢雲剣は、返してもらうよ』
十握剣と布津御魂剣もその身に受けて。
『小賢（こざか）しい真似をするね。化け狐』
女性は立っていられず、あおむけに倒れた。
みぞれの隣に立つ闇淤加美神は、その相手が稲荷（いなり）大明神だということに驚いている。
『な、なぜ……』
『本物のこれを残してここを去り、偽者を用意する。まあ、策として悪くはないね』
みぞれは白布で三本の剣を引き抜き、それらを鞘に収めさせた。
『ふ、ふざけ……ないで』
死が近づいた影響か、その変化が解けた。
『運命からは逃れられない。彼女が――月読命（つくよみ）がいるんだからさ』
それを聞いて、倒れている女性は絶句した。
『まさか』
『今頃、あまてらすはつくよみにやられているだろうね』
肩をすくめるみぞれ。
闇淤加美神は、布津御魂剣を受け取り、ふたりに背を向けて歩き出す。

『いなり、君の策は逆効果だったね』
『ば、莫迦(ばか)に……しないで。あたくしは……あなたを、殺す』
『死に損ないめ。そんな状態で言えた台詞かい？』
『ぐ、あ……』
白布で首を締めつけ、みぞれは女性にとどめを刺した。
『さて。高天原の優秀な戦士達によって、鬼を全て片付ける事ができた』
そのひとり言に、闇淤加美神は足を止めて振り返る少女。
みぞれが歩み寄ると、物憂(ものう)げな顔をして口を開いた。
『……それも目的だったのですね』
『角の生えた鬼は嫌いだよ。あんなの、いつまでも配下に置いておきたくはないもの』
ふたりは遠くにある森林へと、歩を進めていった。

地上へと続く森の道。
その中もまた、紅に染まっていた。
『な、にを』
『姉様。それは愚問です』
煌(きら)びやかな羽衣を着る女性は、背中を短刀で刺された。
月読命は姉を蹴飛ばし、冷たくこう言い放つ。
『最期に、言い残すことはありませんか』
血まみれの短刀を、姉の首に突きつける月読命。
『いずれ、あなた達に罰が……下りますよ』
『……そうですね』
最後まで聞かず、月読命は姉を屠った。

『……』
『おや、つくよみ』

血だらけの羽衣を脱ぎ捨て、襦袢(じゅばん)だけの格好で。
長い群青色の髪を風に踊らせ、月読命は空を見上げている。
彼女もまた、涙していた。
『これで、よかったのでしょうか』
月読命の問いに、みぞれは何も答えられない。
『もう過ぎた事です。わたくしは、先に地上へと戻ります』
闇淤加美神はふたりを置いて、森の道を先へ進む。
『……行くよ』
『……はい』
みぞれは月読命の手を取り、一緒に歩き出した。

それからしばらくして――。
『ご苦労だったね。八咫烏(やたからす)』
『カァ』
後に雪峰と呼称される山の洞穴にて、みぞれは小さな烏(からす)を腕に迎えた。
『それも、従えていたのですね』
『くらおかみ。つくよみは？』
闇淤加美神は洞穴の外に出て、下を指差して答えた。
『川で水浴びをしています。それよりも、引き止めないのですね』
『理由がないよ』
『そうなのですか？』
『わちきはもう、君達を強いるつもりはないよ。自由に生きるといい』
無言でみぞれを見つめる闇淤加美神。
『どうしたのさ』
『……いえ。鬼もいないのに、黄泉をどう統べるのか気になっていまして』
『それは心配しなくていいよ。わちきと烏(からす)だけで、どうにかするか

ら』
闇淤加美神は、まだ不安そうな顔をしている。
『月読命は、罪に押し潰されそうになっています』
『あの娘も、わちきと同様に未来を見る能力があるからね』
『夢見、でしたか』
『わちきのは、それとは異なる方法だよ』
溜息をついて、闇淤加美神は帯に差していた布津御魂剣をここに投げ捨てた。
『眠るのが怖いと嘆いていましたから。本当の意味で、自由になれるのでしょうか』
『……それは、くらおかみにも言えるね』
そう指摘すると、闇淤加美神は微笑んだ。
『わたくしが別れる事で、未来に何か変化はあるのですか？』
みぞれは、その人に思いを馳せながらこう答えた。
『逢いたい人に、逢える。それだけだよ』
『わたくしが、ですか？』
『さ、ね。結果を先に言っても、つまらないだけだよ』
『……それもそうですね』
闇淤加美神は会釈をして、この場を立ち去った。

それから何年か経った、ある日のこと。
みぞれと月読命は洞穴にて、男と少女の亡骸を見つけた。
『その男と彼女が……闇淤加美神の子孫なのですね』
『つくよみ。無理しなくていいよ』
『いえ。予見した以上、一目見ないと真実だと認識できなくて』
ごほごほと咳き込みながら、月読命は隣に立つみぞれを見る。
『ふたりを、どうなさるつもりですか』
『娘のほうは、黄泉にて説得するよ。こっちの男は……すでに魂がない』

『ない？』
『今夜、夢にでも見ると思うよ』
肩をすくめて、みぞれはつくよみと向き合った。
『病は、重そうだね』
『ふふ。死ぬ事で罪から解放されるのなら、待ち遠しいですよ』
『……つくよみ。いや、今は詩於だったっけ』
『今のあたくしは、月読命としてこの場に立っています』
その発言に、みぞれは微笑んだ。
『ごめん。それよりもその巫女服、よく似合っているね』
『あたくしの自信作です』
『藍色の袴が夜空、白衣が雲と星、頭が月。そう表現しているんだね』
『……台詞を、先取りなさらないように』
『ごめんごめん。巫女装束は、朱色が基本だと思っていたんだけど……どうしてそれを採用したんだい？』
『それでは、ありふれていてつまらないと思いまして。でしたらひとつだけ変えて、藍染にしようと』
月読命は手を出してその話を切り、みぞれにこう問いかけた。
『黄泉に一番近いこの場所を、一時的とはいえ……この男に明け渡したのは、どのような理由があるのですか？』
『……』
『答えるつもりは、ないのですね』
『……そういうつもりはないよ。そうしなければ、君とこうして会話できなかった』
『そうですか』
『嬉しそうだね』
微笑みをくれる月読命の表情には、憂いがうかがえた。
『女として、母として。今はとても幸福です。けど、あたくしが罪を犯した事で……後に誕生する娘が、呪われるのではないかと不安で』

『もう、呪いは始まっているよ』
『……やはり。この病が』
それは、呪いではない。
月読命の抱く罪悪感がもたらす、神通力の暴走だ。
『何を夢見ても、下手な事はしないほうがいいよ』
『……いえ。昨晩、あたくしは……昭示と、夫を、手にかけそうになりまして』
『もう、夢に見ていたんだ』
『あなたなら、もうすでにご存知かと思いましたが。いつまでもそれに触れないので、こちらから切り出すはめになりましたよ』
月読命の手には、短刀が握られていた。
みぞれはそれに目を丸くしていたが、呼吸を乱すことなくこう訊ねる。
『わちきを、屠るつもりかい？』
『ええ』
そうしなければ、後に生を受ける娘が安息を得られない。
そう、頑なに信じている目だった。
『なら、もう一晩待って』
『どうして？』
『わちきを殺したらどうなるか、夢の中で未来を見通せばいい』
『……あなたには、何が見えているのですか』
月読命は、自信に満ちたみぞれの表情を前にして。
その短刀を、静かに鞘に収めた。
『一言で説明できない。その夢を見て、それでも決意が揺らがないのであれば……そうすればいい。わちきは、ここにいるから』
一度頭を下げて、月読命はこの場を立ち去った。
そして、明日――それから病で亡くなるまで、ずっと。
月読命が、この洞穴を訪れることはなかった。

深夜。
社の広間で食事をしていた皆は……いつの間にか、眠っていた。
「うぅ」
ひとり、命が意識を取り戻す。
目をこすり、命は上体を起こした。
「――うっ」
夢を、見ていたような気がする。
どんな内容だったのか思い出そうとすると、頭痛がした。
「あれ？」
他の皆も、広間で眠っていたことに気づく命。
ぼんやりとしながら、命は膝立ちして皆の存在を確かめる。
「あれ？　流翠さんに……光ちゃんが、いない」
昭示、芳藍、鷹乃、日照、姉である舞。
五人の存在は確認できたが、そのふたりだけ姿が見えない。
「ねえ、ねえ」
命は近くにいた舞を揺り起こす。
「うぅ」
「あ、起きた？」
「あ、れっ？　なんで、あたしはここで……寝ちゃったんだろう」
「おねえちゃん。他の皆も起こそう」
命は鷹乃を起こしに向かい、舞は芳藍を揺さぶる。
「くっ」
「んん」
ふたりも目覚めて、命は次に日照を起こした。
「ふぁあっ」
最後に、命が昭示のほうへ向かおうとした時。
「……ようやく、遊べるね」
この場にいる皆が戦慄（せんりつ）した。
「な、お前は」
「ゆ、雪女っ」

鷹乃と芳藍がよろけながらも立ち上がり、抜刀体勢を取る。
この場に現れたみぞれは昭示の上に座り、その上に浮く白布に業物を三本持たせていた。
そのひとつは、何の飾り気もない普通の刀。
そのひとつは、刀身と柄が同等の長さの剣。
もうひとつは、神々しい作りの刀剣だった。
「どうしたの？　怖い顔をして」
巫女服を着こなすみぞれは、自分がここにいてさも当然のような発言をする。
「お前、流翠さんをどうした」
「さあ？　外を見ればいいじゃない」
それを耳にした日照は、外の廊下への障子を開け放とうとしたけど。
「な、なんだっ？」
ガタガタと物音が立つだけで、それは微動だにしない。
「結界を張り巡らせているから、単純な方法では屋外には出れないよ」
「なら、お前を倒せばいいんだな」
「鷹乃、あなたも単純だね。みぞれが、どうしてこの人の上にいるか解っているの？」
帯に差してある――白銀に輝く刀、雪白天（せつはくてん）を抜こうとした鷹乃は、半（なか）ばでその動きを止める。
「ひ、人質か！」
そのやりとりで、他の皆も身動きができなくなった。
「そんなつもりはないよ」
「だったら、昭示を解放しろ」
「解放？　ふふっ、いいよ」
鷹乃の言葉に不敵な笑みを浮かべて、みぞれは昭示の上から下りた。
「く、くあ……っ」

「さあ、鬼と化せ。我と共に、愛すべき者を討とうではないか」
昭示はうなされている。
みぞれのささやきを耳にして、芳藍は迷わずに抜刀した。
「ふっ。我が手にいずるがよい。――天羽々斬（あめのはばきり）」
みぞれは白布に刀を引き抜かせ、その内の一振り――十握剣を左手に受け取った。
「ちいっ！」
「やるね。腕を上げたよ」
芳藍の淡い青色の刀身を持つ髭龍（しりゅう）をみぞれは剣で受け止め、白布から鞘も受け取る。
芳藍はたまらず後退するも、昭示の様子に絶望を抱いた。
「クッキァアアアッ！」
「さあ、君達は鬼である昭示を討てるかい？」
みぞれは昭示を背にして、高らかに言い放った。
「き、貴様っ！」
鷹乃に舞が、同時にみぞれへ斬りかかる。
しかし、みぞれがまとう青白い光――霊気（れいき）を目の当たりにし、踏み込むのを逡巡（しゅんじゅん）した。
「ふふ。鷹乃、君の祖父の剣を前にして、臆している場合かい？」
「な、なにをほざいている！？」
動揺を隠しきれない鷹乃。
日照もその発言に目を丸くしていた。
「虚言で、惑わせようとするなんて！」
舞も霊気を発して、淡い紫色の刀身を持つ葉落（ようらく）を抜刀しつつ、みぞれへと踏み込んだ。
「くう。本気なんだね」
「あなたなんかに、負けない！」
鍔迫（つばぜ）り合いをする両者。
みぞれは笑いながら、姿勢を低くした。
舞は昭示の襲来に気づき、すぐにその場を退避する。

「ケッケケケッケケッ！」
ついさっきまで舞がいた場所は、床が陥没（かんぼつ）していた。
昭示の拳が、そこに当たったのだ。
「さて、昭示はもう壊れた。芳藍、早く討ち果たさないと……犠牲者が出るよ？」
「あ、あなたはあっ！」
芳藍の叫びに対して、みぞれは嘲笑（ちょうしょう）を浴びせる。
「くっ。ここは、昭示さんはわたくしに任せて！」
その宣言に、皆は目を見開いた。
ただひとり、みぞれだけはほくそ笑んでいる。
「さあて。どうしようかな？」
「ふざけるなあああああっ！」
鷹乃は雪白天でみぞれに斬りかかり、その斬撃を受けさせる。
舞はその隙を逃さず、みぞれへ突きを放った。
「な」
葉落は白布によって巻きつかれ、その動きを止められてしまう。
「急がないと、流翠に光は衣凛に殺されるよ」
みぞれのつぶやきに、日照は怒りに任せて障子を殴り続ける。
「力ずくでも、ここから出てやるかんなあ！」
社内が日照の力によって揺れ動く。
「ぐ、ぐぁあああああっ！」
「昭示さん、落ち着いてください」
芳藍は苦しむ昭示を説得している。
まだ理性の欠片があると察したみぞれは、大きな溜息をついた。
「導術（どうじゅつ）に抗えるのか……。みぞれが制御しているのに、こうまで抵抗されると面倒だね」
障子を破る音がこだました。
「結界を、力ずくで……」
日照が拳で障子を貫いて、外への突破口を開いた。
みぞれはそれほど驚いていない様子。

彼女は皆を一瞥してから、最後に芳藍を見やった。
「ま、昭示はいずれ壊れる。芳藍、愛する人と果てるがいい」
「……っ」
鷹乃と舞に接近される前に、みぞれは障子を蹴破り、外へ飛び出した。
「く、逃がすか！」
鷹乃はみぞれを追う。
「命、無事？」
「あ、うん」
舞は命に歩み寄り、その震える手を握り締めた。
「ふたりとも、早くここから離れなさい！　昭示さんが、いつあなた達を狙うか……」
芳藍を振り返る、舞と命。
昭示の拳と蹴りは、素早い身のこなしの芳藍に当たりこそしないが。
一撃ごとに社は破壊され、逃げ場をなくしてゆく。
追い詰められている芳藍は、それでもふたりに逃げろと目で合図する。
「芳藍さん、昭示さんは……あの子を倒せば、きっと助かるはず」
「でしたら、わたくしが時間を稼ぎます。あなた達は……早く」
暴れ苦しむ昭示と、髭龍を構えて迎え撃つ芳藍を背に。
舞と命は無事を信じて、境内へと踏み込んだ。

凄絶（せいぜつ）な光景だった。
社のあちこちに火が放たれ、黒煙が巻き上がっている。
誰かが戦ったのか、至るところに血痕が確認できた。
「ぐ、あ……っ」
神木のほうでは、その幹に張りつけにされている流翠と、包帯を全身に巻いた女性――衣凛がいた。

流翠は右手で首を締め上げられていて、顔が青ざめている。
「おい、やめろおおおっ！」
日照が止めようと衣凛へ殴りかかったら。
彼女は流翠を投げて、日照にぶつけた。
「ぐっ」
「げほっ！」
日照は流翠を受け止めて、咳き込む彼女の背中をさすっている。
「ふっ」
衣凛の帯には、二本の業物が差してあった。
「みかづち……いいや、我が祖父よ。そなたの剣を借りるぞ。――佐士布津神（さじふつしん）！」
それを左手で引き抜いた刹那。
衣凛の周囲に、かまいたちと稲妻が走る。
日照と流翠は、それを見て愕然とした。
「お前は、また僕らにちょっかいを出すのか。何のためにい！」
「……」
「答えろ！」
別なほうでは、鷹乃とみぞれが打ち合っていた。
「あなた達は、早く生まれちゃったんだよ」
「なに？」
「あなた達の力が必要になるのは、遠い未来。死して亡くなり、運命を我に委ねよ」
「ふ、ふざけるなあああっ！」
刀身がぶつかる音が響く。
鍔迫り合いをする鷹乃とみぞれは、おたがいに一歩も譲らない。
「ふざけてはいないよ。みぞれはただ、事実を言っている」
「そのような虚言に付き合わされて、死ねと言うのか？」
「時代に合わないものは全て淘汰される。あなた達は、運命に淘汰されるべき存在。ゆえに、みぞれ達が滅ぼさなくてはならない」
みぞれは力で押し返して、鷹乃に尻もちをつかせた。

「く」
「さようなら」
みぞれが鷹乃へ剣を振り下ろそうとした瞬間。
「ちっ」
舞がふたりの間に割り込み、葉落でその剣を受け止めていた。
「あなたの相手は、鷹乃だけじゃない！」
「ふふっ。多勢に無勢か」
「昭示さんと芳藍さんを救うためにも、早々にこの子を片付けないと」
舞は葉落へと霊気を注ぎ込む。
それを見たみぞれは、舞から飛び離れた。
青白く発光する刀身を振りかざし、舞はみぞれへ斬りかかる。
「きゃはっ」
陽気な声を発する何者かに、その舞の斬撃は受け止められた。
「ひ、光……？」
愕然とする舞。
瞳と同じ輝きを持つ刀――刻峰（ときみね）は、霊気を帯びた葉落をしっかりと押さえている。
「な、なにを」
「ちぇ。お前に用はないよ。ひかりは、鷹乃と遊びたいんだあ」
呆然とする舞を突き飛ばし、光は鷹乃を見定めた。
「ど、どういうことだ。答えろ、みぞれえ！」
「鷹乃、ひかりね。あなたを殺したいの」
代わりに答えたのは、光だった。
無邪気に笑う光は、鷹乃に近づきながら刻峰を振りかざす。
「来世で、あなたと結ばれるって……みぞれちゃんが言ってくれたんだよぉ！」
「なっ」
光が振り下ろす刻峰は、鷹乃に当たることはなかった。
だが、その一撃で地面に大きな穴が開いている。

「そ、その威力は……」
鷹乃のつぶやきをかき消すように、みぞれが声を張り上げた。
「さて、それぞれで相手を見つけたようだし。これからが本番だよ」
刹那。辺りに鏡のようなものが張り巡らされる。
「お、おねえちゃん！」
命は近くにいる舞へと手を伸ばす。
けどその手は、鏡壁によって妨げられた。

その頃、社の広間では――。
「昭示さん……！」
「クッケケッ！」
正気を失った昭示が、鬼として暴れ狂っていた。
「髭龍、お願い」
今のうちにと、芳藍は鞘と柄を合わせる。
鞘と柄にある、指が通るほどの穴。
そのふたつの穴が一致し、そこと鍔にある銀の輪に緒を通して固定する。
この刀は、鞘を柄とする長刀（なぎなた）になった。
「昭示さん、あなたとわたくしの子ども達が……運命に立ち向かっています」
「フッシャアアアッ！」
「ですから、もう少し……待ちましょう？」
「クッククケケケケエエエッ！」
もう、言葉は届かない。
「っ」
芳藍は後ずさり、昭示の拳から逃れた。
乱暴に振り下ろされるそれは、畳を真っ二つに打ち割る。
「昭示さん。昭示さん！」
足の踏み場がなくなってきたことに、芳藍は焦る。

「ケケケケッ！」
後退しながら攻撃をかわし、芳藍は長刀の刃先で牽制する。
それに構うことなく、昭示は芳藍へと突っ込んだ。
「くあっ！？」
「キャキャッ！」
素早くて回避が間に合わず、拳を左肩にもらってしまった。
「はぁ、このっ！」
「フギェエエッ！？」
片腕だけで長刀を振るい、昭示の胴体を切りつける。
天井に張りついた昭示は、片腕でぶら下がりながら芳藍を見下ろしていた。
「……うっ」
左腕が動かない。脱臼（だっきゅう）している。
髭龍を畳に突き刺し、それから。
「はあっ！」
右手で、強引に関節を戻した。
「あぐっ！」
あまりの激痛に、芳藍の目から涙がこぼれる。
「ケケケッ！」
芳藍の目の前に、昭示が降り立つ。
「傷が……」
昭示に負わせた傷は、もう治りかけている。
自己再生が、かなり速い。
「はぁ、くうっ」
まだ、左腕の感覚がない。
「しばらくは、無理できませんね」
目覚めたばかりで力が入らない上に、軽く動いただけでこの汗の量。
「うっ」
気持ち悪くて、吐き気がする。

――まさか。
あの鍋に、毒でも仕込まれていたのでしょうか。
「クッシャアアッ！」
「ちぃっ」
長刀を振るっても、昭示は芳藍を捕らえようと縦横無尽に暴れ回る。
畳は打ちまたは踏み砕かれ、壁も天井も、いくつか穴が開いていた。
しかも昭示は素早く、壁や天井に這いずり、どこから襲ってくるのか予測が難しい。
「長刀は、不利ですね」
そもそも、長刀は狭い屋内で振り回すものではない。
広間だから問題はないが、廊下などでは取り回しが利かず、一方的になる。
「このっ！」
「クギェエエッ！？」
鞘の先端で昭示の腹を殴打し、勢いに任せて突き飛ばす。
その隙に芳藍は緒を外し、刀と鞘を分離させた。
「はあっ！」
「クゲッ！？」
不要な鞘を投げつけて、落とさぬよう柄の穴に中指を通した。
「はぁ、くっ」
芳藍の意識が、揺らぐ。
首を左右に振り、芳藍は廊下へと逃げ込んだ。
「クッキエェエエッ！」
芳藍を追って、廊下に飛び込んできた昭示。
――昭示さん。
わたくしは、今まで幸せでした。
「せえいっ！」
最後に、わがままをひとつ許してください。

「グ、グギェエエエ……ッ」
「一緒に、逝きましょう？」
狭い廊下では、正面から突撃するしかない。
それゆえに、迎え撃つのは容易。
「わたくしも、すぐに追いますから」
左胸に突き刺した刃は、昭示の鼓動を断った。
力を失い、その四肢は重力に従って、床に落ちる。
ゆっくり刃を引き抜くと、昭示がうつぶせに倒れた。
「うっ。ど、どうして……こ、こんなことに」
その場に泣き崩れて、芳藍は気づく。
「え――くあっ！？」
昭示は、まだ生きていることに。
「く、く……つぁあっ！」
両手で芳藍の首をつかんだ昭示は、息の根を止めようと力を加える。
――まさか、内臓の再生も速い？
それに気づいた芳藍だが、もう手遅れだった。
「あ、く、つ……ぅっ」
まだ、まだ諦めない。
早く、早くあの雪女を――。

日照と流翠、衣凛は神木の近くでにらみ合っていた。
「あんたと、白黒をつける時ね」
「……鏡結界（きょうけっかい）か。確かに、けりをつけねば自由に動けないな」
周りを見渡して、衣凛が溜息をつく。
流翠は短刀を引き抜いて、それを左手に構えて呼吸を整える。
日照は帯に差してある赤い色を持つ刀――雪月華を抜くことをせず、拳を出して身構えた。
「へっ。お前なんて、オレが一発で片付けてやる」

ふと、流翠が日照に丸薬を一粒渡した。
「な、なんだよ」
「これを口にしなさい。解毒できるわ」
「げ、げどく？」
言われるがままに、日照はそれを飲み込んだ。
「ひとりでは勝てないと踏んだか。それに、眠り薬以外に毒を盛っていたとは」
「あんたらが、脅迫したからじゃない」
「それは初耳だな」
「嘘おっしゃい！」
「……ふう」
大きい吐息をもらした後、衣凛は疑問を投げかけた。
「どのような脅し文句だったんだ？」
流翠はためらいながらも、こう答えた。
「時充に、和正にいちゃん。藤真さんに、詩於さん。皆の大切な人を……その魂を滅して、二度と転生できないようにするって言ったのよ。あの、雪女が」
時充は亡くなっていた。
それを知り、日照は悔しさに歯噛みする。
「なるほど。それだったら、私も屈するな」
「あ、あんたは……あの雪女の味方してるじゃないの！」
「私とて、みぞれに反感を抱いていないと言えば嘘になる」
「何で、抗わないのよ」
「反抗したところで、勝ち目など万にひとつも――いいや。元から勝機など見出せる相手ではないからだ」
「結局、あんたは腰巾着だってことね？」
「表現としては、奴隷が一番適切だろう」
「ど、どれい……ですって」
「ああ。私は一度みぞれとやりあったが、一方的だった。まるで、赤子と大人の喧嘩だ」

衣凛は憂鬱そうに空を見上げた。
「みぞれが、この社の皆が寝込んだところを襲わなかったのは……なぜだろうな」
「そんなの、本人に聞けばいいじゃない」
「純粋に戦を楽しみたかったのか。それとも……私に、昭示を殺させたかったのか」
その発言を受け、日照が会話に割り込んだ。
「な、なんでそこで昭示が出てくんだよ」
衣凛は日照を見て、一粒の涙をこぼした。
「私は……昭示の母親だ」
その事実に、日照と流翠が驚愕する。
「正直、私はこの戦に乗り気ではない。みぞれは、昭示すらも屠るつもりでいるだろう。だからこそ、余計な干渉を防ぐこの鏡結界を使用したんだ」
「だったら、あんた」
流翠の言葉を手で制して、衣凛は電流がほとばしる剣を上段に構えた。
「私に求められているのは、単純に戦だけだ。それ以外の感情は必要ない」
「泣きながら、言える台詞かよお！」
衣凛の言動が気に入らず、日照が一喝する。
「自分の息子を、死なせてもいいの？　あんた、それでも母親なのかいっ！」
流翠もまた、衣凛の説得を試みていた。
「本音を言えば、みぞれを止められるものなら止めたいさ。しかしそれは、破滅を呼び込むと何度も言い聞かされた。あの一件から、今まで――この七年の間にな」
衣凛は上に構えた剣の刀身に、雷と風を渦巻かせる。
「我が主の命とあらば、私は血族すら紅に染める――鬼と化そう」
真っ白な輝きを全身から放って、衣凛は日照を見据える。

「ゆくぞおおおおおおお！」
叫びながら振り下ろされる刃。
それから放たれた稲妻とかまいたちは、日照と流翠の間を駆け抜けた。
「くっ。もう、やりあうしかないのね」
「おっし。思いきり、ぶん殴ってやるからな！」
衣凛は剣を両手に持ち、それを下段に構えた。
対する流翠は短刀を片手に、印を結べるよう呼吸を整えている。
日照は拳を鳴らして、素手で立ち向かう。
「そこの日照とやら、腰にある刀は無用か」
「こんなの、ただの飾りだよ」
「そうか」
衣凛は剣を下から跳ね上げて、地上に雷電を、空中に旋風を走らせる。
日照と流翠は左右に動いて、それをやりすごす。
「何がどうあれ、あんたを倒せる日がようやく来たわ！」
「ふっ。私は、以前の比ではないぞ」
流翠は衣凛の懐へ飛び込み、短刀を左胸に突き刺そうとする。
しかし、その攻撃は残像を捉えるだけに終わった。
「えっ？」
「な、ど、どこにいやがる」
衣凛の姿が霞んで、日照と流翠はそれを背にして周囲を見渡す。
それがよくなかった。
「ふんっ！」
「うぎぁあああああああああっ！？」
流翠の背中から、大量の鮮血が飛び散る。
「失せろ」
流翠を蹴飛ばして、衣凛は次に日照を見定めた。
「こなくそっ！」
「むっ」

日照の回し蹴りを後退して避け、衣凛は剣を振り被った。
「んっ？」
その動作の途中で、衣凛は気づいた。
「へへっ。どうやら、かすったみたいだな」
その頬に、切り傷ができている。
衣凛は右手で血をぬぐい、笑いながら剣を両手で握り締める。
「なるほど。手足に気をまとわせているのか」
「理屈は解らねぇが、多分それで合ってるぜ！」
振り下ろされる刀に、日照は拳を合わせた。
「ぐっ！」
「うわわわっとお」
その皮膚は切断されることなく、剣を弾き返した。
気による爆発が起きて、日照と衣凛は体勢を崩してしまう。
「隙ありいっ！」
流翠が右手から電流がほとばしる術――白菊を発動させて、衣凛に殴りかかる。
「甘い」
衣凛はその腕をつかんで、手を地面へと突っ込ませた。
「当たらなければ意味などない」
衣凛が流翠を斬りつけようとした時、日照が地鳴りを起こしながら踏み込んだ。
「くっ」
それに体勢を崩しながらも、衣凛は流翠を蹴飛ばした。
日照は流翠を受け止めずに避けて、衣凛へと殴りかかる。
「同じことだ。当たるものか」
「ちいっ！」
空振りした日照の拳は、神木に深くめり込む。
その手を引き抜いて、距離を取った衣凛を目で追う日照。
「流翠さん、ばらばらでやりあってもだめだ」
「協力するってこと？　合点承知」

持ち直した流翠は、日照とともに衣凛を挟撃（きょうげき）する。
「ほう」
感心した様子で、衣凛は日照の動きを注視する。
「ちょっと、こっちも見なさいよ！」
衣凛の足下から、水が沸き立つ。
「むっ？」
「捉えたわ。今よ！」
それを合図に、日照が接近する。
「なるほど。水を操り、からめ捕ったか」
「おっしゃあああっ！」
衣凛は日照の拳を右手で受け止めるが、その顔は苦痛に歪んでいた。
「どうだ。もういっちょお！」
もう一発が来る前に、衣凛は全身から稲妻とかまいたちを放出した。
「ち、ちくしょ」
それをまともに浴びた日照は、動けるうちに離れた。
追撃しようと接近していた流翠は、それに巻き込まれないよう様子を見ている。
「く、くそお」
「やってくれるわね。でも、まだ好機はある」
日照と流翠は体勢を直し、再び衣凛を挟むように位置した。
「付け焼き刃だな。その程度で、私をどうこうできると思うな」
日照の動作に目を凝らす衣凛。
ふと、衣凛はその頭上に何かがいることに気づいた。
「日照、伏せろ！」
衣凛は高く跳び、日照に襲いかかろうとした昭示を地面に叩き落とした。
「グッヒェエエエエエエッ！？」
「なっ、昭示！」

流翠の声で、それが何なのか日照も解した。
「し、昭示さん……？」
「無理やりに結界を突き破り、ここにやってくるとは……我が子ながら、恐ろしい」
衣凛は起き上がる昭示を警戒して、日照と流翠を庇うように前に立った。
「な、なによ……あの、血は」
昭示の両腕には、血がべっとりと付着している。
それを見て、日照と流翠は……胸騒ぎを覚えた。
「泣いているのか。昭示」
衣凛が指摘して、ふたりは昭示が号泣しているのに気がついた。
「芳藍を、手にかけたのだな」
その衣凛の一言で、ふたりは同時に社のほうを見た。
「う、うそ……でしょ」
「ほぉうらぁあああああああああんっ！」
呼んでも、誰も答えてはくれない。
その隙に衣凛は結界の風穴を通り抜け、社のほうへ姿を消した。
「な、待ちなさい！」
流翠が追いかけようとしたが結界の修復は早く、道は閉ざされてしまった。
「昭示さん。なんで……」
日照は鬼と化した昭示の前に立ち、身構えた。
「クッキェエエエエッ！」
「なんで、なんでだよっ！」
悲しいを通り越して、怒りが込み上げてきた。
その衝動に突き動かされ、日照は昭示に殴りかかる。
「こんにゃろぉおおおおおおお！」
それに昭示は、拳で応えた。
「ぐうっ！」
「クキィッ！？」

鈍い音がして、両者は激しい痛みを自覚する。
「ち、ちくしょ」
「クッシャアアッ！」
右手の指が動かなくなって、強く握れない。
それは昭示も同じようで、手首を押さえて悶えている。
「日照、無理しないで。あっしがこいつを引き受けるわ」
「け、けど」
流翠は日照の前に立ち、昭示を引きつける。
「あんたの馬鹿力なら、脱出口を作れるはず。それでここから逃げなさい！」
今ので利き手が壊れてしまった日照。
近くにある結界を見て、深く息を吸い込んだ。
「や、やってみるよ」
「ええ。任せたわ」
日照は足で結界を踏み、亀裂を走らせた。
「クグォォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッッ」
胸にある悲哀を吐き出すかのように、昭示は絶叫した。
「なっ」
「うげっ」
鼓膜に響くそれを防ぐべく、日照と流翠は耳を塞いだ。
「グギァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアンッ！」
大粒の涙を流し、昭示は慟哭（どうこく）していた。
昭示はやり場のない怒りを拳に乗せ、激しく地面を殴打する。
「い、今のうちに」
日照は結界を踏み砕き、流翠のほうを振り返る。
「やったぜ！　るすぃ……ぐうぅぅうううあぁぁあああああああああああっっ！？」
日照の腹部を、電流がほとばしる一本の腕が貫通していた。

その術は白菊――ではなく。
「電光石火」
が、突き立てられていた。
「な、そ、それ……は」
「ありがとね。日照」
ここにいる流翠が、時充だと気がついた日照。
「さようなら」
時充は非情にも日照を押しのけ、その穴をひとりで通り抜けた。

舞とみぞれは、激しく打ち合っていた。
「どうしたの？」
みぞれは飾り気のない刀――正宗を片手に、舞の動きを観察している。
「くっ」
舞は劣勢に立たされていた。
「はあああっ！」
葉落で打ち払うも、浮かぶ白布が握る二本の業物は使い手不在。
往なしてもすぐに持ち直し、舞へと迫っていく。
「こ、の」
「それぐらいで、みぞれを倒せるとでも思っているの？」
「まだ、まだこれからよ！」
言ってから、舞は吐き気をもよおした。
みぞれは白布を手で制し、自身の後ろへ追いやる。
「なぜ？　今、確実にあたしを仕留められたはず」
「毒が、効いているみたいだね」
「ど、毒？　あなた、そんなものまで……」
「仕込んだのは流翠だよ。文句なら、彼女に言いなよ」
鏡壁があちこちに張られていて、周りの状況が確認できない。
舞は葉落を両手で握り締め、呼吸を整える。

「……舞。君は気づいていたはずだ」
「何を」
「時充が、衣凛が……、霊体であったことを」
「……。解らなかったよ」
「嘘だね。君は本能的に、彼女らに問いかけていた」
「……。そうかもしれない」
みぞれは静かに、正宗を鞘から引き抜いた。
「っ」
左手に持つその刀身から、禍々（まがまが）しい妖気がほとばしる。
それを目視した舞は、悪寒がして顔を引きつらせた。
「な、何が……」
「知らないとは言わせない。刀匠（とうしょう）が、どんな思いで生きていたのかを」
「せ、説教なんて」
「聞きなさい。職人にとって、作品は子供と同じなの」
「な、何が言いたいの」
「舞。あなたは時充が打った刀を、生命を殺（あや）めるために用いている。その責任を、罪を、背負えるの？」
「……っ」
「刀匠が生んだ子供は、それが良作であればあるほど必然と多くの生命（いのち）を屠るでしょう。人間は何も考えずにその子供を振るい、次々と血を流している。その罪の重なりは、次第に刀匠を苦しめてゆく。延々と続く殺戮（さつりく）に、刀匠の心は耐えられない。なぜなら、刀匠も人間なのよ。その子供達が屠殺してきた生命（いのち）に、恨みを買われないわけがない。過去、現在、未来……この所業は、現実でも仮想でも繰り返される。誰も、刀匠の気持ちなんて考えずに刃を振るうの！この正宗がまとう妖気は、その……刀匠である正宗の、怒りと苦しみそのものなのよ」
みぞれの言葉を耳にして舞は、打ちひしがれそうになる。

それでもまだ、葉落からは手を離さない。
「あなたは……みぞれは、何を見通しているの？」
「未来を繋ぎ止めるためなら、みぞれはどんな罪でも背負う。この正宗の思いも、あなた達の無念も、全てね」
「か、勝手なことを言わないで！　あたしたちはあなたたちに打ち勝ち、生き延びてみせるわ！」
舞は一歩踏み込み、みぞれへと葉落を振り下ろす。
それを正宗で受け止めたみぞれは、舞と鍔迫り合いをする。
「もう無理だよ。この社も、あなた達も、何もかもを終わらせる」
「ふ、ふざけないでよお！」
舞の全身から、霊気が現れる。
みぞれもまた、それで応える。
「うぁあああああああああああああああああああっっ！」
「はぁあああああああああああああああああああっっ！」
舞とみぞれの絶叫に呼応し、たがいの霊気が膨張してせめぎ合う。
先に崩れたのは――舞だった。
「っっ」
正宗の妖気がみぞれの霊気と合わさり、舞を吹き飛ばす。
「ちい」
右手を地面につけて、両足で踏ん張る。
「似ているね。その目が、特に」
「な、何を言っているの」
「いなり。君の血筋は、ここで途絶えさせる」
「さっきから、何を言っているの！？」
――ごめん、ね。
立ち上がり様に葉落を両手で握り締め、みぞれへ斬りかかろうとした時。
「えっ？」
舞は、嫌な予感がして社があるほうを振り返った。
「芳藍が、亡くなったみたいだね」

そのみぞれの一言で、舞の瞳から涙がこぼれた。
鏡壁を隔てた、その先にいるであろう芳藍。
舞は、芳藍の気が途絶えたことに……胸が、潰れそうになる。
「う、うそ……え」
「さて、次に逝くのは……誰だろうね？」
みぞれは静かに、正宗を振りかざした。
大切な人を、守れなかった。
「う、うぅ……うあぁあぁぁぁあぁっっっ！」
怒りが、悲しみが、悔しさが――感情が、弾ける。
舞の霊気はみぞれを遥かに上回り、より鮮明に夜の闇を祓(はら)う。
気おされた形で後ずさりするみぞれは、ちらりと白布を見上げた。
「あなたを……許さない」
葉落に霊気を注ぎ込む舞。
その淡い紫の刀身は振動し、奇妙な金音(かなおと)を響かせる。
「凄まじい霊気だ。限界を超えるほど注いだら、刀が壊れるよ」
「だまれえええっ！」
青白い刃を形成する葉落を、舞はみぞれへと振り払う。
しかしその斬撃は、白布が握る一振りが押さえた。
「な、えっ」
「天叢雲剣！」
その剣と鞘が交差して、霊気がほとばしる葉落を受け止めていた。
「くっ」
一度引いて、上段から葉落を振り下ろそうとした時。
舞の右腕に、白布が巻きついてきた。
「な、この」
動きを制限された舞は、葉落で白布を撫で斬りする。
それを真っ二つにする直前に、腕の骨がきしむほど締め上げられた。
「う、ま、だあ……っ」

痛みに負けまいと、舞は力む。
「忘れているの？　それ、もうひとつ握ってるんだよ」
「――っ！」
みぞれに指摘されて、舞は気がついた。
「天羽々斬！」
「あ、ぐうううっ」
白布は十握剣で舞の背中を斬りつけ、その長い鞘で腹と顎を殴り、彼女を鏡壁へと打ちつける。
「ぐ、うぅ……」
「その力は確かに脅威だ。けどね、真正面から挑まなければいいだけの話」
舞は葉落を手に、再び立ち上がる。
「まだ、やる気なんだ」
「あたしは、芳藍の仇を……あなたを、必ず討つ！」
近くで、誰かが大声を上げた。
「結界が、震動している」
舞はその隙を逃さず、霊気の刃でみぞれに斬りかかった。
「もう二度と、それはもらいたくない」
素早く後退したみぞれは、冷や汗をかきながら白布を手招きする。
「ちい」
「ふふっ。その刃はね、舞が大切に想う人に向けるべきだよ」
鏡が、割れる音がした。
それに気を取られて、舞はみぞれが離脱する好機を逃した。
「じゃあねえ」
「な、待ちなさい！」
白布に身を包み、青白い光を発して、みぞれは忽然と姿を消した。
その代わりに、舞の眼前には。
日照と、鬼と化した昭示が立っていた。

「しょおじぃいいいいいいいいいっ！」
日照が、泣き叫びながら昭示と取っ組み合う。
「いけない」
日照の腹部を見て、彼女が手負いだと知る舞。
「すぐにいくよ」
舞は日照の援護へ向かった。
「日照！」
「うぁあああああああっ！」
聞こえて、ない？
頭に血が上っているんだ。
「クッキェエエエエッ！」
昭示は舞に気づいて、彼女を鋭い眼光で射すくめる。
動きが止まった舞を見定めていた昭示は、日照によって背負い投げされた。
「よそ見すんなあああっ！」
「フグオアアァアッ！？」
日照は昭示の首根っこをつかみ、引き上げながらその脇に両腕を通す。
昭示を羽交い絞めにした日照は、舞を見て微笑んだ。
「舞。オレもろとも……昭示を討てえ！」
「えっ？」
舞は、何を言われたのか理解できなかった。
「グクァァアアッ！」
「は、早くしろ。オレじゃ、押さえているのがやっとなんだ！」
ようやく、舞は日照の思いを察した。
「迷うな！　あの雪女にいいようにされるぐらいなら、昭示は死んだほうがましだって思っているはずだ！　それに……それにぃ！芳藍を殺しちまった以上、昭示はもう……」
――それ以上は、言わないで。
手が震えて、舞は刀を落としそうになる。

葉落に帯びる霊気が、少しずつ弱まってきた。
「舞、そいつを前に突き出せ！」
「えっ？」
「それだけでいい。いいから、早く！」
言われるがままに、舞は刃先をふたりのほうへ向ける。
「なっ」
気づいた時にはもう――日照と昭示が、葉落に刺さっていた。
霊気を帯びた刀身は、ふたりの左胸を貫き、強い輝きを放つ。
「えっ、ちょっと。なんで」
「へ、へへ……っ」
日照は吐血しながらも、満足そうに笑っていた。
「ごめんな……」
「ひ、ひでり」
昭示が先に息絶え、それを見送った日照も――事切れた。
「い、いや」
葉落から手を離し、倒れるふたりを見て。
「いやぁあああああああああああああああああああああああああああああっっっ！」
舞は、絶叫した。

第九話

一方、鷹乃と光のふたりは――。
「光、止めろ！」
「いやだよお。だって、鷹乃と来世に結ばれたいもん」
信じられない速度で光は、鷹乃の持つ雪白天へ刻峰を打ち込んでいる。
「くっ。手の、感覚が……」
しびれだけでなく、吐き気もする。
鷹乃は命のいるほうへ後退し、光の挙動に目を凝らす。
「ふふっ」
不気味な笑みを浮かべて、光は刻峰を振り被った。
「鷹乃さん」
「命、とにかく離れているんだ」
光が刻峰を振り下ろして、気刃を放つ。
鷹乃はそれを雪白天で打ち払い、光へと踏み込んだ。
「ちぇっ。避ければ、命ちゃんに当たってたかもしれないのに」
「ひかりぃいいいっ！」
刀の峰で叩こうとしたら、光は刻峰を合わせてきた。
「どういうつもりだ。光……っ」
「ひかりはねぇ。鷹乃と来世に結ばれたいのお！」
鍔迫り合いをする、鷹乃と光。
その間に説得しようとする鷹乃だったが、光は恐ろしいことをしてくる。
「ひかりが鷹乃を殺すか、鷹乃がひかりを殺すか。どっちでもいいのっ。だから早く、それでひかりを愛してよおっ！」
空いた手で雪白天を強く握り、自傷行為に走っていた。
「なっ、何をするんだ！」
「ちぇ」

突き飛ばされて、不満そうな光。
「この傷は、鷹乃の愛の証。これで、ひかりは……あなたのものになれるんだ」
「光、お前はあの雪女にだまされている。目を覚ませえ！」
「あなたに愛されたという事実さえあればいいの。みぞれちゃんなんて、ひかりにとってはどうでもいいの」
手の平から滴る血を舌で舐め取り、光は妖しく微笑む。
雪白天を構える鷹乃の手は、震えていた。
「ひかりは鷹乃に愛された過去が欲しいの。そして鷹乃には、ひかりを愛した過去をあげたいの。それだけでいいんだよ」
「そんなの、愛じゃない！」
「それは鷹乃の価値観。ひかりはただ、ひかりが信じる愛情を分かち合いたいだけ」
「く、狂っている。光、お前は雪女に操られているだけだ！」
「それでもいいの。鷹乃がひかりを愛した事実さえ手に入れば、来世でもあなたは……きっとひかりを思い出してくれるから」
鷹乃が諦めかけた、その時だった。
「光ちゃん。鷹乃さんを苦しませちゃだめだよ！」
「……命ちゃん」
命が声を張り上げて、光を説得する。
「鷹乃さんを困らせて、苦しませて、光ちゃんはうれしいの？」
「邪魔だよ。お前」
鷹乃の傍にいる命をにらみつける光。
その神々しい瞳には、憎しみの炎が宿っていた。
「ひ、光ちゃん！　鷹乃さんを悲しませることが、本当の愛だとわたしは思えないよ」
「うるさい、だまれ」
「っ。光ちゃん、あなたがやっているのは一方的なの。愛情は、ふたりで育むものだよ。鷹乃さんが苦しむ時点でもうそれは愛じゃないし、憎しみしか呼ばないんだよ！」

「だから、なに？」
「えっ」
「いいこの振りして、鷹乃に気に入られようとして」
「そ、そんなつもりじゃ」
光に気おされて、命がたじろぐ。
「最低だよね。自分に嘘ついて、気持ちを押し殺して、一人前に愛を語ってるなんて笑っちゃうねえ！」
鷹乃はふたりの間に立ち、白銀の刃先を光へと向けた。
「そんなに、愛されたいのか」
「ようやく、そのつもりになった？」
その一言で、光は歓喜し、命は信じられないといった顔をする。
「勘違いするなよ。僕は、光の目を覚まさせてやる」
「これは夢じゃないよ。げーんーじーつぅ」
「だから、間違っても光を斬れないんじゃないか」
「だったら、ひかりが鷹乃を斬り刻んであげるよぉ」
鷹乃を困らせる言動は相変わらず。
しかし、ちゃめっ気はなかった。
「ふふっ。鷹乃、ひかりがあなたを誘(いざな)って――」
光が刻峰を両手で握り、正眼に構えた時。
唐突に、鏡壁が揺れ動いた。
「昭示、泣いているんだね。芳藍を手にかけて、愛を誓ったから」
光のひとり言に、鷹乃と命は頭が真っ白になった。
「な、なんだって？」
「ふふっ。さあ、今度は鷹乃とひかりが愛を誓う番だよ」
光が鷹乃へ踏み込もうとした時。
その後ろから、何者から斬りかかった。
「えっ」
光はその一撃を、刻峰の刀身で打ち払った。
「な、なにするんだよお！」
鷹乃はその姿を見て、目を白黒させる。

「いつまで鷹乃と遊んでいるんだい？　光」
長刀の髭龍を両手で振り回す、時充だった。
「うるさいなあっ！　いいところなんだ、邪魔するなよ」
ふたりのやりとりを目の当たりにし、鷹乃は平静を保てない。
命は呆然とする鷹乃に寄り添い、その袖を引っ張る。
「な、なんで……その長刀を」
それで冷静さを取り戻した鷹乃は、命を庇いながら時充に問いかける。
「時充さん！　ど、どうして今まで……」
「久しぶりだね。鷹乃」
「い、生きていた……のなら、なんで」
「何を勘違いしているんだい？　今のあたいは、あんたの敵だよ」
衝撃的な一言に、鷹乃はめまいがした。
「鷹乃さん！」
命の声で、鷹乃は事態を認識する。
「本気なのか、ふたりとも」
「えっへへ。邪魔するなよ、鷹乃はひかりのものなんだ」
「ふっ。だったら、死にな」
時充から発せられる、信じられない台詞。
鷹乃は歯を食い縛りながら、雪白天を両手で握り締めた。
「どうして、どうしてだ？　時充さん……」
「運命に逆らわないで。少なくとも、今だけは」
鷹乃が時充を見ていることが、光には面白くないようで。
「時充。鷹乃をひとり占めにするなよお！」
光は刻峰を振り被り、時充へと接近する。
刹那、ひとつの剣が……光の小さな身体を貫いた。
「やれやれ、下らぬ問答を続けるな。耳障りだぞ」
「衣凛。遅いよ」
飛び散る鮮血と肉片、衣服の切れ端。
光を害したのは、衣凛が持つ雷（いかずち）と風が渦巻く剣だった。

「ぐ、あ……」
それを引き抜いて、衣凛は次に鷹乃を見やる。
「い、りぃ……」
「黙れ。みぞれの傀儡(かいらい)に成り果てた小娘よ」
衣凛は光を蹴飛ばし、改めて鷹乃を見据えた。
「ぐ、うぅ……こ、のぉ」
「戦(いくさ)の中に愛だの来世だの、ふざけた話を持ち込むな。未来の話などしても、鬼が笑うだけだぞ」
「あんたがそれを言うかい」
時充は肩をすくめていた。
「光……」
鷹乃の呼びかけに、光は微かに笑ってみせた。
「ご、め……」
んね、と言う前に。
その瞳は、静かに閉じられてしまった。

鷹乃は、失意の中で声を絞り出した。
「命……今のうちに逃げてくれ」
「えっ。でも」
「あのふたりは、どうにか押さえる。だから、早く」
鷹乃が雪白天を構えたと同時に。
衣凛が何かを感じ取って、神木があるほうを向いた。
「くっ」
右手で胸をかきむしり、涙をこらえている。
時充もまた、目を閉じて皆に背を向けた。
「どう、したんだ」
「気にするな。ただの私情だ」
衣凛は首を左右に振り、決意を新たにした。
「おや」

時充のつぶやきに呼応するように、周りの鏡が砕け散った。
「ま、舞……？」
鷹乃と命は、見てしまった。
右腕を手で押さえている、舞。
ふたりの視線に気がついて、ゆっくりと舞は振り返った。
「あ、あたし……」
地面に突き立てられた葉落から、血が滴り落ちる。
その傍らには、日照と昭示が重なって倒れていた。
「ふたりを、やったのか……？」
「ち、ちが……っ」
潤んだ瞳で、舞は問いかけた鷹乃をじっと見つめていた。
もう、頬を伝う涙はない。
目を泣きはらした舞には、もはや戦意などなかった。
「許さんぞ」
「い、衣凛……？」
時充は、衣凛の迫力にたじろいだ。
「我が子を、昭示を……よくも」
その低い声に驚いたのではない。
全身から溢れる殺気が、目視できるほどに白く発光していたからだ。
「ひっ」
舞は衣凛の目を見て、おびえている。
衣凛は感情に任せて、舞へと斬りかかった。
「きゃあっ！？」
舞は帯から鞘を抜いて、衣凛の持つ剣を受け止める。
「どうした。覇気が感じられんぞ……刀を握れぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！」
衣凛の叫びに応えるように、舞は後退しながら葉落を左手で引き抜いた。
その表情にはまだ、迷いが残されている。

「おねえちゃん！」
命の呼びかけに、舞は我に返った。
「いいぞ。だが、まだ欠けているようだな。もっと私を楽しませろ。つきしろまいぃいいいいいいいいいいっっっっ！」
激昂（げっこう）する衣凛に押され、舞は鍔迫り合いを避けて打ち合う。
「さて、あたいらもおっぱじめようじゃないか。鷹乃」
憂鬱な顔つきで、時充は鷹乃と命を見つめている。
「ほ、本気なのか……時充さん！」
「許してちょうだい。あなた達は今の時代にいてはいけない」
「か、勝手なことを！」
雪白天で斬りかかる鷹乃を、時充は長刀の柄――髭龍の鞘で受けた。
「どうして、どうしてぇえええっ！？」
「感情に任せて戦うなど、愚の骨頂！」
左肘を膝蹴りされ、鷹乃はすぐさま後退する。
鷹乃は雪白天を握り直して、正面に立つ時充をにらんだ。
「みぞれからもらった右腕への一撃、かい？」
「……」
「鷹乃、あんたは右利きだったろう？　この七年間。必死に鍛練して、左利きに矯正（きょうせい）したのかい」
「だから、なんだ」
全身から発気した鷹乃は、雪白天を振り払って気刃を放つ。
「ふんっ」
髭龍の鞘でそれを弾き飛ばし、時充は鷹乃へと突撃する。
「く。命、早く逃げろお！」
切っ先を地面に打ち落とし、鷹乃は時充と至近距離で打ち合う。
長刀の柄を腕や胴体に密着させながら遠心力で振り回し、踊るように足踏みする時充。
その華麗な動きは、近距離は不利という長刀の特性を……完全に覆している。

翻弄(ほんろう)される鷹乃は、時充を捉えることができない。
「お、おねえちゃん。鷹乃さん……」
ふたりを放っておけず、命はおろおろしている。
「ぐう。みことおおっ！」
鷹乃を力で押しのけ、時充は命へと迫る。
「――死ね」
低く冷たい声を放ってすぐ、時充は髭龍を振り下ろした。
「ちいっ」
「く、うぅ……！」
割り込まれて、時充は舌打ちする。
青い刃は、舞の右腕を斬り落としていた。
「お、おねえ……」
斬撃の軌道はそれていたが、命の右手に刃先がかすっていた。
「い、いた」
命は恐怖のあまり、尻もちをついてしまう。
「衣凛、何をやっているの！？」
「っ」
時充の叫びと同時に、舞は後退してそれを避けた。
上からの跳び斬りは空振りするも、衣凛が着地した周囲に雷(いかずち)と風が走る。
「素早さは以前より増している。が、肘から先を失って……もはや、剣技は期待できんな」
嘆息して衣凛は、その剣を鞘に収めた。
「な、何をしているんだい」
「舞が隻腕では、楽しめない」
「あ、あたいのせいだって言いたいのかい」
口論している時充と衣凛。
鷹乃は舞と命の前に立ち、雪白天を正眼に構える。
「だいじょうぶか。舞」
「た、鷹乃……」

赤い炎と黒煙が勢いを増して、社を包み込んでいる。
境内の中はもう、炎熱地獄だった。
汗と血が滴り落ち、呼吸は乱れ、体力も奪われてゆく。
その中にあっても、時充と衣凛は汗もかかず、息が荒れていなかった。
「っ、鷹乃。命を連れて、ここから逃げて」
「……」
「お、おねえちゃん？」
舞は、腹を括った。
不敵に笑う舞は、残った霊気を葉落へと注ぎ込む。
「おや」
「む」
時充と衣凛は、舞の様子に気がついた。
「と、時充さん。衣凛、さん。あたしは……もう、迷わない」
息も絶え絶えながら、舞はふたりに立ち向かおうとする。
「舞。お前ひとりだけに無茶はさせない」
鷹乃もまた、時充と衣凛に意識を集中させる。
それがよくなかった。
「あ、……ぐうっ」
命の背後から現れたみぞれが――正宗で、その左胸を貫いていた。
「え？」
「っ……！」
ふたりはすっかり忘れていた。みぞれの存在を。
「さようなら。命」
「ぁ……」
後ろを振り返った鷹乃と舞の目前で――。
命は、事切れた。

命を抱き留める鷹乃。

「うぅ……あぁぁぁあああああああああっ！」
絶叫し、雪白天を地面に落とす。
みぞれは鷹乃に目もくれず、音も立てず後ずさり。
正宗に付着した血液を振り払って、舞を注視している。
「っっっ」
唇を噛み切り、その目に憎悪の炎を燃やす舞。
すでに葉落の刀身には、刃こぼれを起こすほどの霊気が注ぎ込まれていた。
「へえ。まだ、そんな力があるんだ」
「……」
静かな怒り。
それは鷹乃、時充、衣凛の呼吸を止めるほどの殺気だった。
唯一、みぞれだけは……息を乱す程度で済んでいる。
「……」
高密度に圧縮された霊気は、葉落の刀身に亀裂を走らせる。
限界を超えた力を振りかざす舞は、無音の踏み込みでみぞれを斬り捨てた。
「な、ぐ……あぁ」
噴き出る血液。
地面に落ちる正宗。二本の業物。
上を飛んでいた白布は、ひらひらと倒れるみぞれに覆い被さった。
「はあ、はあ、はあ……」
舞は霊気の放出を止めて、振り返る。
おぼつかない足取りで、舞は鷹乃が抱える命の下へと向かう。
「ま、舞」
「ぐ、うぅ……許さない」
足を止めて、舞は時充と衣凛をにらんだ。
鷹乃の横を、誰かが通り過ぎる。
「――う、ぐぁあああっ」
舞の正面に、ひとりの少女が立っている。

その左胸に煌(きら)めく刀身を突き刺しているのは――光だった。
「ひ、か……っ」
舞はその刀身をつかみ、眼前にいるのが誰なのかを知る。
「み、ぞれ……ぇっ」
その手を離し、命へと伸ばすが……届くことはなかった。
「ありがとう。舞」
刻峰を引き抜き、みぞれは舞を足下に倒した。
「ど、どういうことだ」
「変わり身の術、ね」
時充のつぶやきに、鷹乃は振り返る。
舞が怒りに任せて斬り倒したのは、光で。
衣凛が剣で貫いていたのは、みぞれだった。
「なんで、なんで……っ」
鷹乃は命を横たえて、雪白天を握って立ち上がる。
「ほう？　まだやる気があるのか」
衣凛が鷹乃と相対して、再び剣を――ではなく、羽翼を抜刀した。
「ふふっ。鷹乃。残るは君だけだよ」
背後から告げられる事実に、鷹乃は心が折れそうになる。
衣凛はふたりを一瞥し、前もってこう告げた。
「みぞれ、時充。邪魔立てはするなよ」
「……」
時充は目線をそらし、ふたりから離れた。
「……」
みぞれは無言のまま刻峰を収めて、白布に三本の業物を拾わせた。
それを自分の周囲に浮かせて、燃え盛る火炎を眺めている。
「覇気が感じられんな。どうした、雪天鷹乃」
「うるせぇよ」
「ん？　ふ。口答えする余力はあるか」
鷹乃は雪白天を両手で持ち、衣凛へと踏み込む。
「いいぞ。さあ、私を楽しませろ」

衣凛と鍔迫り合いになり、鷹乃は涙ながらに感情をぶちまけた。
「どうして……どうして、こんなことをするんだよぉおおおおおおっっ！」
「……」
「何もかも全部奪って、それが楽しいのかぁあああああっ！」
「ぬっ」
衣凛を力で押しのけ、鷹乃は彼女の腹に撫で斬りを浴びせる。
「ぐっ。や、やるじゃないか。そうでなければ」
衣凛は後ろへ跳びながら右手を峰に添えて、刀身に集中させた気を放つ。
「当たるかよ！」
鷹乃は横に移動してそれをかわし、再び鍔迫り合いに持ち込んだ。
「もっと、もっとだ。私を感じさせてくれ」
「楽しむための戦（いくさ）なのか。奪われるほうの痛みなんて、理解しようともしないのか！」
「私とて、奪われたのだ」
「昭示を殺すよう仕組んだのは、みぞれじゃないか！　何もかも全て、他人に押しつけるんじゃねぇよ！　そうやって事実から目を背けて、みぞれに屈したままでいいのか！」
「だまれえぇえええええええええっ！」
力で圧倒され、鷹乃は後ろへ転げそうになる。
「貴様に何が解ると言うのだあ！」
気刃を撃ち出す衣凛。
体勢を崩していた鷹乃は、とっさに鞘で合わせた。
「ぐ、うわっ！」
鞘は弾き飛ばされるも、直撃はどうにかまぬがれた。
「私はみぞれに救われた。その恩義を返すためならば、我が子の生命など……考慮している場合ではないのだ」
「それは、絶対に嘘だ」
咳き込んでから、鷹乃はゆっくりと立ち上がる。

「昭示を失って、泣いてただろう。その時の気持ちに嘘をついて、後悔しないって言えるのかよ！」
「……くどいぞ」
「だったら、さっさと殺せばいいだろう。おしゃべりしている暇なんて、あるのかよ」
息苦しくて、めまいがする。
集中力が切れて、鷹乃は雪白天を地面に突き立てた。
「……苦しそうだな」
「これだけの熱気と、煙に囲まれていたら……自然と、そうなるさ」
「ならば、すぐに楽にしてやろう」
衣凛は羽翼に風を渦巻かせ、大きく振り被った。
――あれは。
遠くの神木が鷹乃の目に入った。
――あの傷跡は？
それに、少し傾いているような気がする。
「そうか」
――あの馬鹿力は、日照しかいないな。
「どうした。血迷ったのか」
首を振って、鷹乃は雪白天を引き抜き。
その峰に右手を添えて、刀身に気を圧縮させる。
「む？　ふっ、私の真似をするか」
「衣凛、覚悟しろ！」
鷹乃は衣凛へと、高密度の気刃を撃ち出した。
「むん」
それは衣凛の羽翼によって、打ち払われてしまう。
「即興で技を使うなど、付け焼き刃だぞ」
「次は、全力でいくぞ！」
先刻より強く気を集め、鷹乃は再び衣凛へと気刃を放った。
しかしそれは、衣凛の横を通り過ぎる。
「だから言っただろう。真似事はよせえ！」

鷹乃は衣凛と鍔迫り合いをして、全身から発気した。
「いいぞ。この窮地に、力が目覚め出しているようだな」
衣凛も発気して応える。
「ん？」
ふたりを照らす月明かりが、急に途絶えた。
「な、それが――」
狙いだったのかと、時充が口走る前に。
鷹乃はそれに気づいた衣凛を、羽交い絞めにしていた。
「な、なにいっ！？」
「さあ、一緒に逝こう」
雪白天を投げ捨て、鷹乃は衣凛とともに――倒れてくる神木を待った。
衣凛は抵抗を試みるが、鷹乃は意地でも離さない。
ふたりの眼前に、神木が迫る――直前に。
「やれやれ」
神木は、真っ二つに割れてしまった。
みぞれと白布が放つ剣閃が、一刀両断にしたのだ。
「そ、そんな」
神木の破片が細かく飛び散り、それは火の粉となって、辺り一面に降り注ぐ。
それをきっかけに、境内のほとんどが炎に包まれた。
「ごめん。衣凛、介入されたくはなかったでしょう？」
「いや、気にするな」
鷹乃を突き倒して、衣凛は羽翼の先端をその額に突きつける。
「く、ちくしょ……」
「私は私の意思で生きている。とやかく言われる筋合いはない。ただ、鷹乃。お前の言う事には一理ある」
「何が、だよ」
「私は母親失格だ。もはや、昭示の母と呼べるような誇りもない。ただ、ひとつ悔いねばならないのは……私はあの子に、一度も親ら

しきことをしてやれなかった」
大きく溜息をついた後、衣凛は羽翼を鞘に収めた。
「どういうつもりだ」
「場所を変えるぞ」
それから衣凛は鷹乃を片腕で背負う。
「う、うわっ。は、はなせよ」
「暴れるな。息苦しいのは私も同じだ。行くぞ」
みぞれと時充を置いて、衣凛は高く跳躍した。

「ふうっ」
衣凛と鷹乃は、雪峰近くにある河川の傍らで休息していた。
辺りには粉雪が降り、先程までの環境と違い、冷えきっている。
身体を震わせながら屈んで、鷹乃は川の水を口に含んだ。
「どうした？」
それで喉を潤した後、鷹乃は立ち上がって衣凛を振り返る。
「と、鳥でもないのに……あんなに跳ばないでくれ」
「高いところは苦手か」
腕を組んで、衣凛が微笑みかける。
「あ、当たり前だ。あんなの、人生で初めての経験だ」
「私は何度もやっているんだがな」
肩をすくめて、衣凛は自嘲的（じちょうてき）に笑う。
鷹乃も腕を組んで、同じことをする。
「守るものを失って、僕はもう生きる理由がない。無力で、なんてちっぽけな存在なんだと痛感しているよ」
「もう、戦意はないのか？」
「……」
うつむいて、鷹乃は唇を噛み締めた。
大粒の涙をこぼし、静かに……両手で顔を覆い隠した。
「その気があるなら、応えよう。なくても、安らかに眠らせるまで。

まだあのふたりは社にいるようだが……回収しているんだろうな」
「何を……？」
顔を上げる鷹乃。
おもむろに包帯を外す衣凛。
鷹乃はその左目を見て、愕然とした。
「何か言いたそうだな」
それに見つめられて鷹乃は恐怖心を抱いたが、今は好奇心のほうが勝っていた。
「……衣凛。どうして僕を、ここに連れてきた」
落ち着いて見ると、衣凛って小柄だな。
鷹乃は川の水を飲んでいる衣凛を見て、そう感じていた。
「私はただ、全力を出せないでいる相手を倒しても嬉しくはない。休息を取るのもあるが、みぞれに邪魔されて興ざめしたのもある」
白い吐息をもらして、鷹乃は衣凛に訊ねた。
「僕は……いや。僕らは時充さんを探していたんだ」
「それは知っている」
「幕府が紙をまいているのを知って、僕らにもあらぬ嫌疑がかけられそうになってね。生きていると信じて、誰にも情報を求めずに歩き回ったよ。そして、雪峰にいるんじゃないかと思って、どうやったら吹雪を突破できるのか摸索してた」
「ふっ。意外と簡単にここに来れたし、事実を知って落胆しているのか」
「……」
時充は、皆を裏切った。
それには何か、理由があるはずだ。
鷹乃は、衣凛を真正面から見据える。
「時充さんと衣凛は、どうしてみぞれに従う？　脅されているんじゃないのか」
「……」
しばらく、沈黙が続いた。

「みぞれには、未来が見えている」
「それは、知ってるさ」
「そしてそれを、私と時充に見せることもできる」
「……え？」
「まあ、それには条件があるんだがな……おっと」
余計なことを口走りそうになった衣凛は、みぞれと時充がやってきたことに安堵する。
「……話し込んでたみたいだね」
時充は皆が使っていた刀を脇に抱えて、みぞれは無言のまま近くに降り立った。
「それは……」
「ほら」
時充は鷹乃の前に雪白天を投じ、砂利の上に突き立てた。
鷹乃はそれをおずおずと引き抜き、鞘に収める。
「ん？」
鷹乃は逡巡するも、みぞれへと歩み寄る。
「恨みを晴らしたいのかい？」
白布を背にしているみぞれは、身構えずに鷹乃の接近を許した。
「いや、ひとつ質問があるんだ」
意外そうな顔をして、みぞれは何度も瞬きをする。
「んっ。どうぞ」
「みぞれはどうして、七年前に僕を殺そうとしたんだ？」
きょとんとなるみぞれ。
質問の意味を理解して、伏し目がちにこう答えた。
「……似ているから」
「似ている？　誰に」
「……すさのおに」
みぞれは頬を染めて、そっぽ向いた。
その仕草を見て、鷹乃は柄から手を離す。
「恋を、してたのか？」

「そうだね」
早口で肯定するみぞれ。
「後先考えずに突っ走る暴れん坊だけど……正義感が強くて、みぞれが放った八俣大蛇（やまたのおろち）でさえも簡単に叩き潰してさ……」
「何を、言ってるんだ？」
「ふっ。だいじょうぶだよ。次に鷹乃が生まれる来世では、それらもより詳しく知れるようになっているから」
「……未来の話をされても」
衣凛が小声で「鬼が笑うだけだ」とつぶやいていた。
「時充さん」
「んや？」
「皆が死んで、何とも思わないのか？」
「……。本心を言えば、泣きそうだよ」
「だったらなんで」
「言ったろ。今の時代に、あなた達はいてはいけない……と」
ふと、みぞれが白布を引き連れて雪峰のほうへと向かう。
「……衣凛。鷹乃をお願い」
「そのほうがいい。情に突き動かされ、こちらを邪魔立てしたのだからな」
「……」
何も答えず、みぞれは吹雪の中に姿を消した。
「やれやれ、図星か」
時充もまた、雪峰のほうへと歩き出していた。
「この場は、私に一任するのか」
「好きにしなよ。みぞれもあたいも、戦意なんて欠片もない」
「言ってくれる。私も、心が折れそうなんだが……」
「はっ。随分と弱気だねえ。それでも、鬼かい？」
それ以上は口にせず、時充は刀を片手に跳躍した。
冷たい風が、ふたりの間を駆け抜ける。
「さて、衣凛」

「なんだ？」
「決着を、つけるんだろう？」
衣凛は無言でうなづいた。
「僕は、その真実を皆の下へ持ち帰るよ」
「しん、じつ？」
鷹乃の言葉に、衣凛は小首を傾げる。
「三人はさ。誰よりも、僕らを想ってくれたんだろう？」
「憎しみを、抱いてはいないのか」
「あるさ。けどそれ以上に、話していて解った。無慈悲に、僕らと接していたのではないと」
無言で衣凛は、静かに羽翼を引き抜いた。
「そっちは抜かないのか？」
「……。祖父の次は、祖母の力を見せよう」
「なに？」
衣凛は羽翼を左手に握り締め、その刀身に風――に加えて、水を渦巻かせていた。
「そ、それは……」
「私の祖父は雷（いかずち）。私の祖母は水。私自身は風。風の性質が強固だが、別に前ふたつが使えないわけではない。ただ、両方を同時に使うとな……反応が強すぎるのさ」
水は含有する不純物で電気を通す。
しかし、衣凛の扱うのは純水。
雷電は、流れ込めない。
「へえ。面白そうだね」
「ほう？　ひとりとなっても、戦（いくさ）を楽しむ気概（きがい）はあるのか」
「どうせ後がないんだ。なら、全力でやるまでだろう？」
静かに、鷹乃も雪白天を引き抜いた。
衣凛は鷹乃の笑みを見て、堕神（おちがみ）――ではなく、同じ鬼の血を引く者なんだなと再認識した。

気が集中する刀身と、風と水が渦巻く刀身。
ふたつがぶつかり、粉雪が吹き飛ぶ。
「く、ぅぅぅう」
最初から鍔迫り合いになったことを、鷹乃は後悔した。
力で劣るわけではない。
受けた瞬間に襲いかかる風と水は、相まって鷹乃を押しのけようとする。
「どうした」
水は針のように細く、風は刃のように鋭く。
至近距離から放たれる攻撃は、鷹乃の頬をかすめて血を吹き出させる。
「っ」
救いなのは、雪白天に帯びた気だ。
それが水と風に触れることで、威力を半減させていた。
「判断はいい。だが」
すかさず後退した鷹乃を、衣凛は羽翼を振って気刃で狙い撃つ。
「この」
雪白天で打ち払った鷹乃は、息を乱しながら発気を行う。
「まだ、余力があるのか」
「はぁあああああああああああっ！」
全身から白い気を発して、鷹乃はそれを雪白天に集中させる。
そこを逃さず衣凛は気刃とかまいたちを放つが、鷹乃は最小限に動くだけでそれを潜り抜けた。
「衣凛」
「なんだ？」
「あなたの行動は……気を用いる事によって風や水を巻き込み、利用している」
「だからなんだ」
「ここでは、軌道が読みやすい」

舞い落ちる粉雪。
それが動くことで、いつ攻撃が来るか予測できる。
「なるほど」
気や水は目視できるが、風はそうはいかない。
衣凛の風は気によって動きを得ているが、それは決して気による刃ではない。
気によって研ぎ澄まされた、風の刃なのだ。
大気を小範囲でかつ高速で振り回すことで精練し、解き放つかまいたちという名の凶刃。
その初動は気を目視できれば把握できるが、風自体は気ではない――正確に言えば空気であるが、この場合は違う――ため、見えないものなのだ。
投げ放たれた風を見るなど、肉眼には不可能極まりない。
ただし、粉雪のような大気中を漂う物体があれば……軌道を読むことはできる。
「その変化があるから、早く対応できるのさ」
「だが、軌道は読めても範囲はどうかな？」
「えっ」
衣凛は自身を中心に、風を渦巻かせた。
今度ばかりは、刀身だけではない。
その竜巻は次第に速度を増し、砂利を巻き上げ、砂塵と化してゆく。
「な、まさか」
「これでも、まだ回避は容易だと言えるかな」
鷹乃は右手で鞘を引き抜いた瞬間。
全方位に風が解き放たれた。
身体を横向きにし、右腕と鞘で防いだことにより、急所への直撃はまぬがれる。
しかし、それでもかまいたちと砂の弾丸は鷹乃に深手を負わせた。
「ぐ、ぐうぅっ」

上半身は腕と鞘により守られたが、下肢からは大量の血が溢れ出ている。
「まだ、立っていられるのか……？」
衣凛は驚きを隠せなかった。
先刻の攻撃は、回避できるはずがない。
発気しているとはいえ、かまいたちと砂を高速で撃ち出したあの攻撃は……鷹乃に致命傷を与えていたはずだ。
――本能、か？
衣凛は恐怖した。
鷹乃は頭と胸部を腕と鞘で守り、右半身を犠牲にする代わりに、生存した。
今現在、鷹乃の右腕は鞘を落として、力なく垂れている。
「はあ、はあ、はあ……や、やるじゃないか」
手負いであるにも関わらず、鷹乃は微笑んでいる。
――本当に、この戦（いくさ）を楽しんでいるだと？
眼前にいる少女が、もしかしたら。
自分を超越する鬼なのかもしれない。
そう認識してしまった衣凛は、武者震いを禁じることができなかった。
「ど、どうしたんだ？　さっきの、よっぽど自信があったんだな」
「く、くくくっ。いいぞ。七年前に相対した舞よりも、昂揚が抑えられない」
「何を、言ってるんだ……？」
それに鷹乃は、逆眼（げきがん）に凝視されていても身がすくまない。
逆眼は、視界内の生物の精神状態を乱す作用がある。
そのほとんどが、恐怖。死による恐怖をすり込むもの。
生きとし生ける者全てが持ちうる、本能による死の恐怖だ。
衣凛は今に至るまで、逆眼を使っているという意識はなかった。
鷹乃に恐怖したことで初めて、衣凛は左目を外気にさらしていると気がついた。

「ふふっ。私としたことが……頭をやられていたのかもしれないな」
「へっ。どうしたんだ？　そんなの、僕だって……熱くてぼうっとしてたんだ」
違う受け取られ方をしたが、衣凛はあえて答えることはしなかった。
そんなことをする時間すらも惜しい。
恐怖を凌駕（りょうが）する、相手への好奇。
鷹乃と衣凛の心は、それに彩られていた。
「面白い。面白いぞ、雪天鷹乃おっ！」
「ああ。衣凛……衣凛は強いな。時充さんも……そして、みぞれも」
鷹乃の意識が他者に向いたことが、衣凛は許せなかった。
嫉妬、している。
「くくくっ。今お前の前にいるのは、この私だああっ！　気などそらすなよ。もっと、もっと私を感じさせろ」
「ああ。僕も……衣凛、あなたと遊びたい」
ふたりは気が狂ったわけではない。
純粋にこの戦（いくさ）を、楽しんでいた。
生きるか死ぬかではなく、つまらないか面白いかにこだわっている。
「ぐ、う」
「どうした？」
「へへっ。さっきので、ちょっと意識が……だから、次で最後だ」
衣凛は激しく後悔した。
先刻の技によって、楽しめる時間が限られてしまったことに。
鷹乃が受けた痛手が深刻だと知り、衣凛はその提案を受け入れた。
「全力で応えよう。鷹乃」
衣凛は布津御魂剣を引き抜き、右手に握り締めた。
「二刀流……？　すっごいな。最初から、そうしてくれればよかったのに」
「済まないな。だが、次の一撃で全てを決しよう。それで、合図は

どうする？」
「ひぃ、ふぅ、みぃで」
「承知した」
衣凛は後ずさり、鷹乃から間合いを取った。
鷹乃は残された気を全て雪白天に注ぎ込む。
それを傍観している衣凛は、それが限界に到達するのを待った。
「律儀だな。衣凛は」
「ふっ。その台詞、鷹乃にも返すぞ」
衣凛もまた、右に雷電を、左に純水を、両方に旋風を発生させた。
たがいに深呼吸をし、鷹乃が先に。
「ひぃ」
次は一緒に。
「ふぅ」
そして――。
「みぃ！」
ふたりの姿が、交差した。

……静寂。
河川の流れる音が響き、吹雪まじりの風が近くの樹木の葉をそよぐ。
先に倒れたのは――衣凛だった。
「ぐ、ぅぅぅ……」
右腹部に、深い裂傷を負っている。
付近の砂利は真っ赤に染まっており、うつぶせで抗う衣凛は……
立ち上がろうとするが、何度も転んでいた。
「ほ、本能……だと」
衣凛はこの時、真の意味で鷹乃に恐怖した。
左半身しか使えない状態で、身動きがほとんどできない。
はずなのに、鷹乃は衣凛の攻撃全てを――必要最低限の動きでか

わしていた。
けして当たらなかったわけではない。
かまいたちによって、鷹乃の全身は引き裂かれている。
「はぁ、はぁ……」
鷹乃は使えなくなった右腕を、衣凛の斬撃に合わせて押さえていた。
ふたつの刃が胴体に到達する前に、衣凛をすれ違い様に斬り捨てる時間を――それで、稼いだのだ。
「へへっ」
鷹乃の右腕は、切断されて砂利の上に落ちていた。
「衣凛。だいじょうぶか……？」
その言葉が、最期となった。
鷹乃は、振り返ろうとした途中で――息絶え、砂利の上に倒れ込んだ。

終幕

「……どうしたんだい。衣凛」
倒れている衣凛の傍に、時充がやってきた。
「かなりの深手みたいだね。じっとしてな」
屈んで衣凛の腹部に、淡い光を当てる時充。
「ふ、ふふ」
「んや？　気でも狂ったのかい」
「私の、完敗だ」
時充はその一言に、思わず処置を止めてしまう。
それが何を意味するかを聞く前に、治療を再開した。
「鷹乃は……狙ってやったのか？　いいや、おそらく……無意識のうちに、本能であいつは戦っていた。だとしても」
「あんまりしゃべるんじゃないよ。出血が酷いんだから」
衣凛は戦(いくさ)の興奮から、覚めることができないでいた。
「……。私の最大の一撃を、使い物にならなくなった右腕で押さえ込むとはな」
時充は溜息をつきながら、衣凛のおしゃべりを耳にしていた。
「何があったんだい。それだけを簡潔に言ってちょうだい」
「……。鷹乃は、雪白天の刀身で……私の逆眼を、鏡のように映したんだ」
その一言に、時充はわずかな間だが硬直していた。
衣凛の逆眼が時充を捉えた、のではない。
「刀を、意図的に？」
「ああ。間違いない。鷹乃は無意識のうちに、何をどうすれば敵を討てるのか理解している。――本能的にな」
そんな馬鹿な。
時充は、そう思おうとした。
しかし、時充は知っている。

衣凛の言うことが、あながち間違いではないことを。
「……。心当たりはあるよ」
鷹乃と共闘したあの夜。
時充は、そのことを振り返っていた。
「当たり前だよ」
鷹乃の亡骸の傍に、みぞれが降り立った。
「すさのおの孫である鷹乃と日照は、その血肉こそが戦(いくさ)の申し子である証」
「鬼子(おにご)……の間違いではないのか」
衣凛のつぶやきに、みぞれは微笑むことで応えた。
内心は、鷹乃の死によって乱れ狂っていたが……。
「時充は衣凛をお願い。みぞれは、鷹乃を連れてゆく」
その亡骸を背負い、みぞれは空高く跳んだ。
「やれやれ、雪白天も修繕が必要だね」
時充は衣凛の止血を終えて、おもむろに立ち上がる。
ゆっくりとそこに歩み寄り、刀と鞘を回収した。
「済まないな。時充」
「あんまり無理しないほうがいいよ。傷口が開く」
「七年前のような無茶はせんさ」
「減らず口だけは、いっちょ前だねぇ」
時充は衣凛に肩を貸して、徒歩で雪峰へと向かうことにした。

雪峰にある、洞穴。
正宗の墓標と呼ばれていた場所で、みぞれは食事をしていた。
「遅かったね」
みぞれは敷いた白布に腰を下ろして、おにぎりを食べていた。
「あんた、それどこで手に入れたの？」
呆れて問いかける時充。

衣凛は左目を閉じながら、時充から離れて腰を下ろした。
「いる？」
「もらえるのなら、ちょうだいしよう」
先に答えたのは、衣凛だった。
「しょうがないね」
「はい」
時充は肩をすくめた後、みぞれからおにぎりをふたつ受け取り、それを衣凛に渡すために足を動かす。
それからひとつを頬張り、長々と咀嚼（そしゃく）する。
「具は鮭か」
衣凛はそれを半分食べて、器用にも手の平から水を生み出した。
それで喉を潤し、再び食事を再開する。
「くらおかみの術を、もう制御しているんだね」
「七年もあれば、水遁ぐらいは体得できよう」
「あはは……」
衣凛は目の前にいる師をあおぎ見た。
「んや。みぞれ」
「……なんだい」
「鷹乃は、もう」
「……。送り出したよ。皆も、ね」
時充は感慨（かんがい）に耽（ふけ）っていた。
「刀の修繕を終えたら、あたいはすぐにでも逝くよ」
「……。解った」
みぞれはそれ以上は聞かず、衣凛を見やる。
「私は、残らせてもらおう。逝くよりも先に、やらねばならんことが増えた」
「修行、かい」
「当たりだ」
時充の問いかけに、衣凛は微笑んで応える。
洞穴の奥のほうを振り返ったみぞれは、大きな溜息をついた。

「黄泉に送り出した後は、記憶を濾過(ろか)して、転生させるだけだね」
みぞれのひとり言に、ふたりは口を挟まなかった。
食事を終えて、ただじっと待ち続ける。
誰も声を発しないまま、洞穴に朝日が差し込んだ。
「ひとりぼっちは、嫌なのかい？」
質問をしたのは、時充だ。
みぞれは逆光に照らされる時充を半目で見て、伏し目がちに答えた。
「嫌だよ。黄泉は居心地がよくないもん。あんな気持ち悪いところにいたら、この世界にいるもの全てが美しく新鮮に感じられる」
まぶしさに負けて、みぞれは再び後ろを振り返った。
「みぞれ、ふたつほどいいか」
今度は衣凛が、みぞれに話しかけた。
「なんだい？」
振り返らずに、みぞれはその先を促した。
「社にいた皆は、倭神(わしん)の血を引く者達だろう。何故(なにゆえ)に、滅ぼす必要があった？　私達のように生かしておけば、よかったのではないか？」
時充も、それにはうなづいていた。
「雪天姉妹はすさのおの孫に当たる。月白姉妹はいなりの孫で、芳藍はつくよみの娘となる。光は……あまてらすの隠し子だったんだよ。時が来るまでその霊魂は、みぞれが黄泉にて冷凍保存しておいたの。で、衣凛はみかづちとくらおかみを祖とする」
衣凛は腕を組んで、右目も閉じた。
今度は時充が口を開く――前に、みぞれがこう補足する。
「すさのおは、すでに櫛名田比売命(くしなだひめのみこと)と結婚して、子供も授かっていたからね」
「流翠は……無事に逝かせたんだろうね？」
「……。うん」
間のある返事に、時充は疑いを持った。

「だいじょうぶ。流翠は、ちゃんと送り出した。ただ」
「ただ？」
「霊魂に触れて、解ったんだ。流翠にも……その資格はあると」
衣凛と時充は、みぞれの一言に首を傾げていた。
「みぞれ、あたいらはあんたにぼんやりとした未来の映像は見させられた。黄泉でね。それ以外に色々と聞きたいのさ。衣凛もまだ、ひとつの問いを残しているしね」
みぞれは壁に背をつけて、横目でふたりを見やる。
「で、衣凛。もうひとつはなに？」
「……。みぞれ、あの社に皆を意図的に集めたのか？　お前に命じられて私は、舞と命を導いた覚えがあるしな」
「うん。未来を見通して、あの社で絆を紡ぐように策したのは事実だよ」
肩をすくめて、時充は次に溜息をついた。
「あたいだけ、純粋な人間なのね」
「そんなわけないよ」
あっさりと否定され、時充は目を白黒させた。
「あ、あたいが……何の血を引くって言うんだい？」
「いなり、の親戚だね。流翠も時充も、その系統の血を引いている。化け狐の一族は、色々とご多感のようで」
その事実に、時充は笑うしかできなかった。
「数百年後。彼女らと再び出逢えるのが……待ち遠しいよ」
「みぞれさ。さっきあんたは……資格、と言ったね」
「うん」
みぞれは時充のほうを振り返った。
吹雪が強くなったせいか、逆光は弱く感じられる。
「それは一体、何のことだい？」
「“冥界の巫女”となるための、素質だよ」
ちらりと、みぞれは衣凛を見やる。
「衣凛はその資格がある。時充も、流翠も、あの社にいた皆も」

「じゃあなんで、社の皆を逝かせたの？　何度も質問して、嫌そうな顔をしているけどさ」
「違うよ。鷹乃が無事に逝けたのか。確かめてないから……」
うつむくみぞれを見て、時充は調子が狂う。
「だったら、この問答を終わらせるためにさっさと説明して」
「……。解った」
一度咳払いして、みぞれはふたりに説き明かした。
「黄泉という世界は、生前の記憶を濾過（ろか）して、転生させる場所なんだ。“冥界の巫女”とは……その記憶に触れることで、力や技を体得できる者のことを言うんだよ。現にみぞれは……日照に圧倒されたあの日に、倭神全員の記憶に触れることを覚悟した」
鮮明に、その時の状況を思い出す時充。
その言葉が間違いではないと、衣凛は時充の反応を見て確信した。
「みぞれが皆の霊魂を黄泉へと送り出したのは、その記憶を濾過（ろか）するためだ。社にいた皆の能力は、昭示もそうだけどね……記憶として残したかった。倭神の力を受け継ぐ異能は、残さなければならない。ひとつよりもふたつあるほうが、その異能はより色濃く、密度を増すからね。いずれそれは、未来で戦うために必要となる。時充の打った、その刀もね」
曇りのない瞳と言葉に、時充と衣凛は感嘆としていた。
「だったら、私も逝くべきなのか？」
「衣凛は残って。少なからず、あなたの力を借りたい。ううん。傍にいて？　みぞれは、ひとりじゃ……数百年も、ひとりぼっちに耐えられない」
子供じみたお願いに、衣凛はうなづいて応えるしかできなかった。
「みぞれ、あんたは……“冥界の巫女”と言ったね？　それは、女性でないと無理なのかい？」
「無理だね。女性はお腹に霊魂を、生命（いのち）を宿すことができる。その肉体は機能的に、霊的干渉に適している。男性でも一部にはそうした者はいるけど……記憶に触れさせることで、狂乱する可能性も否

めない。それに女性は、男性より痛みに対して鈍感だという点がある。そこが、特に重要となるの」
「鈍感って……」
「子供を産む時の苦しみは、死に等しいと口々に言うからね。でも、記憶に触れることは精神の苦痛。肉体の苦痛ではないけど……女性は男性より、心が柔軟にできている。それが一番大事なんだ」
それで終わりだと、みぞれはふたりに背を向けた。
「みぞれは、黄泉に一度帰るね。ふたりは、ここに残ってて」
暗闇の先へと歩き出したみぞれを見送る、衣凛と時充。
無言のまま、ふたりは未来のために何をすべきか考えていた――。

終幕（後書き）

完読してくれて、ありがとうございます。
まず、ひとつよろしいでしょうか。
皆さんは『運命』を信じますか？
私は、信じています。
信じることだけで、どうにかなるとは思っていませんけどね。

「刀匠が生んだ子供は、それが良作であればあるほど必然と多くの生命（いのち）を屠るでしょう。人間は何も考えずにその子供を振るい、次々と血を流している。その罪の重なりは、次第に刀匠を苦しめてゆく。延々と続く殺戮（さつりく）に、刀匠の心は耐えられない。なぜなら、刀匠も人間なのよ。その子供達が屠殺してきた生命（いのち）に、恨みを買われないわけがない。過去、現在、未来……この所業は、現実でも仮想でも繰り返される。誰も、刀匠の気持ちなんて考えずに刃を振るうの！この正宗がまとう妖気は、その……刀匠である正宗の、怒りと苦しみそのものなのよ」

みぞれのこの台詞。
推敲に苦戦していたのは、この部分です。
私としては、仮想の単語を入れてよいものか悩みました。
ですが、正確に伝えるためには必要かなと組み込みましたね。
仮想とは、ゲームなり小説、マンガ、などの作品です。
以前から私は、違和感を抱いていました。
村正、正宗、このふたつに何の違いがあるのだろう、と。
ふたりの刀匠は、日本刀がいかに優れたものかを伝えてくれました。
もちろん、他にも有名な刀匠はいます。
全員を取り上げるわけにはいかないので、名高いふたりの名を借りました。

村正は徳川の天敵、というわけではありません。
徳川の敵だった者が、たまたま村正の銘である刀剣を使用していただけなのです。
それがひとり歩きして、いつの間にか妖刀の代名詞となった。
ですが、正宗はそのような噂などあまり耳にしていません。
というより、揉み消されているのです。
正宗は幕府が抱える刀匠でした。
恨みを買われないように、過保護にされていたという説を耳にしたことがあります。
誰が言っていたのかは覚えていませんが……。
それに私は、ある経緯で刀鍛冶のおじいさんと知り合い、鍛冶についてあれこれ取材したり、色々な話を聞かされました。

自分達が打った作品は、子供も同然。
その子供が、人を殺すことに使用されるなんて……昔の刀匠は、どえらい根性をしてたな。
けどよ、同じ人間だ。平気でいられるはずはねえ。
自分の子供が人間を殺して、そいつらに恨まれて、自分の家族なり親戚なり、危ない目に遭わないはずがねぇのさ。
だってよ？　その刀には、銘が刻まれているんだぜ。
調べれば、すぐに誰なのか解る。
よく考えてみろ。正宗には、銘がないのがほとんどだ。
正宗は、人斬りのために自分の子供が使われたことを悟られないように、わざと銘を打たなかったんじゃないか？

このおじいさんの仮説は、あくまで仮説です。
最初にその話を聞かされて、どことなく腑に落ちました。
あながち間違いでもないような気もしたのです。
刀匠はそれを生業としているため、日記などで自身の思いを書きつづってはいませんが。

もしかしたら、おじいさんの言うように苦しんでいたのかもしれない。
いいえ。もしかしたら今も、安らかに眠れずに悩んでいるかもしれない。
私には霊感とかはないので、想像するしかないのですが……。
それを聞いてから、私の刀匠に対する意識は変わりました。
ゲーム中に登場する刀の名称を見るなり、嫌悪感と罪悪感を抱いたのです。
だからといって、使わないというわけにもいかない。
現に私は、この作品でふたりの名を借りて、苦しめているわけですから。

鍛冶の取材は『ほんとにごめんね』で使わせてもらいました。
ただ、私は短刀ぐらいしか打たせてもらってないので……もう少し取材すれば、鍛冶のシーンに迫力を持たせられるかもしれませんね。

ひとつ注意で、月読命は本来ならば男神です。
この作品では、女神として描いています。

長くなりました。
これからも、私と私の作品をよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7600s/

冥界の巫女

2011年8月11日03時29分発行